宮崎県文化財調査報告書 第16集

昭和四十七年三月

宮崎県教育委員会

宮崎県文化財調査報告書 第16集

目次

一、高原町縄文期包含層調査報告　石川恒太郎……一
二、佐土原町総合農試裏横穴古墳調査報告　石川恒太郎……二三
三、高鍋町牛牧弥生期住居跡調査報告　田中茂……三五
四、宮崎市下北方町地下式古墳調査報告　石川恒太郎……四一
五、西臼杵郡高千穂町横穴古墳調査報告　石川恒太郎……五九
六、西臼杵郡高千穂町奥鶴の箱式石棺調査報告　石川恒太郎……七三
七、延岡市友内山箱式石棺調査報告　石川恒太郎……七七
八、高崎町横尾地下式古墳調査報告　石川恒太郎……八七
九、串間市徳山地下式古墳調査報告　石川恒太郎……九一
一〇、高千穂町田原字染野平横穴古墳調査報告　石川恒太郎……九八
一一、高崎町縄瀬小学校々庭の地下式古墳調査報告　石川恒太郎……一〇六
一二、えびの市島之内の地下式古墳調査報告　石川恒太郎……一〇九
一三、延岡市大貫遺跡調査報告　石川恒太郎……一一五
一四、日向市平岩小学校前の古墳調査報告　石川恒太郎……一二三

一、高原町縄文期包含層調査報告

高原町縄文期包含層調査報告

石川　恒太郎

一、遺跡の発見と豫備調査

この遺跡は西諸県郡高原町大字広原の県立高原畜産高校の校地にあるが、同高校は目下この地に新校舎を建設中で、その実習地に予定されているところに在つた高さ約三メートル、直径約一〇〇メートルの丘地を今年（昭和四十三年）五月ブルトーザーで削平工事中に、土器の破片が発見され、五月二十三日にはほぼ完全形の土器が発見されたことから、地方の人々の注目をひき、高原畜産高校および町役場の人々が調査した結果多数の土器片が得られたので県教育委員会に調査を依頼してきた。丁度五月雨の時季ではあつたが、工事中であつたので五月二十七日雨を犯して県教育庁社会教育課の寺原文化財係長とともに同町に出張し町役場と畜産高校に蒐集されていた土器類を見て現地に向つた。

現地は第一図に示したごとく、高原町の吉都線高原駅の西北約一、七キロの地点で、吉都線鉄道と高原から温谷を経て小林市に通ずる県道に囲まれた台地である。この台地上にあつた前記の小丘地をブルトーザーで削平し削り残された丘地の残りが教条の隆起帯となつていた。写真1.はその状況を示す。しかしさきに土器片が多く掘り出されたのは、この丘地の西側の麓部であつたという。試みに削り残された丘地を見ると、なお諸所に点々と土器の破片が入つていたので、改めて正式に調査することとして帰つた。

二、調査日誌

六月十一日快晴。午前七時、県社会教育課の加藤主事とともに同氏の車で高原町に向う。午前九時前に高原町着、町教委を訪れたが皆現地に行つたというので広原の現地に行く。テントを設け机、長椅子も揃う。町教委の倉掛主事と打合せ、まず残つている丘地の北側のところに長さ二二メートル、巾二メートルの第一トレンチを設定、午前十時ごろ寺原係長と日高正晴委員が到着。丘地の南側の最も土器片が多く出たという地点に長さ十七メートル、巾二メートルの第二トレンチを設定、日高委員の担当とする。この日午後四時野口県教育長現地の調査状況を視察する。午後五時過ぎ現地を引揚げて駅前の霧島旅館に投宿。加藤、日高、石川三人。

六月十二日曇。午前八時過ぎ現場に行く。町職員の到着を待つて調査を始めた。午後は一時から町職員は日曜の注射に行つたので吾々だけで調査を進めたが、間もなく注射を終えた全職員で作業に当つた。しかし午後三時少し前に雨が降り出した。暫時休んで再び作業を始めたが午後四時頃大降りとなつたので己むなく引揚げた。宿で遺物の水洗を行う。

六月十三日雨。作業はとてもできない。仕方がないので昨日の予定通り遺物の整理をし、畜産高校および町役場所蔵の遺物を調査することとした。正午すぎ県立博物館の田中茂学芸員が到着。共に昼食し養魚場および狭野神社を視察、神社所蔵の石器および土器を見て帰つた。

六月十四日雨。雨は降るが午前八時過ぎ現場に行き、残りの丘の最も南側のものを、表上から下まで調べることとし、長さ九メートル（巾一、六メートル）を掘る。正午寺原係長ら到着。午後は降雨中を強行作業し、午後四時旅館に帰り、風呂に入つて暖まつた。日高委員、田中学芸員宮崎に帰る。

六月十五日曇。寺原係長、加藤主事と三人で午前八時過ぎ現場に行き、第一トレンチと第二トレンチの未調査の分を調べ、簡単に現地の実測をなし、正午終つて帰宿。昼食後、倉掛主事の案内で水源地の古文書（隈元民蔵氏所蔵）を見て町役場に至り現場で採集したという石（一種の石皿）を見たが、又雨が降り出したので、雨中を宮崎に帰つた。

第1図 遺跡所在地

三、調査概要

1 地質、地層と遺物包含の状況

この地方は霧島山の麓に当り、古来霧島山の噴火による噴出物をしばしば被つたところである。いまブルトーザーによつて削り取られた残りの帯状の丘地の断面を見れば、ここの土地を形成している土壌の溝成がよく知られるのである。写真2はその状況を示すものである。この写真でも大体知られるごとく、一番上に草の生えている表土（黒色）があるが、この表土の層の厚さは、場所により多少の差はあるが、だいたい三〇センチメートル内外である。これを第一層ということとする。その下に黒褐色というか淡鼠色のボラ層がある。これは明らかに霧島山の噴出物である。その厚さは二十五センチメートル内外である。これを第二層と呼ぶこととする。この下に可なり厚い黒色の土層があるが、その厚さは八十センチメートル内外に及んでおり、この層はこの地方では最も重要な地層である。しかし一層と見えるこの黒土層も、さらによく観察すると、

三つの層に分けることができる。すなわち一番上に黒色の薄い層があり、その下にすこし色の薄い黒褐色の層があり、さらにその下に真つ黒な（暗黒色）層がある。これらの層の厚さは、一番上の黒色の層が十センチメートル内外、その下の黒褐色の層が四十センチメートル内外、一番下の暗黒色の層が三十センチメートル内外である。それでこの三層を第三、第四、第五層と呼ぶこととする。この黒い土の層の下には赤褐色の厚いローム質の層がある。これもまた霧島山の噴出物であつて、その厚さは一メートル内外、場所によつてはそれ以上のところもある。これを第六層と呼ぶこととする。さらにその下に淡紫色の粘土質の層がある。これは非常に厚く、どれまで入つているか解らないほどであるが、よく見ると、ローム層が粘土化したもののようである。これを第七層と呼ぶこととする。

このように七つの地層に分けることができるが、そのうち土器を包含しているのは黒土層の第三、第四、第五の三層であつて、第一、第二層や第六、第七層には土器も石器も包含していないことが明らかとなつた。以下各地点の発掘調査の経過について記そう。

2 残丘の層位的調査

われわれは、前に述べたごとく、ここで第一トレンチと第二トレンチを設定して土器や石器の包含状態を調査し、さらにブルトーザーで削り残されていた数個の残丘のうち、当時最も南側にあつたものを層位的に発掘してその遺物包含の状況を調べたその位置は図版2に示す通りである。これは降雨中の作業であつたから小さい石器や土器片は、或いは若干見落したものがあつたかも知れないが、この地の遺物存在の状況を知るには最も良い方法であると思つたからである。その結果は次の図表に示す通りであつた。

この残丘は頂上の高さ三、三〇メートルで、長さ約四十メートル、巾は一、六メートル内外であつて、その状態は写真1および写真2に見られる通りであつた。このような残丘のほぼ中央を長さ九メートル、巾一、六メートルだけ上から順次掘り崩したのである。なおこの表について一二註解したいのは第1層は厚さ三〇センチメートル、第2層は厚さ二十五センチメートル、第3層は厚さ八センチメートル、第4層は四〇センチメートル、第5層は三十二センチメートル、第6層は一メートル、第7層は九十五センチメートルであつた。尤も第7層はまだ地下に深く入つているわけである。表の最後の%は、全体に対するその層の遺物の%で、遺物の総数は土器片と石器片を合せて一五八点であつた。

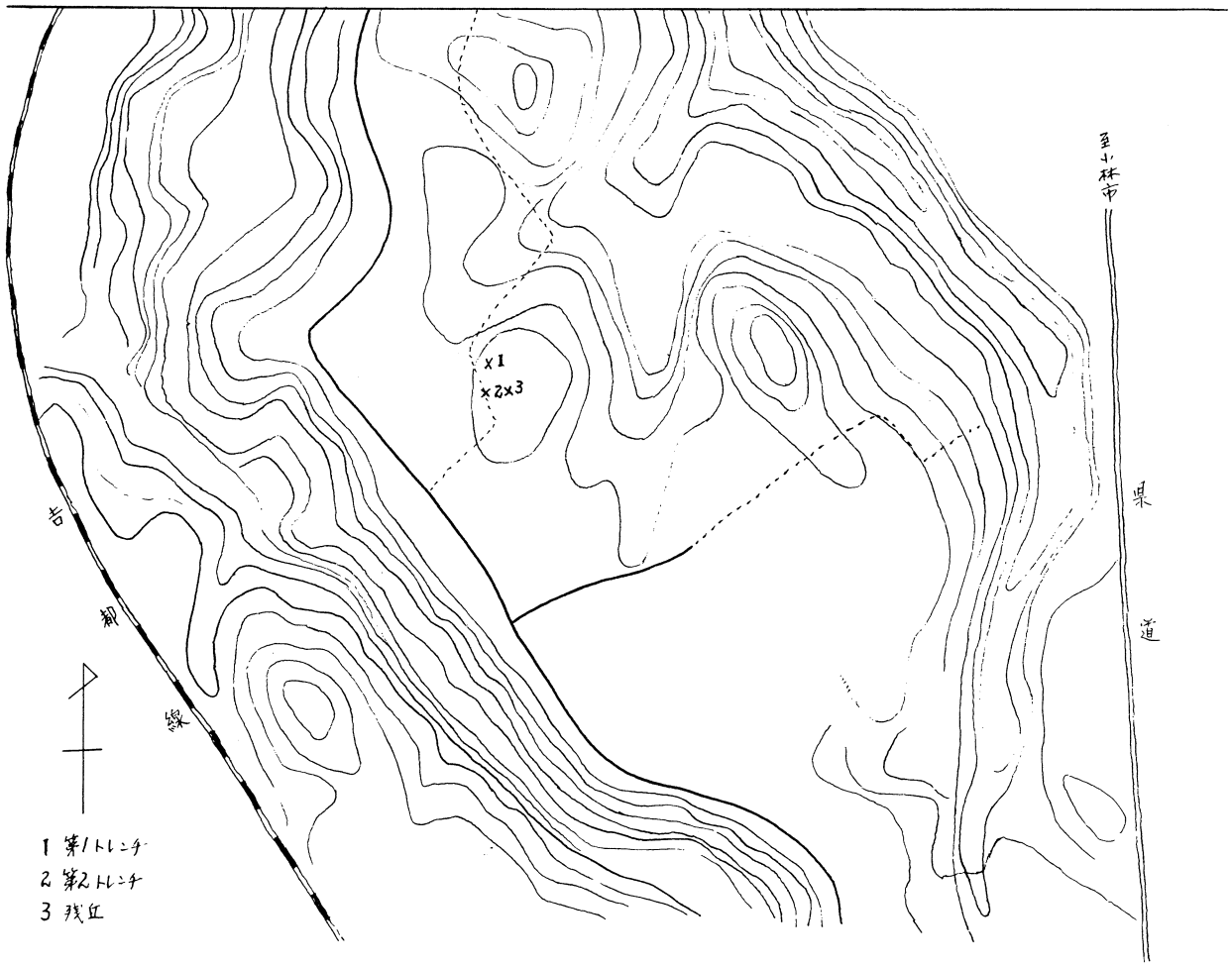
これによつて見ても明らかなごとく、ここの地層のうち、遺物を包含していたのは第3、第4、第5の三層のみであつた。そしてこの三層は前に述べた黒色土層内にあり、この層はわれわれの祖先の生活の跡を残している文化層であつて、最も重要な層であるが、この三層について見れば、もちろん場所によつてこの比率は異なることもあろうが、第4層が最も多く遺物を包含しており、全体の六〇%を示した。第5層（三十四%）がこれに次ぎ第三層（六%）が最も少なかつたが、これはその層の厚さに比較しても当然のことと思われるのである。

さてこの調査で知られた遺物は、第3層からは黄色で無文の土器片と、拓影(1)に示した表面は褐色で裏面は赤く、肩部と思われるところに数条の突帯文を有する土器片とが見出だされた。破片が小さいので、この程度の発掘で決定的な結論を出すことは困難であるが、右の黄色で無文の土器は弥生式土器と考えられる。問題は突帯文土器片であつて、拓影(1)に見られるごとく、表面は薄い刷毛目の調整が施こされており、裏面は赤くて無文である。この種の土器は県下の弥生式土器にあるので、これまた弥生式と見てよいものと思う。例えば宮崎市の阿波岐原町などの弥生式土器にも、この種の突帯文土器があり、これは弥生の前期末か、中期初頭に当るものであると思われる。従つてこの土器も同時代のものと見て良いであろう。石器も破片で、むしろ原料であるが、黒曜石とチャート（燧石）であつた。

第四層の遺物は、土器は第三層と同じような黄色無文の破片と、拓影(2)に示した黄色で数条の突帯を有するもの、拓影(3)に示した

図版2 高原町広原遺跡附近地勢

(高原都市計画による)



高原町広原残丘遺物包含状況

種別 / 層位	土色	土器 数	土器 形式	石器 数	石器 石質	%	
Ⅰ	黒（表土）	0	ナシ	0	ナシ		50cm
Ⅱ	黒褐（ボラ）	0.	ナシ	0	ナシ		25cm
Ⅲ	黒	8	弥生式、突帯文（拓１）	2	黒曜石片、チャート片	6	8cm
Ⅳ	黒褐	87	突帯文（拓２）、貝殻文（拓３）（拓4） 条痕文（拓５）、黄色土器、高坏脚部 黄色繊維痕、口唇部刻文（拓６）	8	黒曜石片、チャート片、 粘板岩、砂岩	60	40cm
Ⅴ	暗黒	49	二条平行沈線文（拓７）、条痕文（拓８ １０） 凹線文（拓９）　貝殻文（拓１１） Ｉ形連続文（拓１２）	4	黒曜石、チャート 頁岩、砂岩	34	32cm
Ⅵ	赤褐（ローム）	0	ナシ	0	ナシ		1m
Ⅶ	淡紫粘土質ローム	0	ナシ	0	ナシ		95cm

見事な貝殻施文土器、拓影(5)に示したような条痕文の土器片、また口唇部に刻目をつけたもの（拓影(6)）さらに高坏の脚部らしいものなどであつた。これらのうち黄色無文のものや突帯文（これは突帯に刻目がある）などはやはり弥生式と見るべきで、拓影(5)に示した条痕文は、稲の葉を当てたような繊維の痕を示しており、県下の弥生式土器に普通に見られるものである。だからこれも弥生式と見るべきであろう。また高坏の脚部らしいものは、赤褐色で厚く、横に不規則な条痕をもつており、これも弥生式と思われる。拓影(3)に示したものは「く字」口縁の深鉢らしい土器の破片で、表面は褐色、裏面は赤いが、裏面には貝殻の背面で調整した上に、腹縁による見事な圧痕文を斜めに平行させ、くの字に折れた下側にも斜めに圧痕を施こしている。また裏面にも（拓影(4)）貝（ハイガイ類）の背面による調整が見られるのである。これは串間市下弓田その他で見られる貝殻文土器の代表的なもので、縄文後期のものと思われる。また拓影(6)に示したものは口縁部の小破片であるが、口唇部に刻目をつけているもので、縄文土器である。石器は、やはり破片で、黒曜石片、チャート片、粘板岩、砂岩の破片であつた。なお第三層にあつた黒曜石片は黒色であつたが、ここのはやや灰色を含むものであつた。

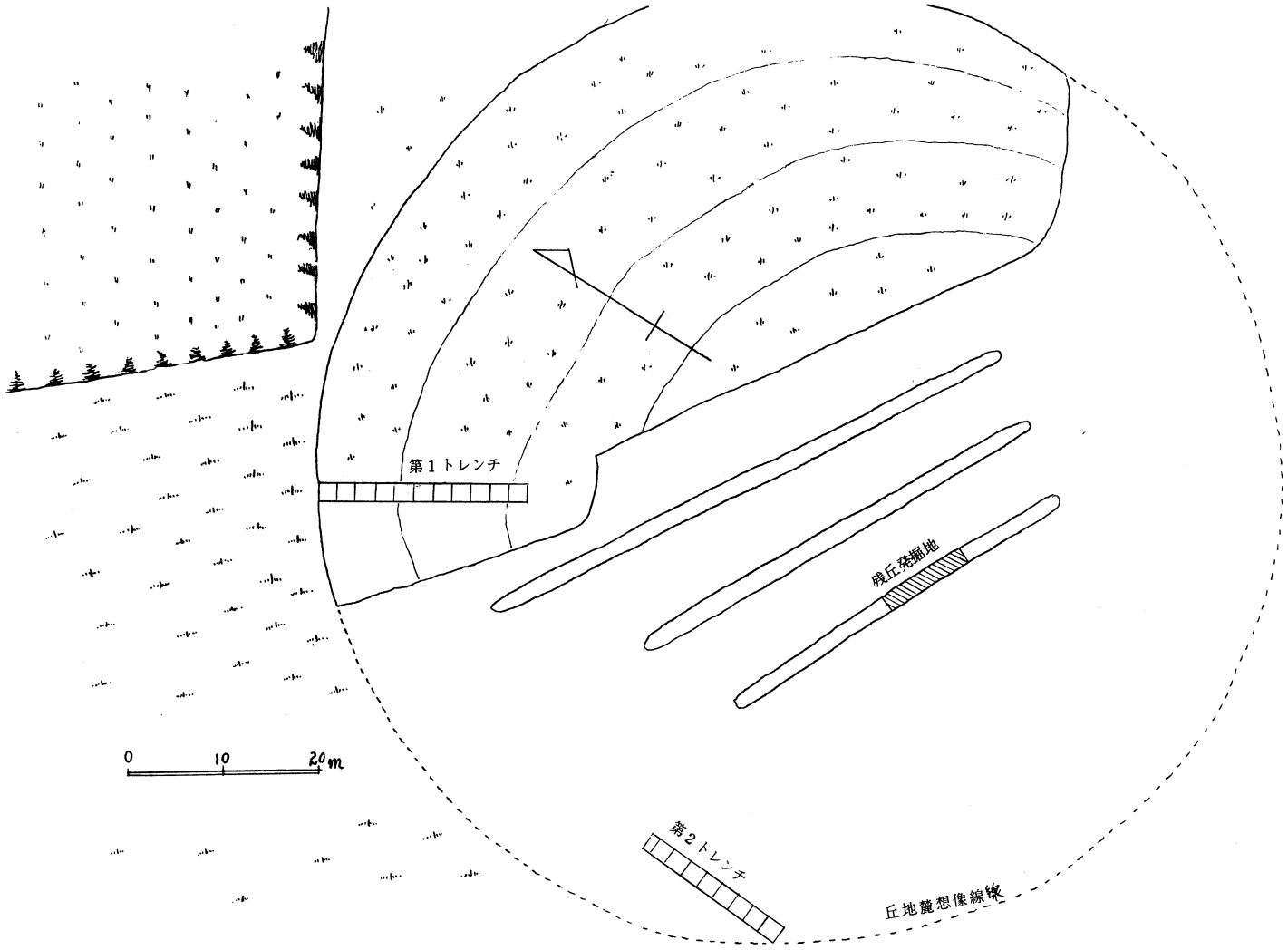
第五層の遺物は、土器片は拓影(7)より(12)に示すもののほか、黄色、褐色の無文の破片もあるが、拓影(7)は黄色の土器片で、壷か甕で腹部と思われるところに箆描きの二条の平行沈線が描かれている。後に触れる高原畜産高校で発掘した完全形の弥生式土器の肩部に二条の箆描きの沈線があるのを思い出すが、この破片も弥生式である。また拓影(8)と同(10)に示した破片も、イネ科の植物の葉の繊維痕を有するもので、やはり弥生式と見るべきであろう。拓影(9)に示した破片は、破片が小さいのではつきりしないが、同じ遺跡から前に見いだされているものと比較して見るに、これはやや太い凹線に刺突文を混える阿高式土器系統の破片と思われる。阿高式土器は九州中期に比定されていることを注意すべきであろう。拓影(11)に示した破片は外が黒く裏は褐色であるが、外側には媒が硬く附着していて、そのために拓影が能く採れないほどであり、この土器が深鉢形の煮沸器であつたことを示している。また胎土には金雲母を含んでいて、前にこの地で黄金を含む土器といつて騒がれたものは、この種の土器であつたことが知られる。これも貝殻文を有する縄文土器である。さらに拓影12に示したものは破片が小さくて明瞭を欠いているが、ここの遺跡から発見されている他の破片と照合すると、頻る変つた文様で、褐色の土器の表面に、細い線で横、縦、横とLの字を連続させたような文様を描いたもので、角に当るところは小さい円形となつている。このような文様は、県下はもちろん、県外でも未だ知られていないもので、われわれはこれをL字連続文と呼ぶことにした。これが縄文期の土器であることはいうまでもない。石器は黒曜石（黒色）チャート、頁岩、砂岩などの破片であつた。

この場所は極めて狭い所であつたので、これをもつてこの遺跡の基準とはなし難いが、これによつてここの遺跡の一応の目安は立てることができたのであつた。

3 第一トレンチの調査

第一トレンチは、ここの丘地のまだ削り取られていない北部の、北に傾斜したところに、北部の先端を丘地の裾に置いて、ほぼ南北に長さ二十二メートル、巾二メートルとして設定した。これは言うまでもなく、まだ荒されていない土地の状況を調べたいと思つたからである。その位置は図版3に示すごとく、第二トレンチの北方四十五メートルぐらいのところであつた。そしてこのトレンチを二メートルきざみにして十一区に分けた。写真3がこれである。（写真4は第二トレンチ）しかし天候の関係と、下方（北方）に行くに従つて地層が下向きに傾斜していたので、遺物の包含層は次第に深くなつていたから、第六区以下は表土とボラ層を除くのに非常な労力を要したので到底この人数では掘ることはできなかつたため、第六区は少し掘つた程度で中止し、その上の五区間を主として調査することとした。それでも延長十メートル、巾二メートルであつた。

図版3 発掘地附近見取図



第一区は丘地の周縁から二十二メートル～二十メートルの上方に位置していたが、ここの第四層で弥生式土器の破片と木炭粉とを多く発見した。それでここに住居址があるのではないかと思つたが、地層が黒土なので確認することができなかつた。弥生式土器は黄色の張付口縁をもつ壷形と思われる破片であるが、第五層では肩部に三条の突帯をめぐらす、部厚い褐色の壷形らしい土器の破片を発見した。写真5はその出土状態である。また拓影Aはこの土器である。また同じ第五層から拓影B、同Cに示すような縄文土器の破片を採集した。拓影Bは太い凹線文と刺突文より成るもので、阿高式に系統を引くものであるが、口縁がく字をなしている点が阿高式と異なり、後期土器の形式を示している。胎土に金雲母を含む土器である。拓影Cは同じく凹線文で渦状文と平行沈線より成る珍らしい文様で、平行沈線はその光端が円い穴となつている点でさきに記したL字連続文と、線の大小はあるが、同じ手法を示している。表面黄色の土器で、あまり類例を見ないものである。石器は第五層からチャート製の石鏃破片やサヌカイトの破片が出土した。

第二区は第一区に続く二メートル四方の部分で、ここも第三層に弥生式土器片が多く見いだされ、第一区とともに住居址があるものと思い発掘を後に残した。そして最後の日に一区とともに、さらに第四層を掘ると、写真7の左上に見える弥生式の大きな甕形土器の口縁部破片が見いだされた。これは口縁が外側に直角以上に円く反つた褐色の土器で肩部に高い突帯文を数条めぐらしている。このほか刷毛目文、それに口縁が広く外反していわゆる朝顔形となり首部に突帯をめぐらす破片、底が細くなつた弥生中期の底部破片、また拓影Dに見える鋸歯突帯をめぐらす土器破片、それに自然石を打ち欠いだ鋭利な石庖丁形石器二個を発掘した。また第五層には一区に近いところに炉跡と思われる所があり、赤く土が焼け木炭粉もあつたが、そのすぐ傍らに拓影Eに示した土器片があつた。これは深鉢形と思われる土器の口縁部で、口縁はくの字になつているが、これに乱れ模様とでもいうように貝殻腹縁の圧痕を縦横に走らせている。それと拓影下に示した縁帯に連点文を持つ縄文土器の破片および拓影Gに示した横平行線文を施こされた土器の破片があつた。しかもこれと同じ層位に弥生式中期の外に折れた口縁の先端に溝をめぐらしている壷形土器の破片があつた。写真6はその土器の出土状況を示し、写真7の下段の土器がそれである。またここでは黒曜石片やチャート片、その他の石器を見出した。

第三区は第二区の下に続く二メートル平方の部分で、ここでも第三層からは黄色の肩部に鋸歯突帯をもつ拓影Hに示した土器片をはじめ弥生式土器片を多く採集した。第四層からは口縁が直角に外反した写真7の下段にある弥生式土器片、その上にある口縁が直角以上に外に曲つた口縁を持つ土器片、これは写真7の左上に見える第二区の土器と似ている。やはり弥生式である。また口縁が直角に外反し、その先端に円孔を周らし、その下の首部に突帯をめぐらす弥生式の壷形破片など、それに混つて拓影I、同Jなどのような貝殻文の縄文土器片も発見された。また第五層からは、拓影K、L、Mに示したような縄文土器片や底の一部で、表面は褐色を呈し貝殻による縦の調整が施こされている直立の底部などが見出された。拓影Kは首部突帯に貝殻文のある土器で、拓影I、同Jとともに串間市下弓田で見た縄文後期土器と同様のもので、拓影Lは爪形文または連点文土器で縄文後期のものである。また拓影Mは太いタッチの凹線文であるが、甚だ浅く、串間市下弓田の縄文後期の土器にこれに似た文様のものがある。従つてやはり同期のものと考えられる。石器は石匙の折れと見られるチャート、黒曜石片は黒と灰色の二種、それに頁岩の自然石を石庖丁か石斧様に割つたものなどが見出された。

第四区は三区の下に続く二メートル平方の地であるが、ここでは第三層で拓影Nに示した縁帯に斜めに貝殻圧痕文を施こしたものや、黄色の弥生式土器破片などを採集した。この縁帯文は鹿児島県の市来式と呼ばれる縄文後期の土器と同じである。第四層からは弥生式の大形の壷と思われるものの破片、熔岩を用いて作つた石鏃の破片などを見いだした。第五層からは薄くて硬い焼きの西平式（縄文後期）土器の破片を発見した。

第五区は四区の下に続く二メートル四方の地で、ここでも第三層

からは弥生式の突帯を有する土器片等を発掘し、第四層から拓影Qに示したやや太い横凹線二条の下に貝殻圧痕文を施こした土器や黒曜石片、硅岩を打ち欠いだ石匙様のものなどを発見したが、拓影Qは串間市下弓田などで発掘された土器と同じで、縄文後期のものである。さらに第五層からは拓影OおよびPに示したような縄文土器の破片などを発見したが、第五区は前四区に比して遺物は極めて少なかつた。この拓影Pの土器は、表面は黒褐色で裏面は赤く、箆描きらしい二条の沈線の下に張り付けの突帯をつくり、この突帯の上に爪形の細線を並べているもので、口縁は山形をなしているようである。これも縄文後期のもので、拓影Oは破片が小さくて明瞭でないが、綾B式ではないかと思われる。

第六区は五区の下に続く二メートル四方の地であるが、天候と日程の関係で第三層を掘つただけで、弥生式土器破片や粘板岩製の石器破片を得ただけであつた。

以上が第一トレンチを発掘した結果の大様であるが、以上に見てきたごとく、第一トレンチで発掘された土器は、縄文土器はほとんど後期の土器であり、弥生式土器はほとんど中期の土器で、若干後期のものを含んでいることが知られた。そして層位的に見れば、弥生式は主として第三層に多く、第四、五層にもあつた。縄文土器は主として第四、五層に多く、第三層にもあつたが、これは元来、縄文土器は第四層、第五層にあり、弥生式土器は第三層にあつたのであるが、弥生期に竪穴住居を営んだ際、第四、五層に掘り込んだものと考えるのが妥当ではなかろうかと思うのである。発掘場所が狭いので、確言することは困難であるが、諸所に炉跡と見られるものがあることは、この考察を支えるものと思うのである。

(附)高原町役場および畜産高校採集の遺物について

われわれが直接発掘した遺物については、すでに述べたごとく、天候の関係で、発掘した遺物の数量はあまり多くはなかつたが、われわれの調査以前に、高原町役場や同町教育委員会および県立高原畜産高校で採集された遺物が相当の多量に及んでいた。それでそれらの遺物について二、三所見を述べたいと思うのである。

遺物は大部分が土器で、石器も若干含まれていた。土器は弥生式と縄文式に大別され、弥生式は口縁が首部に直角に外反し、首部や肩部に突帯または鋸歯突帯をめぐらすものが多く、底部は細まり腹部の張つた深鉢形、壷形や甕形のものと推定され、これらは宮崎市阿波岐原町などに多い中期土器の特長を示すものである。弥生式土器で最も注目されるのは写真8に示した殆んど完全な壷形土器で、この土器は高さ十二センチメートル、口の直径七、四センチメートル、腹部の径九センチメートル、底部は直径四、四センチメートル、高さ一センチメートルの平底で、美しい形を呈し、肩部に細い二条の沈線が周らされているのみである。この土器は形が弥生初期の板付式土器に似ていることから、板付式土器と考えられていたが、細かく点検すれば、全体的に重心が板付式よりやや高く、底部が高いことが一層重心を高くしている。また肩部の二条の細線であるが、宮崎市江田原の板付式は、これが二条の突帯であること、などの点を比較すれば、初期のものより可なり形が崩れていることが看取される。だから鋸歯突帯文をめぐらす深鉢形土器とともに、やはり中期初頭のものとなすことが妥当であろうと考える。

縄文土器は甚だ種類が多く、形体、文様ともに面白いものが多いが、最も多いのは山形口縁の下弓田式または市来式に属する貝殻文土器で、拓影Iに示したものもその一つである。また拓影IIは御手洗式で縄文に凹線文を配したものである。拓影IIIは阿高式で、これ

は縄文中期の土器であるが、他はほとんどみな後期のものである。これらの土器の中で特に注意すべきものは、拓影Ⅳ、同Ⅴに示した貝殻圧痕文と沈線文を交錯させた文様の土器で、これは深鉢または甕形と思われ、内部も外部も赤褐色で内面は貝の背面で調整されている。全体の器形を知ることはできないが、この地方独特の文様ではないかと考えられ、将来これが追究を行う必要がある。また拓影Ⅵに示したものは、前に述べたL字連続文で、鹿児島県の指宿、春日町に似た細線土器があるが、やや趣きが異うようである。要するに縄文土器は大部分が後期のもので、中期のものを若干混じている程度である。

石器はわれわれが発掘したものと大同小異であるが、町役場に保管していた大きな石は、表面を平滑に磨いたようにしている点から見て、一種の石皿で木の実や澱粉を漬したりする台としたものであろうと思われる。

さて以上の調査の結果を綜合して考察すれば、ここ高原町広原地方は、霧島山の山麓に当るため霧島火山の噴火によってその被害を受けたことは、古来しばしばであった。ここの地層の大部分が火山の噴出物の堆積によって成っていることでもこれを知ることができるが、第六層と第七層とは何れも火山の噴出物（主として火山灰）より成るもので、その堆積の厚さによって、この火山の噴火がいかに激しかったかを知ることができる。もちろんこの時代には人類はここに住むことはできなかった。人類が始めてここに住みついたのは、縄文時代中期からであったと思われる。それは今から六千年ぐらい前のことであったらしい。しかし中期には少数の人が住居したに過ぎなかったが、彼等は主として狩猟の民であった。ついで縄文後期になると、獲物が多くなり、住民の数は相当に多くなった。だがこの間にも、霧島の噴火はしばしばあり、盛んな噴火の間はもちろん住居はできなかった。そして弥生期の中期から後期近くまで住居したらしい。しかし表土下のボラ層が示す大噴火によって、また人跡を絶つに至ったものと思われるのである。

写真1　削り取られて残った丘地

写真2　削り残された丘地の地層

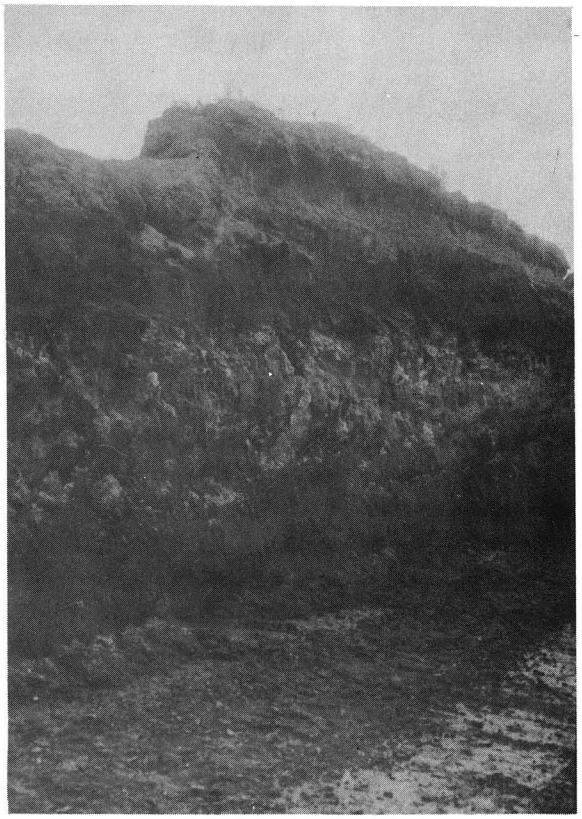


写真3　第　1　ト　レ　ン　チ

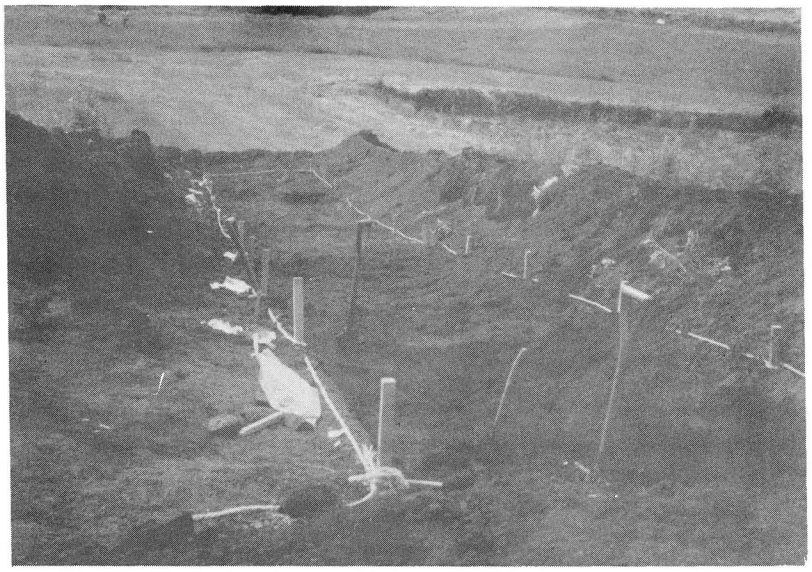


写真4　第　2　ト　レ　ン　チ

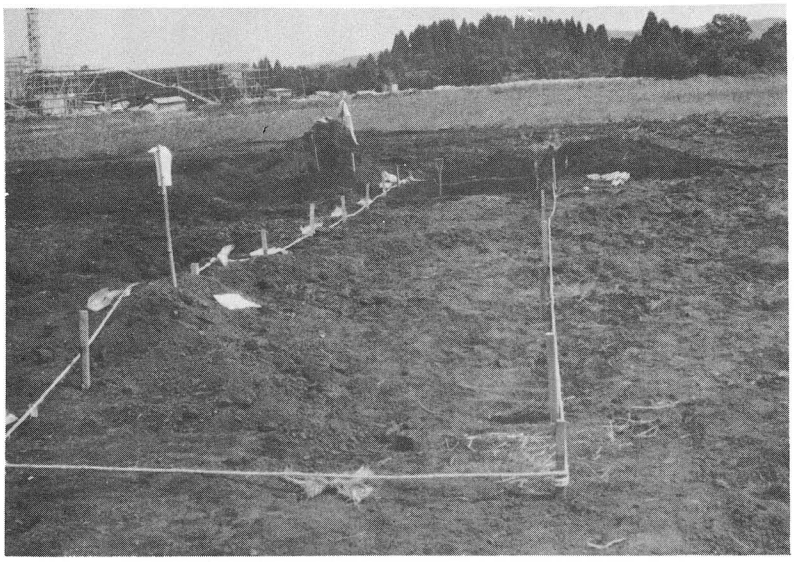


写真５　第１トレンチ第１区土器出土状況

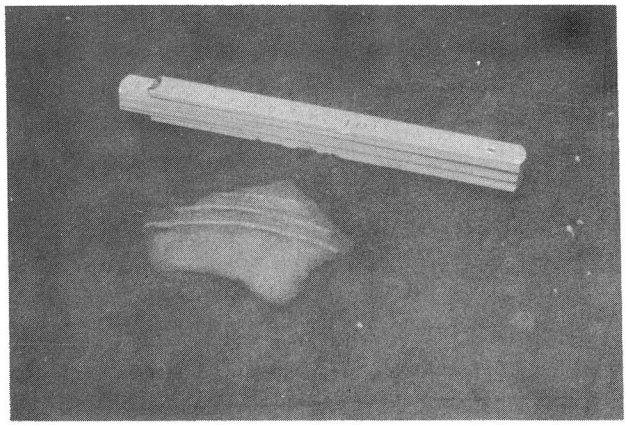


写真６　第１トレンチ第２区土器出土状況

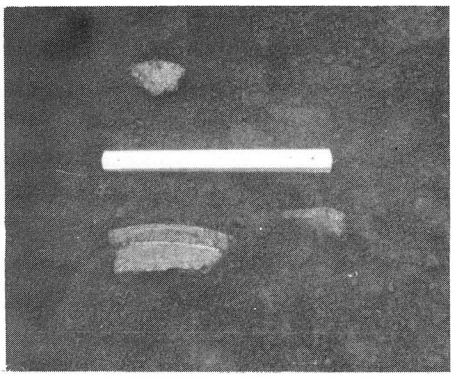


写真７　第１トレンチ出土の弥生式土器

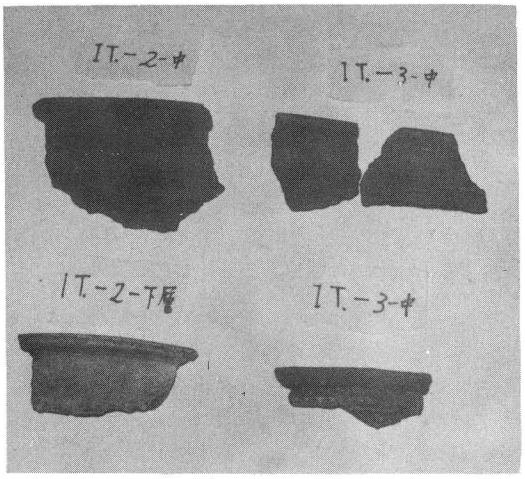
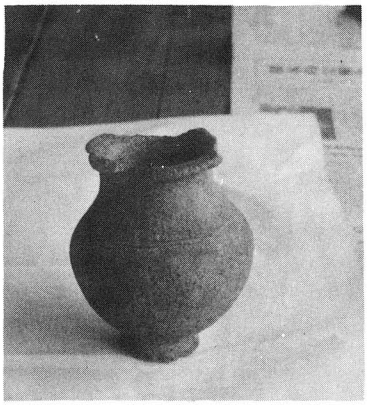


写真８　高原畜産高校発掘の弥生式土器

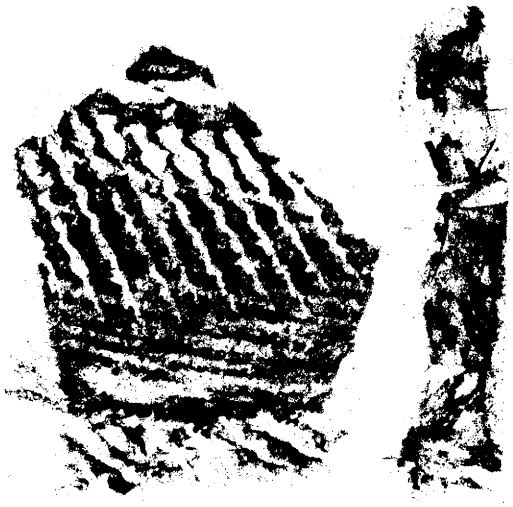


第３．４層の土器片拓影

(1)

(2)

(3)



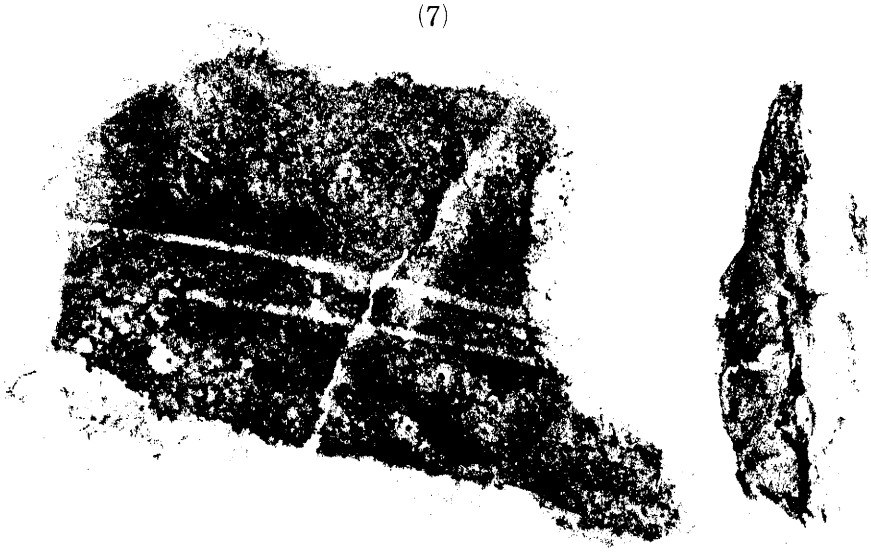
(4)

(5)

(6)

第５層の土器片拓影

(7)



(8)

(9)

(10)

(11)

(12)

第１トレンチ　１区の主な土器拓影

(A)

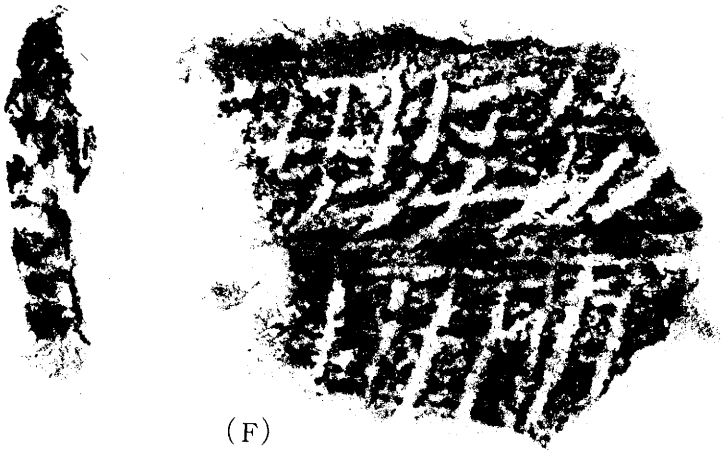
(B)

(C)

第１トレンチ　２区の主な土器拓影

(D)

(E)

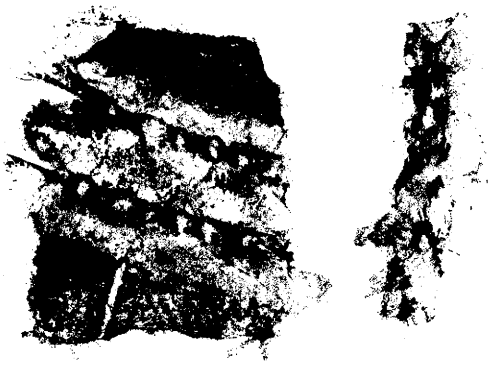


(F)

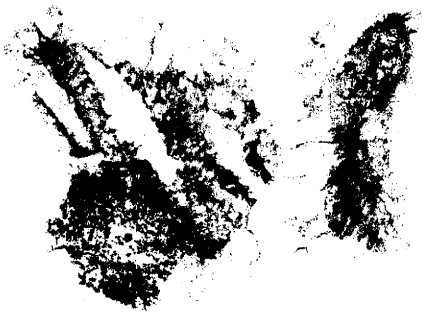
(G)

第１トレンチ ３区の主な土器拓影(1)

(H)



(I)

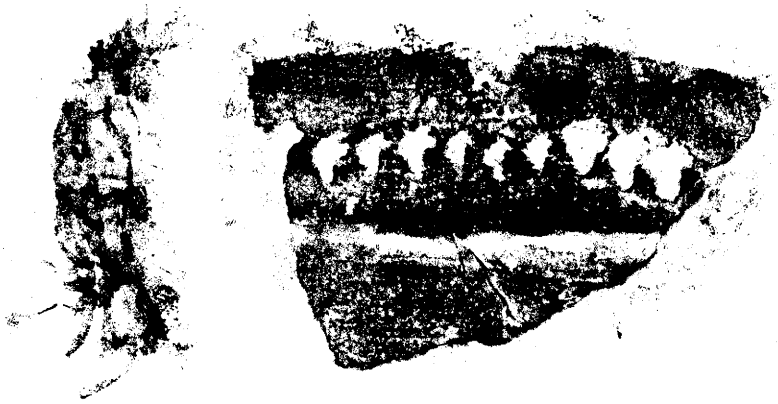


(J)

(K)

第１トレンチ　３区の主な土器拓影(2)

(L)

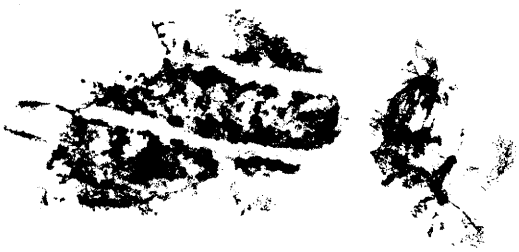


(M)

第１トレンチ ４区．５区の主な土器拓影

(N)

(O)

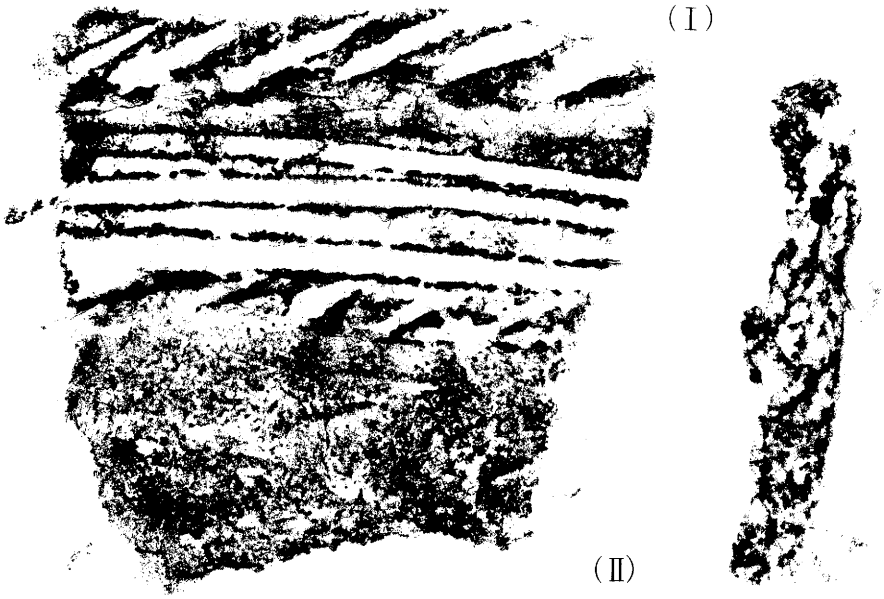


(P)

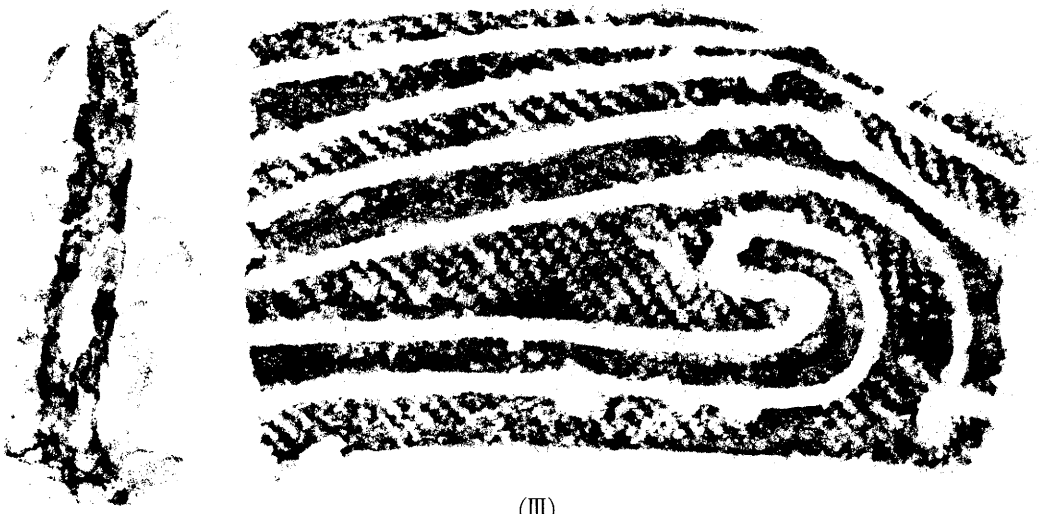
(Q)

高原町役場および畜産高校採集土器拓影

(Ⅰ)



(Ⅱ)



(Ⅲ)

(Ⅳ)

(Ⅴ)

(Ⅵ)

二、佐土原町総合農試裏横穴古墳調査報告

第1図　遺跡所在

佐土原町県総合農試裏横穴古墳調査報告

石川　恒太郎

一、所在と発見の動機

宮崎郡佐土原町大字下那珂字城ケ峯の県立総合農業試験場裏山の丘地を整理中、昭和四十三年十月横穴が三基発見されたと連絡があつたので十月十六日県教育庁社会教育課の加藤主事と現場に行つた。ここは同試験場本館のすぐ西側の丘地で、この丘上には盛土墳もあり、嘗て弥生期の貝塚や住居址を調査したのであつた。横穴が見つかつたのはその麓で、ここの東向き斜面を掘つた際、弥生式土器の包含層があつたが、古墳があつたのは、同じ場所の南向斜面であつた。その位置は第1図に示したごとく、宮崎市と佐土原町との境界に近いところで、宮崎市の国鉄住吉駅と佐土原町尾原部落の中間で、石崎川に近く丘地が突出している最も東端に近い場所である。この南向きの斜面をブルトーザーで削つたところが東西に並んだ三基の横穴が発見されたわけで、もつとも左（西）側のものから少し左にも今一基あるようであつたが、今回は工事を急ぐための緊急調査として、すでに開口した三基を調査し、未開口の一基はそのまま保存することとした。この状況は写真1に見られる通りであつた。そこでこの三基を東の方から第一号墳、第二号墳、第三号墳と名づけた。

まず西方の第三号墳から調査したが、意外に遺物が多くして捗らないで、さらに県社会教育課の久保主事補の来援を求めて漸やく午後四時過ぎ調査を終つた。さらに翌日は県文化財専門委員日高正晴氏と県立博物館主事田中茂氏が第一号墳と第二号墳とを分担して調査された。（石川記）

二、調査の結果

第一号墳

第三号墳

第三号墳は三基の古墳のうち最も西側にあつたもので、まず玄室を覗いてみると、写真2に見られるごとく壷その他の遺物が床面に転がつていたが、工事関係者の話によつて、これは他の二基の穴にあつたものをここに入れたものであるということであつた。それでこの古墳も既に荒されたのではないかと思つたが、調査してみると、この古墳の遺物はみな十種内外の粘土質の堆土の中に埋まつていたので、この古墳はまだ荒されていなかつたことが判明した。

A　古墳の構造

この古墳は山丘の中腹にある厚い砂岩の層に羨道と玄室を設けているもので、南を羨道とし、北に玄室を置いているが、古墳の中軸線はほとんど西南から東北に方位している。羨道は先端部を切られていたが、現存の総長四、四十八メートル、羨道は長さ二、十メートルで、ほぼ玄室の中央につき、巾は玄室との接点で一、四十三メートル、先端部に行くに従つて狭まり、末端では巾八十四種となつていた。高さはだいたい一メートルで天井はアーチ形をなしていた。羨道の床面は、玄室の接点から外に行くに従つて低くなり、玄室との接点と先端との高さの差は二十二種であつた。しかし天井がこれに伴なつて低くなつているので高さはほとんど変らない。それにしても羨道が甚だ長いことが知られる。

玄室は第2図に見られるごとく、長さ二、三十八メートル、巾は奥で二、三十メートル、羨道との接点に近い東方でも同じであるが、多少東にゆがんだ形となつている。玄室の床面には敷石などはないが、奥壁から一、三十メートルのところから一段低くなつていて、その線から奥が屍床のようになつていた。玄室の床面も、奥から口にかけて少し傾斜しており、奥壁から四十五糎の東方まで床面は十八糎傾斜し、それから屍床の東端まで約八十糎は平坦で、屍床は約十糎高くなつており、その下から羨道の接点まで、また傾斜してその差は十二糎となつている。だが、この傾斜は羨道に引き続いて、

一般に見られるように、羨道が特に低くなつている事実はない。これは第2図縦断図に見る通りである。また床面には排水溝などの施設はなかつた。天井は穹窿形で、頂上部が剝落しているため、現高は屍床から一、七十三メートルあるが、もとは一、六十ぐらいであつたものと思われる。

遺物は第2図に示すごとく、極めて豊富で、鉄器の破片もあるが総数五十点に達し、特に土器が三十一点を数えた。まずこれらの土器類は玄室の入口を塞ぐがごとく、およそ六列に並べられていた（写真3、4参照）が、羨道の玄室に近い外側に二個の須恵の提瓶と埴器の坩が置かれていた。これが第一列で、その内側に須恵の蓋坏と坏六個が一列に並べられ、その内側にまた須恵の蓋坏と坏七個が並べられ、その内側には埴器の盌と須恵の蓋坏三個が並び、さらにその内側にやや離れて須恵の蓋坏と坏と甕が並び、その内側に須恵の坏と蓋坏六個が並べられていた。そして最後に屍床のすぐ下の東寄りのところに埴器の深坩と須恵の高坏が置かれていた。

また金属器では、金環が須恵器の六列目のほぼ中央（第2図二十三）に一個、鉄製の鈴が須恵器の四列目と五列目の間（第2図十八）に一個あり、その他鉄鏃は第2図の十三、十九、二十、二十二、三十三、三十六、三十七、三十九、四十、四十一、四十四の位置に、玄室内の西から北を取り巻くような形に約十一があり、玄室の北西隅に近く馬具の破片があり（第2図三十八）金環の近くには刀の破片（三十四）があり、また須恵器の六列目の蓋坏と蓋坏の間（三十二）と埴器の深鉢の北方（四十三）に鉈があり、その他鉄片がその間に散在していた。

この遺物の配置を見るに、この古墳の主体はもちろん屍床の上に一体または二体が葬られていたものと思われるが、土器の第六列と屍床との間に約五十糎の空地があり、ここに金環があつたことから見て、ここにも一体が追葬されていたのではないかと思われる。異状に多い土器類の副葬と、入口に水または酒を容れる提瓶と坩とが三個あること、などから以上の推想を生ずるのである。このことは高鍋町光音寺の横穴古墳が、提瓶または平瓮を玄室の入口附近にそれぞれ一個ずつ置いてあつたことと対照されるのである。

B 遺物

この古墳には遺骨はなく、副葬品は金環一個を除いては鉄製品と土器とであつた。用途別にすれば装身具と武器、馬具、工具と土器である。

1 装身具

A 装身具は金環一個のみであつた。

A 金環 一個

二つに折れて銹化甚だしいものであるが、経三糎である。

2 武器

武器は刀と刀子および鉄鏃であつた。

A 刀 破片

第2図三十四がこれで、刀柄部で現存の長さ七糎、巾一、八糎、厚さ〇、七糎である。

B 刀子 破片

現存の長さ四糎、巾二糎である。

C 鉄鏃 十数本

銹着しているものがあつて確実な数を挙げ難いが、第2図十三のものは柄部で、十九のものは三角形のもの四～五本が銹着している。同図二十のものは鉾形で、写真5の上段右から三番目にあるのがそれである。三十三のものは柄部で、二十二のものは剣身形で写真5の上段左から三番目のものがそれである。同三十六のものと三十八のものは三角形で、写真5の上段右の二本がそれで右端（三十七）のものは長さ十糎、刃巾三糎である。同三十九、四十は破片で、四十一のものは刀身形で長さ十、五糎、刃部の長さ三、五糎、巾一糎である。写真5㊀上段左端のものがそれである。四十四はその右側のもので同じく刀身形である。要するに本墳の鉄鏃は平

根のものと尖根のものがあり、その数は相半ばしているようである。

3 馬　具

A　馬具は第2図三十五と三十八にあつたもので、写真5の下段左にあるごとく、三十八のものは喰で、三十五のものは鐙の一部のようである。

B　鈴も馬具の一部と見られるが、銹化しているが径四、五糎、高さ三、五糎で音を発する。写真5の下段中央がそれである。

4 工　具

工具は鉈だけであつた。

A　鉈　二本

これは第2図の32と45にあつたもので、32のものは長さ九、二糎、穂の長さ二、八糎、穂巾一、八糎である。43のものは柄部で、現存の長さ九糎である。

5 土　器

土器はこの古墳のもつとも特徴的な遺物で埴器と須恵器の別がある。

㈠　埴器

埴器は須恵器に比してその数が少なく、第2図2に見える坩と、同15に見える盌、および同42の深鉢の三個であつた。

A　坩　一個

写真6の下段三個が埴器であるが、坩はその左端のものである。底の一部を欠損しているが、ほとんど完全で、高さ二〇糎、口径は九、七～一〇、四糎で、口縁は直立し、肩から腹部が膨れており、底は平底である。口縁の高さ二、五糎、腹部の径一九糎、底径は七糎である。

B　深鉢　一個

写真6の中央のもので、口縁を一部欠損しているが大体の形を知ることができる。高さ一八糎、口径一四～一五糎で、口縁はやや外反し、胴の張りは著じるしくなく、底部でしまつている。底はやや高く、底径七、五～八糎で底面に木葉形をもつ木葉底である。

C　盌　一個

写真6の右端のもので、口縁の大部分を欠損しているが、高さ一一糎、口径は約一三糎（推定）で、底は径六、五糎の張付で、器の縦横に文様がある。

㈡　須恵器

須恵器は埴器に比してその数が甚だ多くその合計は二八個に及んでいる。その内訳は提瓶二個、甕一個、高坏一個、盞坏一四個、坏一〇個である。

A　提瓶　二個

これは第2図1と3に在つたもので、1は写真6の上段左端にあるごとく、口縁を一部欠失している。現高二二糎で首部は高さ四、五糎口縁がやや開いた形で、口径は約一〇糎であつたろうと推定されるが、首の付け根の径は五、五糎である。胴は表が高く、裏は扁平で、胴の高さ一二糎、直径は一八糎である。両肩部に耳があり、耳は高さ一、五糎、巾一、八糎、厚さ一、七糎で、その形は下に曲つた亀の足のようである。この提瓶にはサ字形の窯印がある。

3のものは少し小形で、写真6上段の中央のものであるが、高さ二〇糎、口縁が長く、高さ五、五糎、これも口唇部が広く、口径七、五糎、その根部は径四、五糎である。胴の径は一五糎で、胴の高さ一一糎である。これも両肩部に径一、五糎内外、高さ〇、七糎のボタン状の耳がついている。

B　甕　一個

これは第2図31にあつたもので、写真6上段右端のものである。口縁を一部を残して欠失している。高さ一八、五糎、口縁が皿状

に拡がつており、首部の高さは一二、五糎、首部の付根は径三、五糎である。胴は径一〇糎である。底に孤の中心部に直線を立てたような形の窯印がある。

C　高坏　一個

これは第2図49のところにあつたもので、写真8の上段右端にあるものである。総高一六、五糎、坏部の径一一、五糎、同高さ四糎で二段となつており、中央の平行線の下半分に貝殻腹唇文を斜めにめぐらしている。脚部は坏部の底から下底までラッパ状に拡がり、坏部の接点の径四、五糎、底径は一一、三糎で、脚は坏の下四糎とその下七糎の二区に三個ずつの円冊形の透しを設けている。

D　蓋坏　一四個

これは写真7および写真8の下段に示したもので、写真7は上段右から5号、6号、7号、8号、中段右から9号、11号、17号26号、下段右から27号、28号、30号であり、写真8の上段は右から45号、46号、50号である。

5号は口径一四糎、唇径一一、四糎、唇部の高さ〇、九糎、全体の高さ四、五糎で、摘みはなく頂上に渦文に十字形の窯印がある。

6号は口径一四糎、高さ四糎、唇径一一、五糎、唇高一、一糎で摘みも窯印もない。

7号は口径一五糎、高さ四糎、唇径一二、二糎、唇高一、一糎で左巻きの円内に中の凹んだ一字を書いたような窯印がある。

8号は口径一四、三糎、高さ四糎、唇径一一、二〜一二糎、唇高〇、八糎、左巻きの円の窯印がある。

9号は口径一四、七糎、高さ四糎、唇形一二糎、唇高一、二糎、窯印左巻き円。

11号は口径一三、五糎、高さ四糎で口唇はなく、摘みは高さ〇、九糎、径二糎で宝珠形に近い。

17号は口径一三、二〜一四、三糎と歪んでおり、高さ四糎、唇径も一二、三〜一〇、七で唇高は一、一糎、窯印はない。

26号は口径一五、五糎、高さ五糎、唇径一三、五糎、唇高一、二糎で窯印はない。

27号は口径一五糎、高さ四、五糎、唇径一三糎、唇高一、一糎で、左巻き円の窯印がある。

28号は口径一四、三糎、高さ三、五糎、唇径一二糎、唇高一糎で、左巻き円の窯印。

30号は口径一四、五糎、高さ三、五糎、唇径一二糎、唇高一、一糎、窯印は不明。

45号は口径一四、八糎、高さ四糎、唇径一二、五糎、唇高一糎で窯印はない。

46号は口径一五、五糎、高さ四糎、唇径一二、八糎、唇高一糎で、右巻きの円を描いた窯印がある。

50号は口径一四糎、中央部が凹んでいて高さ三、五糎、唇径一一、五糎、唇高〇、八糎でサ字形の窯印がある。

E　坏　一〇個

これは写真9と写真8の上段に示したもので、写真9は上段右から4号、10号、12号、16号、下段右から21号、25号、29号で、写真8の下段は右から47号、48号である。

4号は口径一三糎、高さ三、五糎で、口縁の一部を欠損している。窯印はない。

10号は口径一四、五糎、高さ四糎で左巻きの円の窯印がある。

12号は口縁の一部が欠損しているが、口径一四、五糎、高さ五糎で、斜めに平行二直線を描いた窯印がある。

16号は口径一四、六糎、高さ四糎で、大小の孤線が上下に組み合つた窯印がある。

21号は口径一四、五糎、高さ四糎で、二線を斜めに平行させた窯印がある。

24号は口径一三、七糎、高さ三、五糎で窯印はない。

25号は器形が歪んでおり、口径一三、五糎、高さ四、五糎、左巻き渦状の窯印がある。

29号は口径一三、五糎、高さ四糎で斜め十字の接点から下に直

線を下した窯印がある

47号は口径一三、二糎、高さ四糎で窯印はない。

48号は47と同じ大きさであるが、底の低い所に破片が附着しており、小さい左巻円の窯印があり、また自然釉が見られる。

以上に記したごとく、蓋坏と坏とは非常に多く、これを蓋坏の蓋と身と見ても一〇個と蓋が四個余る勘定となる。またこれらの蓋坏や坏には同じ窯印のものがあつて、それらは同じ窯で焼かれたことが知られる。これは第1号の提瓶と第50号の蓋坏とが同じ窯印であることも注目すべきである。さらに窯印の異なるものがあることから、これらの須恵器や埴器は、幾つかの異なる窯で焼かれたものと見るべきで、これはわれわれの家庭に幾つかの異なる窯の陶磁器があるように、この時代の人も物々交換によつて、周辺の各地の窯からその製品を需めたものであることが知られる。なお注目すべきは第11号蓋坏で、これには身とかみ合う唇と名づけた部分がなく、また頂上に摘みがあり、その摘みも表面が扁平なものではあるが、やもり上つていて、可なり時代が降るものであることを示している。

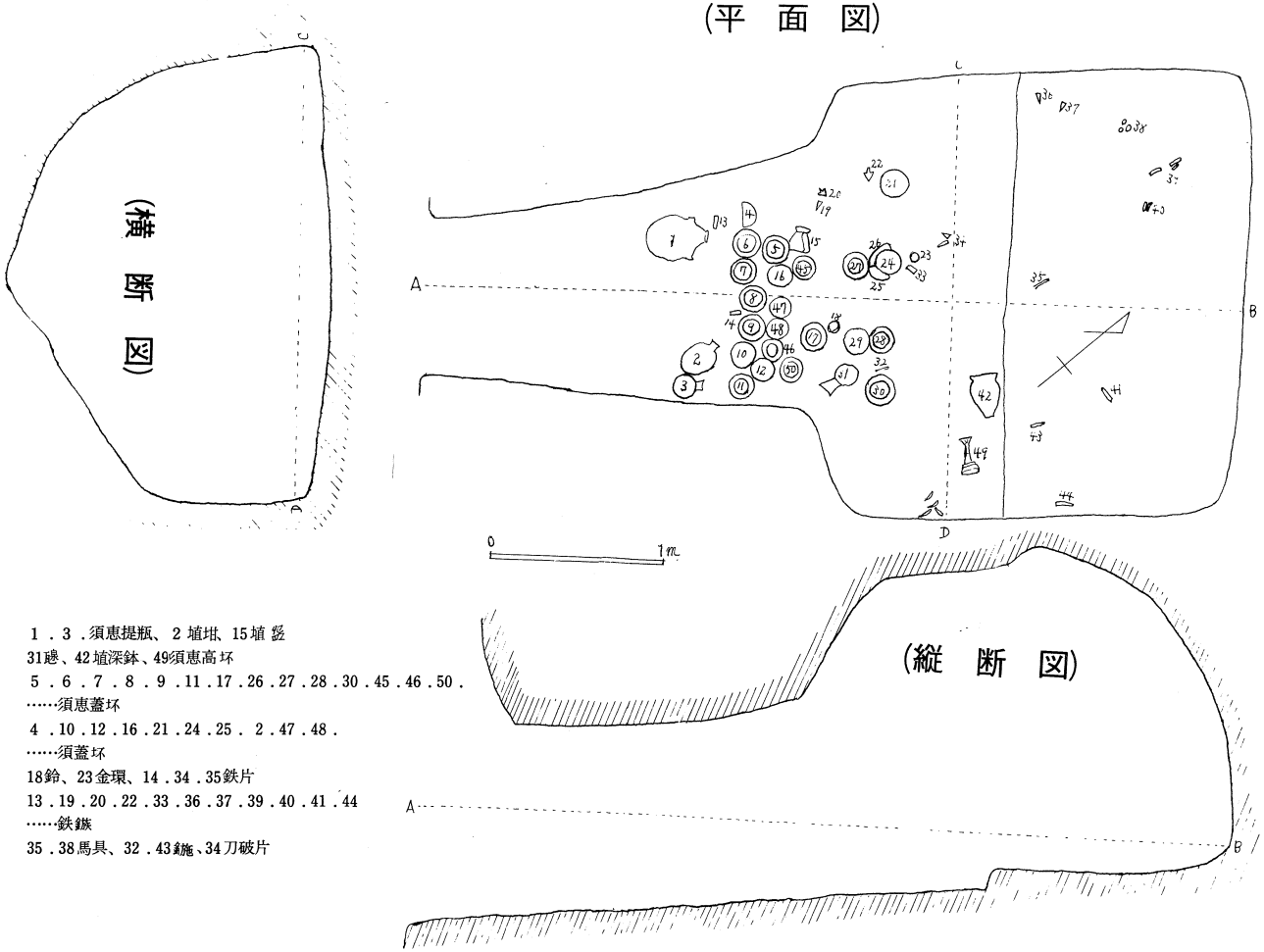
四、古墳の年代

以上三基の古墳の調査結果を記したが、この三基は何れも同時代のものであつて、古墳時代後期のものである。しかもその構造は、宮崎市蓮ヶ池や池内などで見られる四注造り家形の玄室ではなく、天井は半球形であり、二号、三号では、羨道と玄室との区切りは明確に造られているが、羨道の両側に閉塞用の削り込みもない。これらのことはこの古墳が、形式的に蓮ヶ池などのものより降るものであることを示している。それでこれは六世紀の後半から七世紀の初めごろのものと思われる。もつともこの古墳は家族墓であつて、相当永く使用されたわけで、遺物にも、蓋坏を見ても摘みのない古式のものと、摘みがあつて口唇のない奈良時代ごろのものと思われるものも入つている。これによつてもかなり永く使用されたことが知られる。

初めに記したごとく、ここには調査した三基のほかに、さらに写真1に示した左上の方に一基の存在が知られている。まだあるかも知れないが、このような横穴古墳は蓮ヶ池でも見られるように、三基、四基または五基などが一グループをなしており、このようなグループがさらに幾つか集まつて大グループをなしているのがその特徴である。これは父家長制と呼ばれる家族制度に基づくもので、父家長制家族は、単婚家族を幾つか含む戸より成るものであるから、墳墓においても、これら一つ一つの横穴は単婚家族の墓であり、ここに見られる四基の穴は四個の単婚家族の墓で、この全体が某氏という一戸の墓であるわけである。そしてそれらの人々は、ここの水田を耕作した農民であつたと考えられる。（石川記）

第２図 佐土原町県立総合農業試験場西方横穴古墳第３号実測図

(平　面　図)



凡例

1．3．須恵提瓶、2 埴坩、15埴 器
31甕、42埴深鉢、49須恵高坏
5．6．7．8．9．11．17．26．27．28．30．45．46．50．
……須恵蓋坏
4．10．12．16．21．24．25．2．47．48．
……須蓋坏
18鈴、23金環、14．34．35鉄片
13．19．20．22．33．36．37．39．40．41．44
……鉄鏃
35．38馬具、32．43鉇、34刀破片

写真１　開口した３基の横穴古墳

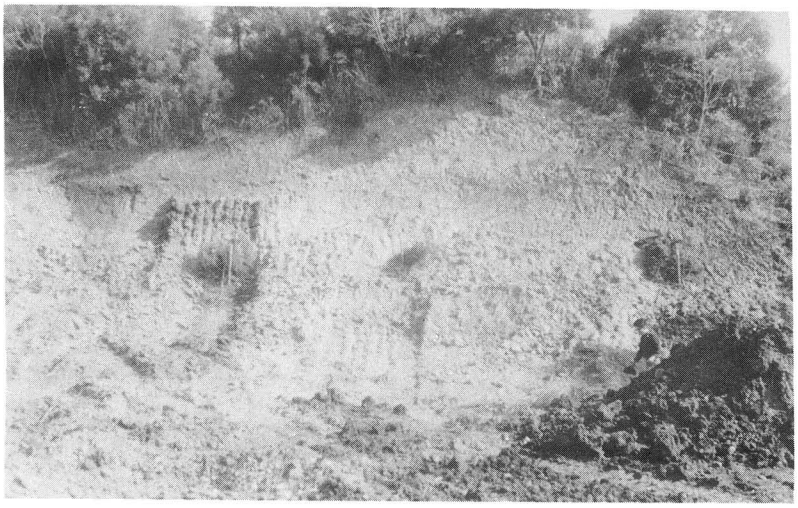


写真２　発掘前の第３号墳内（遺物は他墳のもの）

写真3　土器の埋まっている状態

写真4　同　　上

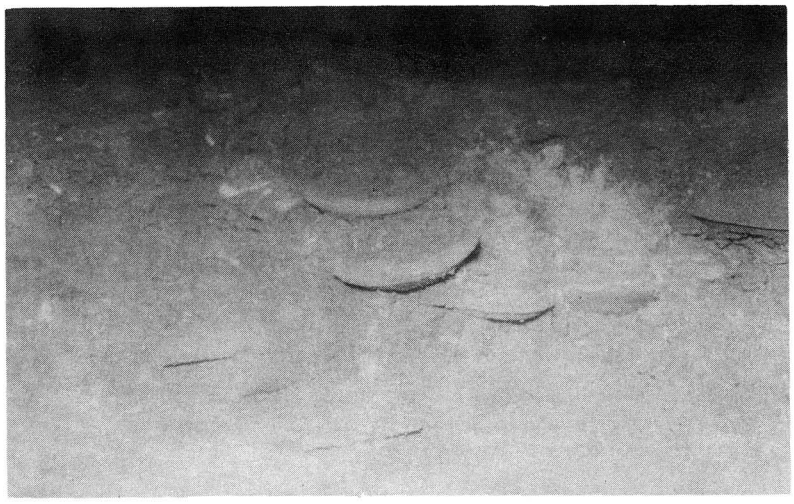


写真5　鉄器と金環（右下）

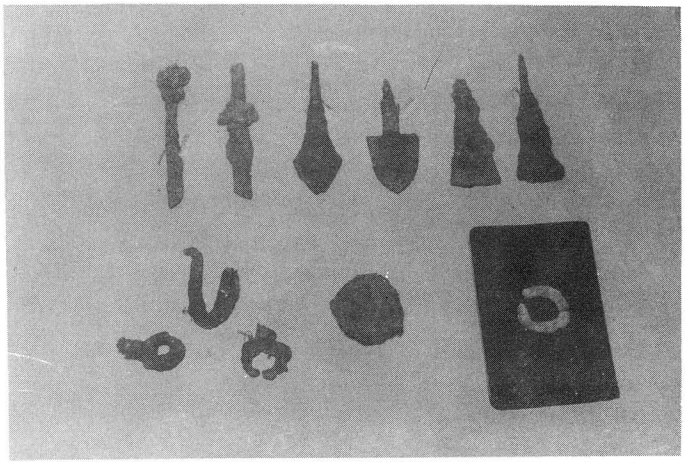


写真6　上 左から提瓶、同 瓿
下　同 坩、深鉢、盌

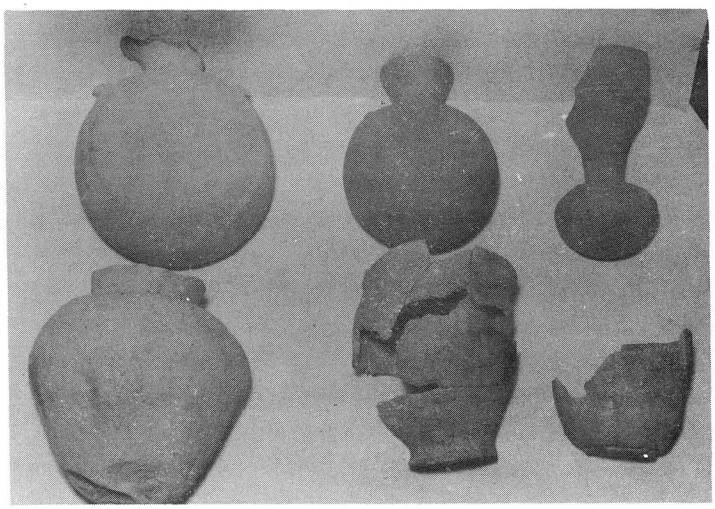


写真7　蓋　　坏

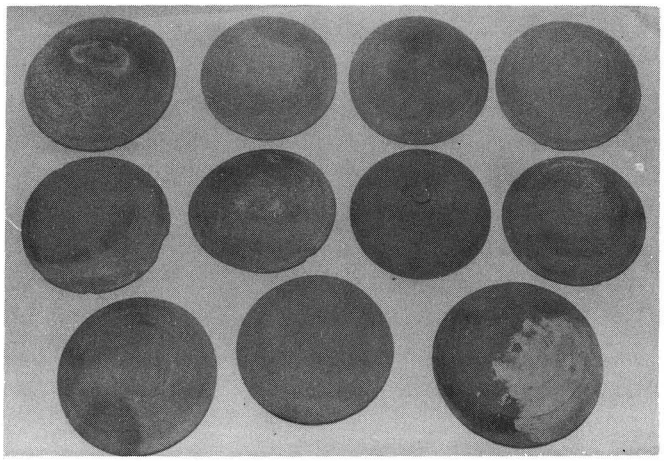


写真8　上・坏と高坏、下・蓋坏

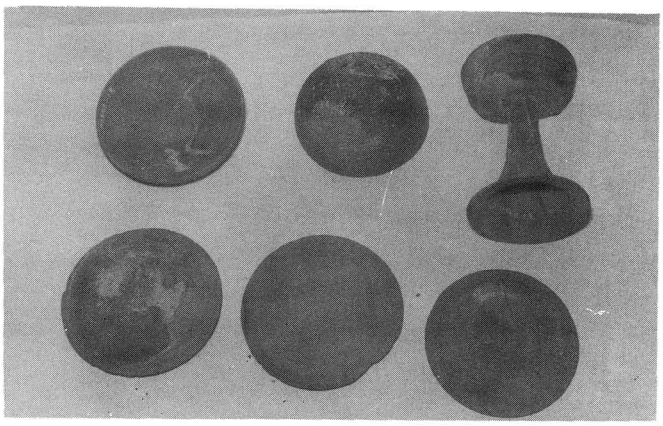
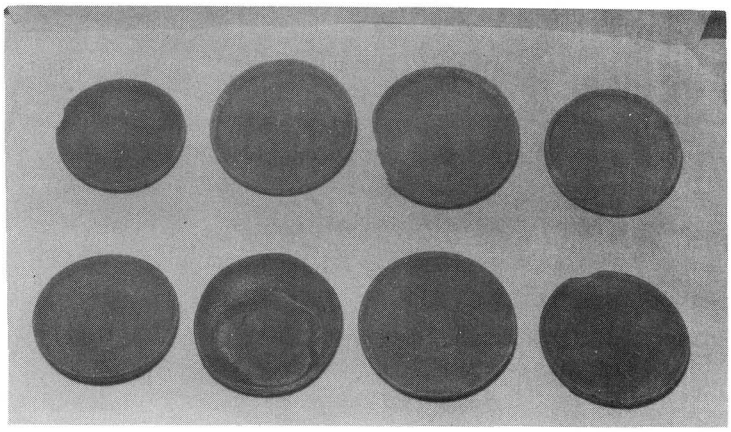


写真9　須恵坏



一号横穴調査

田中茂

昭和四十三年十月十七日、県教育委員会社会教育課から横穴の調査依頼があり、宮崎郡佐土原町下那珂の現地へ急行した。前日までは、石川、日高の両県文化財専門委員が二号、三号の横穴調査に当たっていたが当日は参加されなかつた。報告者が現地に到着したときは、社会教育課の加藤、久保の両職員が一号横穴の土砂を排除していた。この土砂は、ブルドーザーのため羨門部及び玄室前部の天井が破壊され落下したものが主であつた。当横穴は写真のように開口した三基のうち東端に位置し規模は最小であつた。午前中で落下した土砂のほとんどを排除し、午後からは、両職員が西都原台地へ他の用務のため移動したので工事監督者の協力を得て残つた土砂の排除や副葬品の発見、構造の調査に当たつた。

(2)

横穴は、第三紀層の軟質砂岩を掘さくして構築したもので羨道部と玄室部からなつている。中軸は、N十五度W、全長は羨門部の床面端から二、一メートルで規模の小さい横穴である。しかも形がいびつで玄室の方向は主軸に対して三十度西に寄つている。したがつて羨道部の両側壁の長さは等しくなく東側壁が一、一メートル、西側壁は〇、八五メートルと差がある。また、羨道と玄室の境になる袖は撫角を示し本来の性格を失ないかけているとみられる。羨門の天井は破壊されているが、高さは推定五七センチ程度、玄室寄りで五五センチ、断面はアーチ形である。

玄室の天井前部は、これまたブルドーザーのため破壊され写真のように落下しポッカリと穴があいていた。床面は楕円形で室は平入り断面はアーチ形である。奥行き一、〇五メートル、輻一、六五メートルの狭さでふたり入るのがやつとであつた。床面周囲には、輻、七センチ程の排水溝がめぐらされ羨門前部の排水施設に続いていた。玄室床面のレベルは羨道部に対して奥壁下で一〇センチ高くなつているが屍床としての特別な施設はなかつた。

副葬品は、玄室東寄りに須恵の蓋坏が二個相接して東西に置かれ、西側の坏には貝片がはいつておりその周囲には、有機質のしみが広がつていた。二個の蓋坏の中間北側には、土師の小坩があり、なかには粘土質の流入土が充満していた。さらに、蓋坏の位置から一二センチ北側には、刀子が粘土質の土にまみれて東西に置かれていた。

これらの副葬品の位置と玄室の広さから考えると被埋葬者は未成人で頭部を東にしかも土器の近くに置き下半身を西側にして葬られていたとみられる。さらに刀子の位置は胸部に当たるようである。前述のようにこの横穴は形がいびつであるので屍体は中軸に対して約一二〇度程度交差して埋葬されていたと考えられる。なお、奥壁直下の排水溝から鉄鏃の残欠を発見した。

閉そくについてみると、羨門床面との比高で約一〇センチ低く上部幅一〇センチの溝が羨道床面に平行して掘られていた。おそらく蓮ケ池横穴群で見られるようにこの位置が閉そく地点であろう。蓮ケ池の場合は、礫（河原石）の集積を羨門部でしばしば見かけたが当横穴では発見できなかつた。従つて考えられることはこの地層を形成している軟質砂岩のブロックが閉そく石として利用されたのではないかと言うことである。

(3)

副葬品は、前述のとおりいずれも玄室内から発見されている。土器は、須恵の蓋坏二個と土師の小坩一個、鉄器は、刀子と鉄鏃の残欠であつた。また、蓋坏の中には貝片が残つていた。

蓋坏　二個とも完形品で蓋をしたまま出土した。西側、すなわち中央寄りの蓋坏は、蓋の口径一四、六センチ、器高四、四センチ。身の方は、口径一四センチ、器高三、三センチで中には貝片が直立したまま残つておりその周囲には有機質のしみが広がつていた。東側の蓋坏では、供物は消滅していたがやはりしみが認められた。蓋の

計測値は、口径が一三、二センチ、器高三、九センチ。身の方は、口径が一〇、七センチ、器高三、八センチである。

坩　色調は赤褐色、焼成良好で表面はよく研磨調整されている。頸部は直行、口縁部はわずかに外反し、腹部の最大径は中位にある。口径七、五センチ、器高一〇センチ、腹径一一、二センチである。

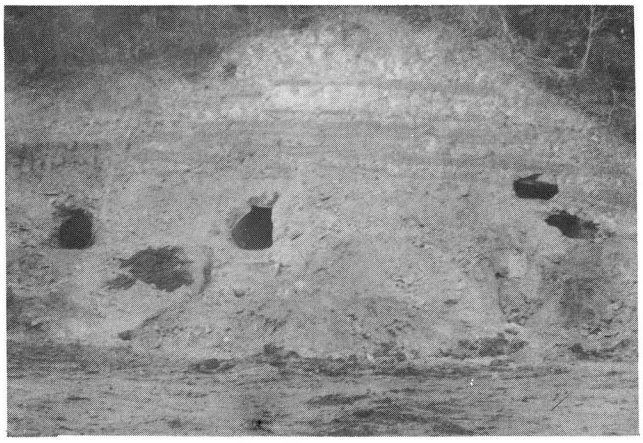
刀子　長さ一四、二センチ、刃区、棟区もあるが棟区の方が刀先の方に寄つている。茎の長さは棟区まで三センチ、身幅は区よりで二、六センチ、中央で二センチである。

貝片　貝片は、西側の蓋坏内部の一方に写真で見られるように直立した状態にあつた。貝は、池沼に産するイシガイ科のドブガイとみられる。残部の長径は八、三センチで、輪切りにした方を下にしてやわらかい供物の中に坏の底部に届くまで突きさしていたのどはないかと想像される程であつた。貝片両側付近の底部にはしみが一面に固着していた。もちろん貝片の直立もこの有機質状のしみが接着の役目を果たしていたのである。しみの量は、貝片のまるみにつつまれた内側が顕著であつた。ここで、供物としての貝片についてみると、つぎのようなことが考えられるのではなかろうか。その一つは、遺物である貝片すなわちドブガイだけを供物したという考え方と、もう一つは、貝片が一方に片寄りしかも直立したままの状態にあつたということから坏に二種類の供物が盛られそれを区分けする役目として貝片が用いられたのではないかということである。いずれにしてもこのような供物が蓋坏の中から発見されたことは県下ではまことに珍例で貴重な出土と言える。

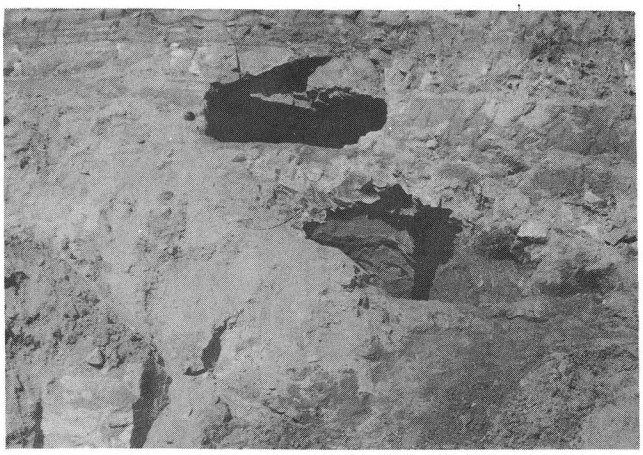
(4)

一号横穴は、玄室が方形プランでしかも家屋形に構築された横穴構造型式から推移退化したもので天井はアーチ形になり床面も楕円形になつている。また、玄室と羨道の境に当たる袖も退化しわずかに境界が認められる程度になつている。従つて横穴構造の型式上では後期のものである。さらに、副葬品の須恵の蓋坏、土師の坩も後期の型式であり地方波及の時間差を考慮しても六世紀末頃の所産とみられる。これらのことから一号横穴は、六世紀末から七世紀前半の間に築造されたものであろう。

註　ドブガイの同定は江坂輝弥氏などによる。



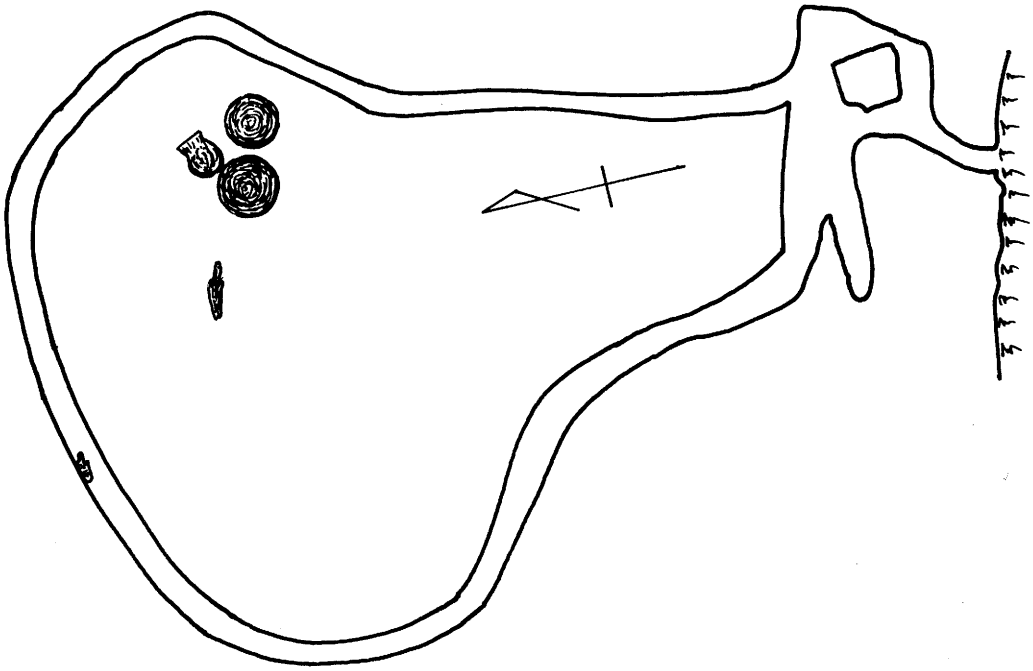
左より3号．2号．1号横穴

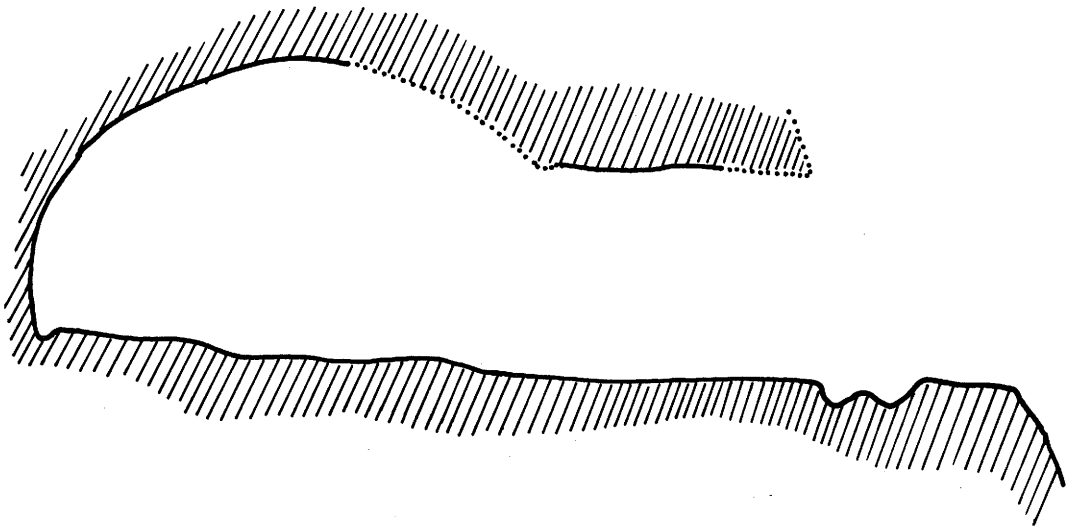


1号横穴手前の穴が羨道部

1号横穴の土器出土状態

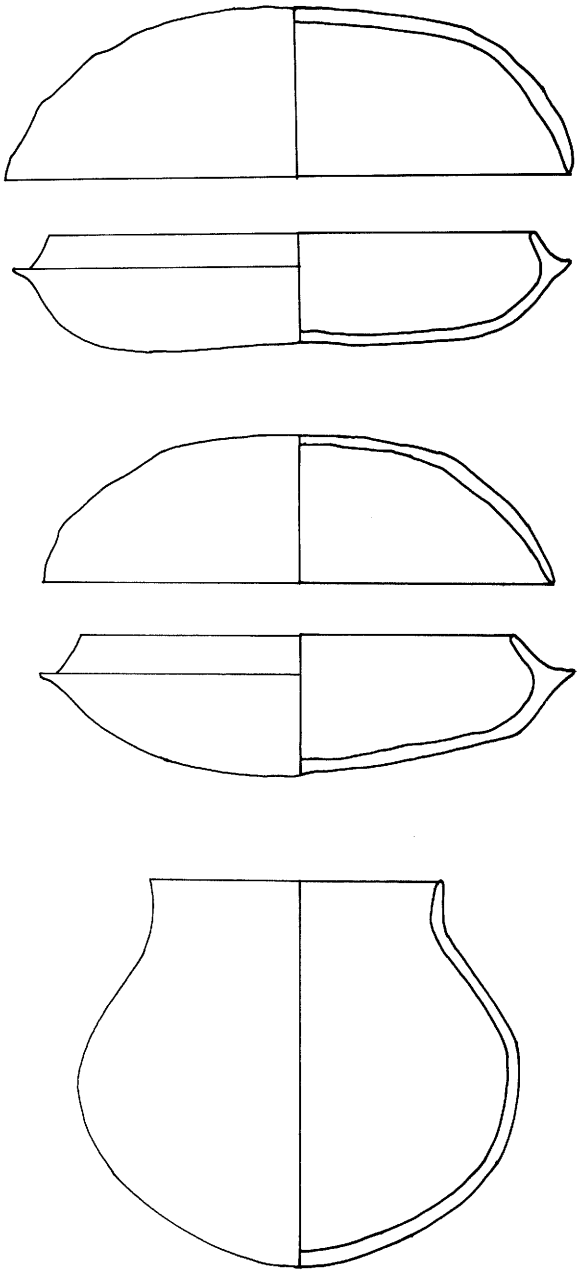
1号横穴実測図





（縮尺20分の1）

1 号 横 穴 出 土 土 器

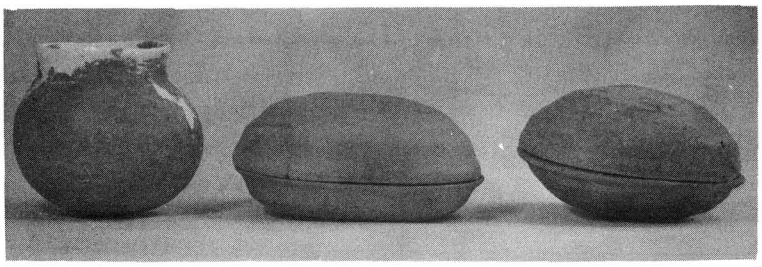


須恵器蓋坏（上・中）

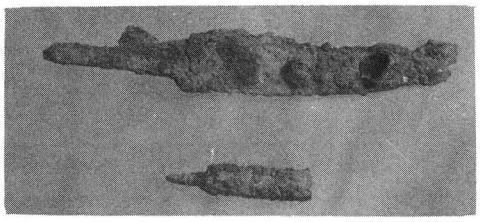
土師器坩（下）

（縮尺２分の１）

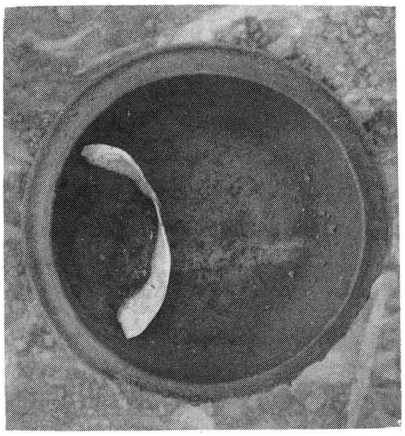
1 号 横 穴 出 土 品



左より土師器坩、須恵器蓋坏



(上) 刀子、(下) 鉄鏃残欠



坏内に直立した貝片、黒く
見えるのは有機質のしみ

三、高鍋町牛牧弥生期住居跡調査報告

高鍋町牛牧の弥生期住居跡調査報告

石川　恒太郎

一、所在と発見の動機

遺跡は児湯郡高鍋町の県立高鍋農業高校の西方丘地上にある。ここは標高八十メートルの台地で、高鍋町より西都市に通ずる道路の南側に位置している。（図版1参照）ここの台地は弥生期の集落址らしく、住居跡が広く分布しており、最近ここに同高校の豚舎や鶏舎などが建設された際にも弥生式の土器片などが多数発見され、事務所に保存されているが、昭和四四年一月十三日、堆肥用の溝を掘つた際、写真1に示した弥生式の完全な鉢が一個発掘されたので、町教育委員会に届け出で、町教委より実地の鑑定を求められた。丁度一月十九日から二十日朝にかけて徹夜で行われた高鍋神楽を見るために、われわれは高鍋町に出張していたので、その帰途現地を視て、すでに竪穴往居跡の一部が見えていたので改めて調査することにして、現場の保存を学校に頼んで帰り、二月十日から同十四日まで筆者と日高正晴氏が主となり、県社会教育課の加藤主事、町教委の渋谷主事、黒木清三郎氏らの参加で発掘調査を行なつたが、同高校の好意と協力を受けることが大きかつた。

二、発掘の経過

この遺跡の東側には写真2に見られるような畜舎その他の建物があり、西には火葬場があり、南には鶏舎などがあり、北は写真3に示すような広い原野で、この東方の牧草の植えてあるところから、北方の原野にかけて多くの住居跡が分布しており、後に東方の牧草のある所から貝殻や土器片が多く発見された。われわれは、前に深鉢が発掘された場所を中心としてその外側に東西の方向に長さ一〇メートル、巾二メートルの第一トレンチを掘ることとし、これを二メートル平方に五区に分け、図版2に示すように、これを西からA、B、C、D、Eの五区と命名した。

ここの地層は地表下三〇センチから五〇センチの深さに表土があり、その下に深さ一〇センチ内外の黄色のローム層があり、その下に粘土質の土層があるが、竪穴は粘土質土層を床として造られていた。われわれはまず竪穴の範囲を確定するため、トレンチ内の表土を除いてローム層を出した。するとB区からC区、D区、E区にかけてローム層の下に掘り込まれている竪穴の南壁を発見した。（写真4）。それでA区は住居跡の外であることが知られたので、B区を北に八メートル延長して、これも二メートル四方ずつF、G、H、Iの四区とした。これが第二トレンチである。そしてこれも表土を除いてローム層を出すと、B区に続いて、F、G、Hの三区にローム務を掘り込んでいる竪穴の西壁が見いだされた。（写真5）そしてF区には大きな平たい石があつたが、前に深鉢があつたのはこの附近であつたという。さらに竪穴の壁はH区で東に折れていたので、I区は堆肥を造るためすでに掘られていた関係もあり、ここはそのままにして、西端のE区を北に八メートル北方に延長し、これを第三トレンチとなし、これも二メートル四方にJ、K、L、Mの四区とした。するとここでも表土の下にJ、K、Lの三区に、南北に走つてローム層を掘り込んでいる竪穴の東壁を発見した。そして竪穴の壁はL区で西に折れていたので、H区とLを結び、その中間の二区を西からP、Qの二区となし、表土を除くと、竪穴の北壁はやや北に張つて繋がり、ここに角丸方形の竪穴住居跡の輪かくが現われた。

残るところは中央の四区であるが、これも北側の二区をR区とS区、南側の二区をT区とU区に分け、この四区は竪穴内であるから、ローム層はないので、周囲の深さまでに掘り下げたが、土量が多く困難な仕事であつた。

ついで、竪穴内に充填していた表土を除いて遺物を発見する作業にかかり、多くの遺物を発見した。まず石器はG区とH区の堺の竪

穴の床面外のところに石庖丁一個があり（写真6）D区の床面内E区に近い所に磨石斧の折れ一個があり（写真7）またT区の東南隅に近く刷石一個と敲石一個があつた。（写真8）。土器類は床面全体に分布していたが、特にT区には写真9同10に示すように深鉢があり、U区には写真11に示す土器の破片があつた。また竪穴の西北隅のH、P、S、Gの四区には写真12、13に示すようにおびただしい量の土器の破片があつた。そしてこれらの土器は腹部が張つて脚部が細まり小さい底をもつ弥生中期のものであつた。

ついで前は手をつけなかつたM、N、Oの北部四区の表土を除くと、M、Nの二区で各一個のピットを発見した。写真14がそれである。そしてO区には石斧があつた。さらに竪穴の床面でも四ケ所のピットを発見した。それはS区に二個、T区に二個であるが、T区の南東の一個は別な意味の穴であろう。また竪穴の西北隅の土器の多かつた場所を、さらに詳細に発掘した結果ここは貯蔵穴であることが知られた。

三、発掘の結果

A　竪穴住居跡

ここに発掘した住居跡は写真15、同16および実測図に見られるように、角丸方形の竪穴住居跡であるが、その方位はほぼ東西南北に方位している。正確に測れば、南北の中軸線は、南北の方向より二度東に傾いているに過ぎない。床面の広さは東西、南北とも、ほとんど六メートル四〇センチで、この期の住居跡としては大きいものである。床面は北側に向つて若干傾斜しているが、南端と北端との差は一〇センチである。そして床面の地表からの深さは中央部で約七〇センチである。

次ぎにこの住居跡を特徴づけているのは、床面の西北隅に設けられている貯蔵穴で、これは東西に長い角丸の長方形で、東西の長さ二メートル四〇センチ、南北の巾一メートル四〇センチ、深さは床面より二〇センチである。

次ぎにピット（柱穴）であるが、床面にはほぼ中央に南北に並ぶ二個があり、何れも直径一〇センチ、深さ一五～二〇センチで、その間隔は約一メートルである。その北方貯蔵穴の角のところにやや大きいものが一個ある。また前の南北に並ぶ二つのうちの南側のものの東方に一メートル六〇センチ離れて一個あり、これも直径一〇センチ、深さ一五センチ内外である。さらにその南東に一メートル二〇センチを距てて一個あるが、これは直径五センチ、深さ約二〇センチである。それでこの家の中央の梁を支える四本の柱は、その位置から見てPa、Pb、Pcの三個の穴に立つていたもので、Paの東側にいま一個あつたものと思われる。

床面の外側のピットは、労力その他の関係で北側を調べただけであつたが、写真14に示した二個を検出した。もつともその西側はすでに堆肥を造るため掘られていた。しかしこれによつてこの家の原形はほぼ推察することができるであろう。この二つの穴の竪穴との距離は一、八〇メートル内外であるが、このような穴が竪穴を囲んでいて、これが棰を支えて、その上に屋根が葺かれていたものと思われる。

次の問題は、食物を煮炊きした竈の所在である。これは相当に注意して発掘したが、確実な場所を見いだし得なかつた。しかし竪穴の南壁のほぼ中央に近いところに、赤く焼けた石組みのこわれた場所があり、それは写真18、同19と実測図にみられる通りで、ここの附近から、その東側や北側に石が散乱していたことから見て、ここに石組みの竈があつたものと思われる。このことは、このすぐ北側のトレンチT区、U区に土器が多く、特に煮沸器である深鉢の表面に煤煙の附着したものがあつたことなどからも察せられる。また出入口についても、竪穴外のピットを全部出さなかつたから、明らかにすることができなかつたが、出入口（戸口）は住居跡においては、生産の場に最も近いところに設けられるのが普通であるから、水田耕作に出入するに近いところといえば東側であろう。

最後に貯蔵穴について記さねばならない。これは宮崎県で最初の発見だからである。ただに宮崎県下で珍らしいだけでなく、弥生期の住居内に、このような遺構をもつものは、全国的に珍らしい例であろうと思う。この貯蔵穴は床面より約二〇センチ低く、くぼんでいるので穴と呼ぶわけで竪穴の西北隅に東西の長さ二、四〇メートル、南北の巾一、四〇メートルの角丸長方形で、その西と北の壁は竪穴の壁に平行している。西北隅に大きな石が立つており、東壁のほぼ中央に小さい石が二個あつたほかに、注目すべきは床面に大小一〇個の穴がある。これらの穴の大きさは次の通りである。

P_1 長さ一二センチ、巾同、深さ三五センチ
P_2 一一センチ×一一センチ×二〇センチ
P_3 二五同×一八同×四五同
P_4 二三×一五×三五
P_5 一一×一二×二二
P_6 一三×一三×三二
P_7 一一×一一×二〇
P_8 一八×二二×四五
P_9 一〇×一〇×一九
P_{10} 六八×三三×二三

これを要するに、西南の隅にある瓢簞形の大きい穴（これは幾つかの穴がくつついたのかもしれない）を除いては、直径一〇センチから一三センチのものが六個、直径一八センチから二五センチのものが三個である。そしてこれらの穴の配置は、大まかに見て、床面に斜め十字に配置されている。それでこの穴は何かというに、前に写真12、同13に示したごとく、ここに土器がもつとも多く存在したことから考えて、この穴は土器の底部を挿し込んで、土器を安定させる用をなしたものと思われる。写真や図版で見られるように、この期の土器は底部が小さいから、穴に立てねば安定しない。それでここに穀物その他の食料などを容れた土器を一〇個ぐらい置いたものと考えられる。そしてそれが斜め十字形に置かれているのは、中の物を取り出すのに便利なためであろうと思われるのである。さらにこれが竪穴の床面より二〇センチ低くななつているのは、上に蓆のようなものをかぶせたものと思われる。写真17参照。

B 遺物

この住居跡に在つた遺物は、前に述べたごとく、石器と土器であつたが、まず石器から記せば、石器の数は僅かであつて、石庖丁一、丸石二、刷石二、石鑿一、打製石斧破片二、石錘一、磨石斧折れ一、叩石一、砥石破片一であつた。このうち石庖丁と小丸石はH区に、大形刷石、石鑿、打製石斧破片はP区に、その他はD区、T区などに在つた。

1 石庖丁は粘板岩製で、長さ一一、五センチ、幅中央で四、八センチ、厚さ〇、五センチで両端に刳り込みのあるものである。（写真17および図版4参照）石庖丁としては大形に属する。

2 磨製石斧（折れ）は砂岩製で刃部と柄端を欠損している。乳棒状であつたと思われる。現長一一センチ、柄部の折れ口は径三×二センチ、刃の方の折れ口は径三、五×四、八センチで何れもだ円形である。（写真20左）

3 打製石斧（折れ二）の一は刃の部分で現長九センチ、刃巾五、五センチ、厚さ一、二センチの粘板岩製で、他の一は柄部破片で同じ石である。現長六、五センチ、巾四、五センチ、厚さ〇、八センチである。（写真21右二）

4 刷石（二）大きい方は鼠色の頁岩のようである。径一二×一〇センチ、厚さ四センチで一面だけが平滑である。小さい方は花こう岩で径一〇×八、五センチ、厚さ三、七センチのだ円形の自然石で、一面が平滑である。（写真22下段）

5 丸石（二）自然石で、大きい方は凝灰岩らしい。径一〇×九センチ、厚さ三センチのだ円形である。小さい方は砂岩で、径五センチ厚さ一、一センチである。（写真22上段）

6 石鑿、小形で長さ七、五センチ、巾一センチ、厚さ一センチで断面は三角形をなし、刃部を欠損している。粘板岩の自然石を一

部刷り切つたもので、一端には自然の丸味を残している。（写真23左端）

7石鑿、これも大形で長さ一二センチ、巾中央で八、五センチ、厚さが薄く一センチで初め打製石斧と思つたほどである。千枚岩のようで、長めの自然石の両端を打ち欠いでいる。ほかに今一つ表面採集で得られたものがある。これは硬い石で長さ九、五センチ巾八センチ、厚さ三センチである。（写真24）

8叩石、長さ一三センチ、巾四センチ、厚さ二センチの自然石で、石質は頁岩である。（写真23右端）

9砥石（破片）砂岩で折れており、現形は長さ六、五センチ、巾八センチ、高さ四センチで、一面が平滑で凹んでいる。形があまりに小さいけれども、あるいは小形の石皿かもしれない。（写真23中央）

以上であるが何れも生活に必要な品であることは住居跡の遺物として当然のことであろう。

土器は　だしい破片であつたが、これを復原して完全形となし得るものもあつた。しかしまだ復原を終つていないので確実な数を記すことはできないが、器形は深鉢形や甕形のものが多く、盌（まり）や盤（さら）形のものもあるようである。

深鉢形のものは写真25に見られるごとく、肩部に突帯（多くは鋸歯状または縄状の突帯）を一条有するものが多い。口縁は外に開き口唇は外側に反つているものが多く、底は比較的小さくして中期土器の特徴を現わしている。底面は平たい（平底）ものが多く、中にはやや上り底のものもある。写真26に見える大きい深鉢を復原したものが第5図であるが、これは高さ三八センチ、口径二七、五センチ、底径八、五センチで、肩部に切り込みのある突帯を一条めぐらしている。腹部の径は二六センチとなるようで腹部はあまり膨れていないようである。そして器の表面は刷毛によつて調整されている。

深鉢や甕形のものの中には首部のくくれたところの下の肩の上部に拓影1に示したような貝殻文に似た斜めの引掻き文を一条めぐらしているものもある。拓影2は器面を調整している刷毛目を示したのである。

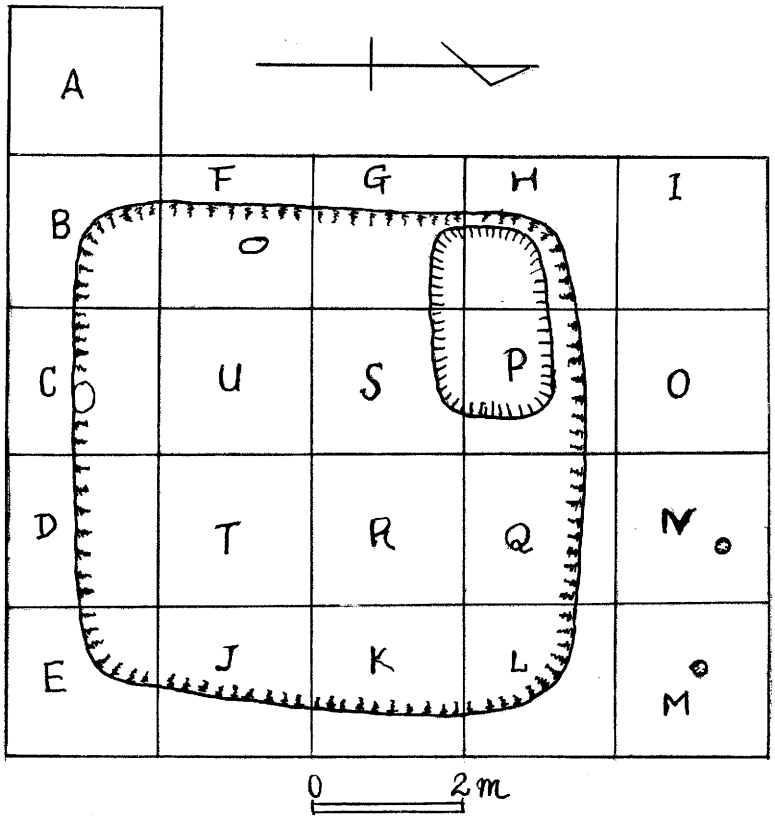
甕形土器のうち写真27に示したものは上部の破片であるが、これもほぼ復原可能である。第6図はその復原図であるが、口縁はやや外に開き、口唇はやはり外に斜いており、腹部はかなり膨れて脚部は次第に細まり、平底のやや小さい底を有するようである。そして器面は研磨されており、首部に一条の突帯をめぐらし、肩部に近く丸いボタン状の突起を数個めぐらしている。これは中期の甕形土器の口縁によく用いられているものと同功のものである。

次ぎに記したいのは用途不明の土製品の存在である。それは写真29に示したもので、写真左は上から、写真右は裏から写したものである。長さ六、五センチ、高さ三、五センチ、巾三センチ内外の小さいもので、上部は黒く下部は黄色を呈している。小さいながら一見すると牛か、土竜（もぐら）のような形である。面白いのは片側にちようど母指をさし込むようになつている窪みがあり、反対側にはそれより浅いが指をかけるような窪みがある。形からみて土器の把手ではないかとも思われるが、底はやや平たく、一部に二本の細かい箆描きの直線と、これに斜めに交わる直線が描かれており、底部の中央を縦に貫く線上に三個の四角な凹所があり、土器の把手とは考えられない。全く用途不明の土製品で他の出土例をまつほかはないが、珍らしい物である。

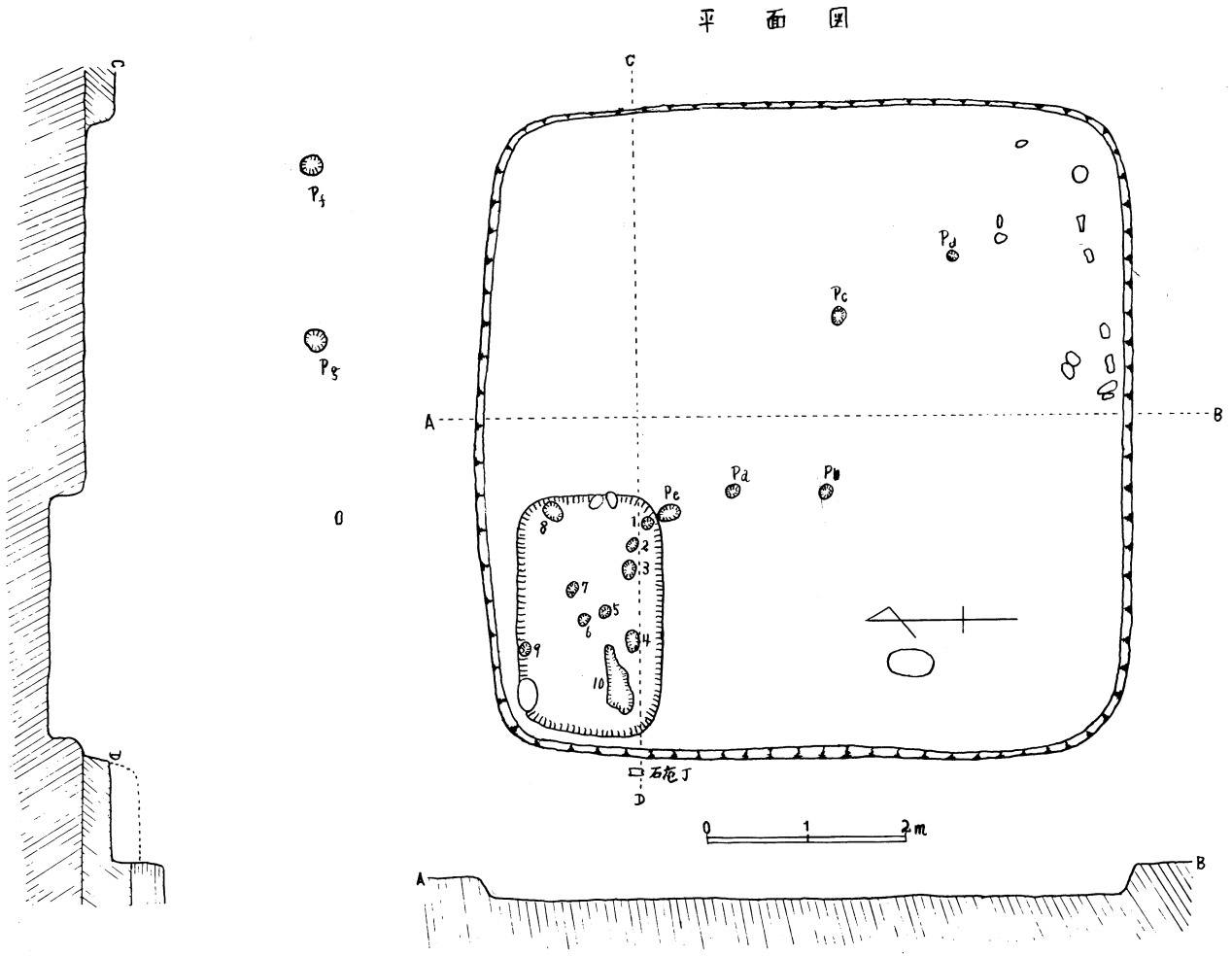
図版1　高鍋町牛牧附近

（遺跡は×印）

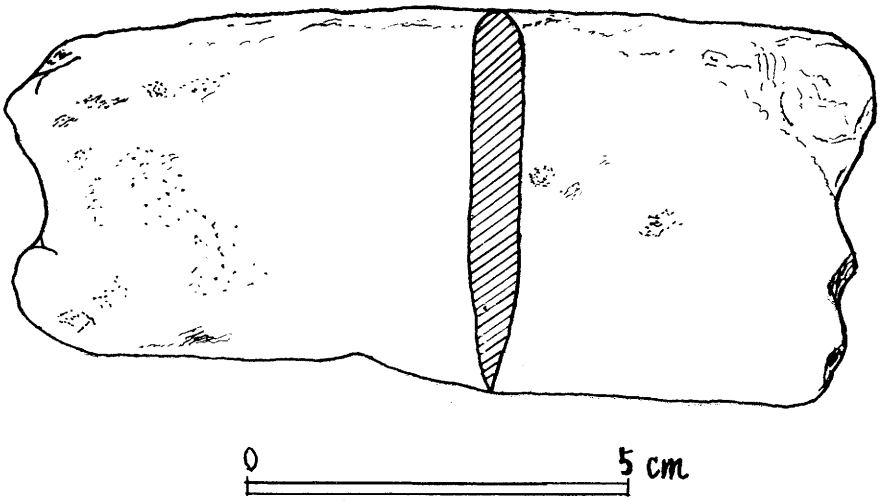
図版2　トレンチと住居跡の関係



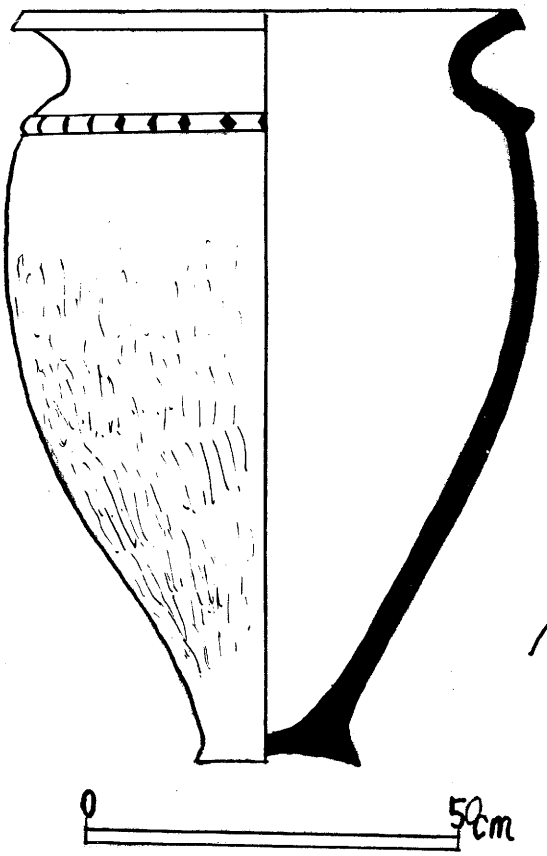
第3図 高鍋町牛牧弥生期住居跡実測図



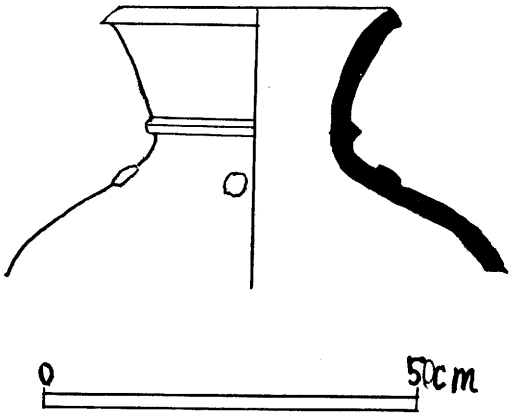
第4図　石庖丁実測図



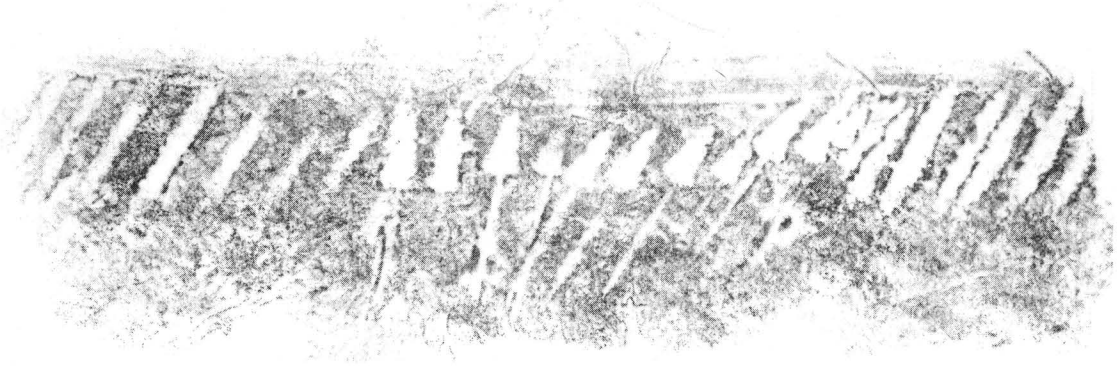
第5図　深鉢形土器復原図



第6図　坩形土器文様



拓　影　1



拓　影　2

写真1　最初に発掘された鉢形土器

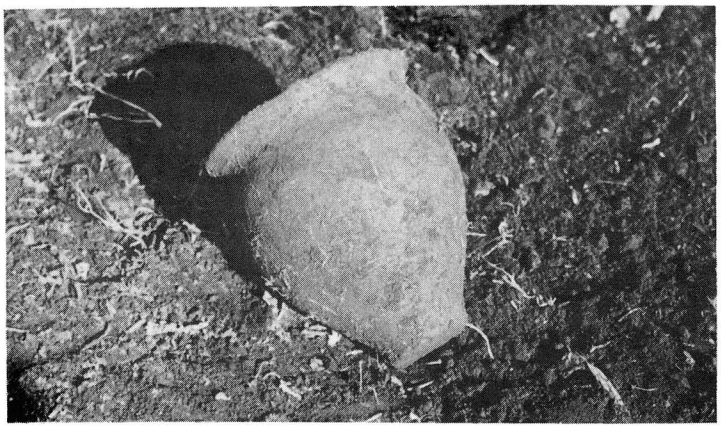


写真2　遺跡より東を見る

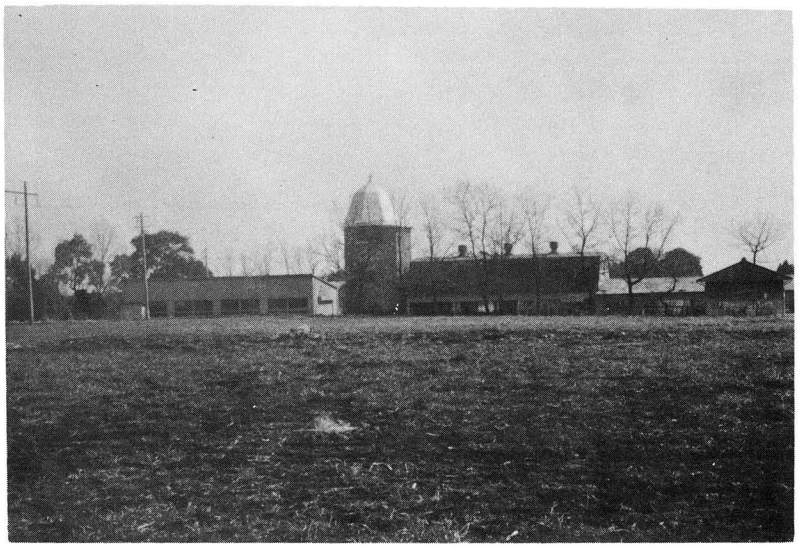


写真3　遺跡より北を見る

写真4　第１トレンチ

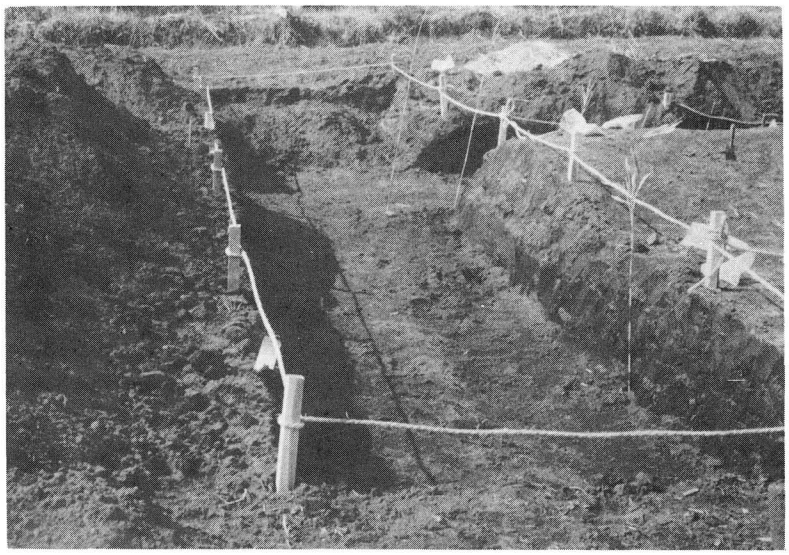


写真5　第２トレンチ

写真 6　石庖丁のある状況

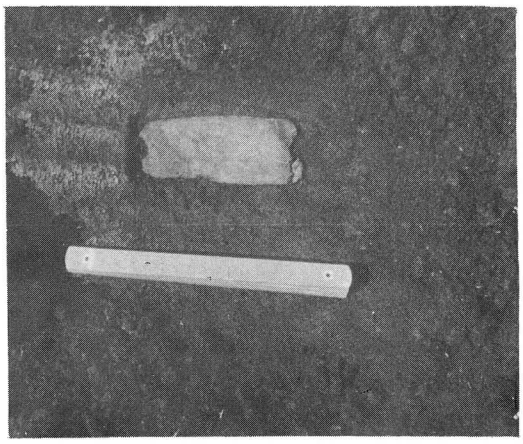


写真 7　磨石斧（折れ）のある状況

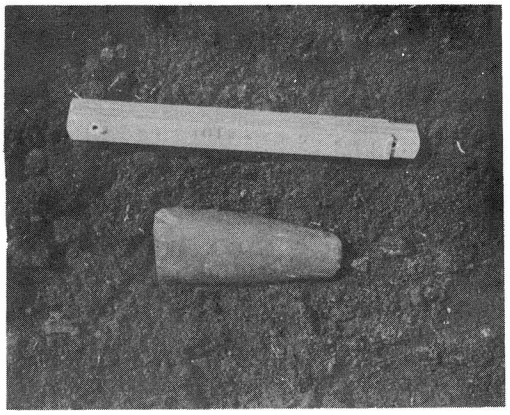


写真 8　刷石（右）と敲石のある状態

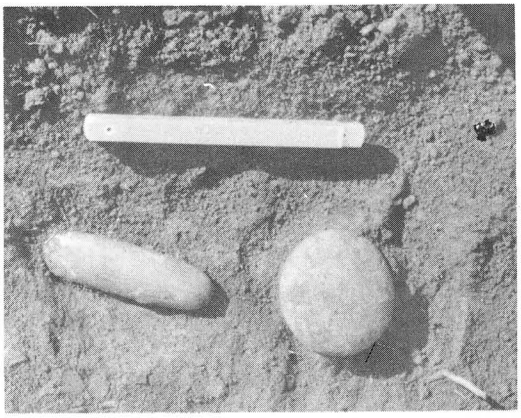


写真 9　T 区に土器のある状況

写真10　T区に土器のある状況

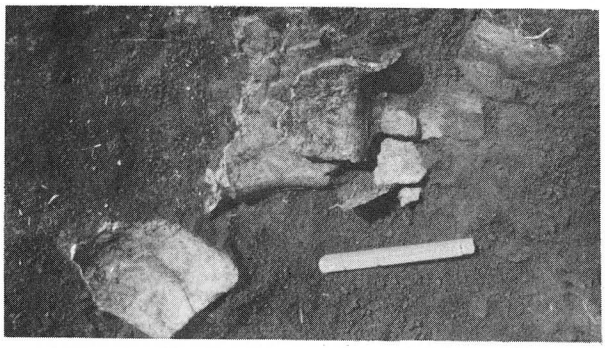


写真11　U区に土器のある状況

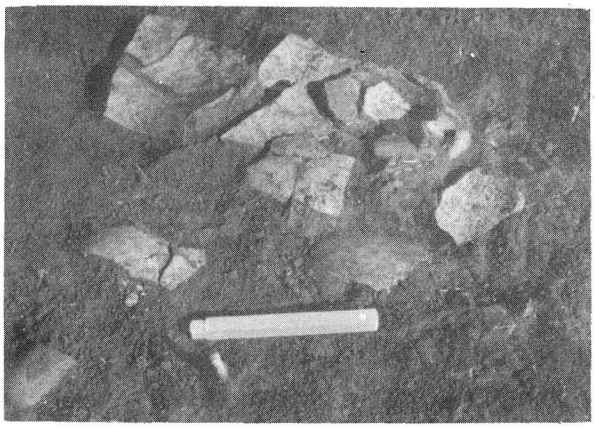


写真12　西北隅に土器のある状況

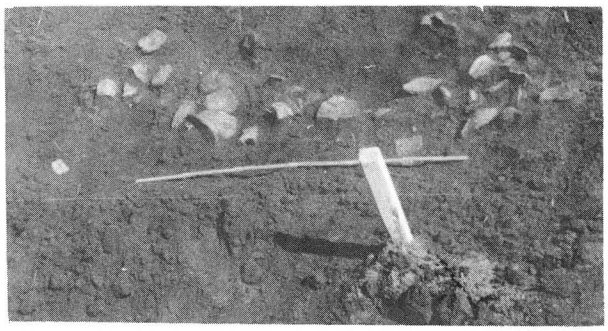


写真13　貯蔵穴に土器のある状態

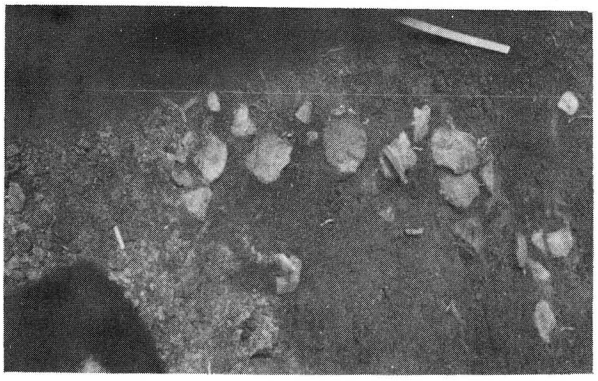


写真14　M（手前）Nの2区にあるピット

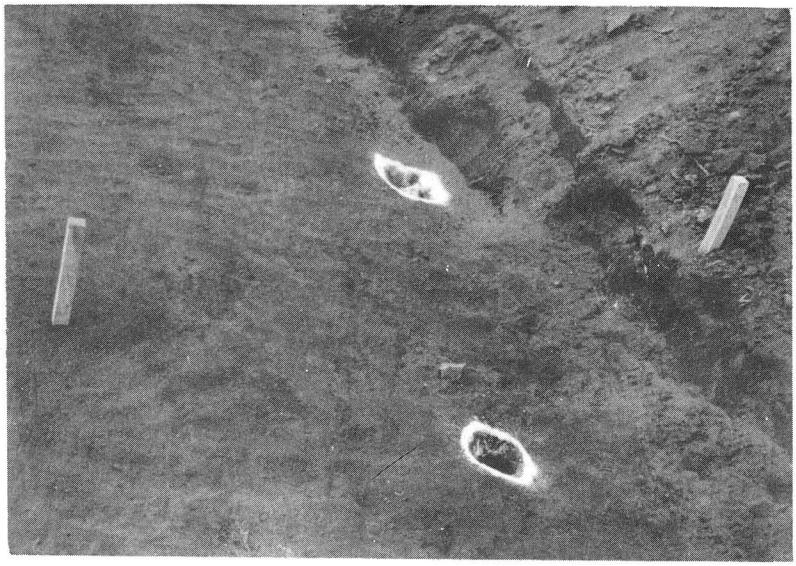


写真15　竪穴住居跡全景（南より見る）

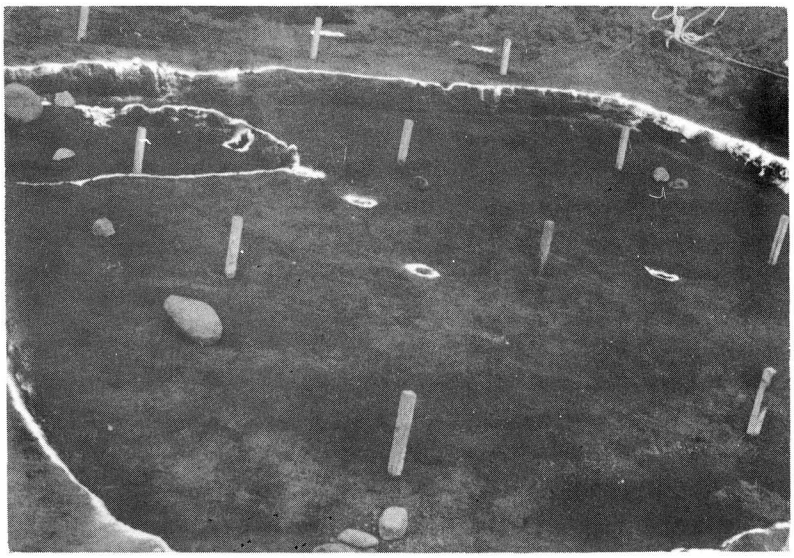


写真16　竪穴住居跡（北西より見る）

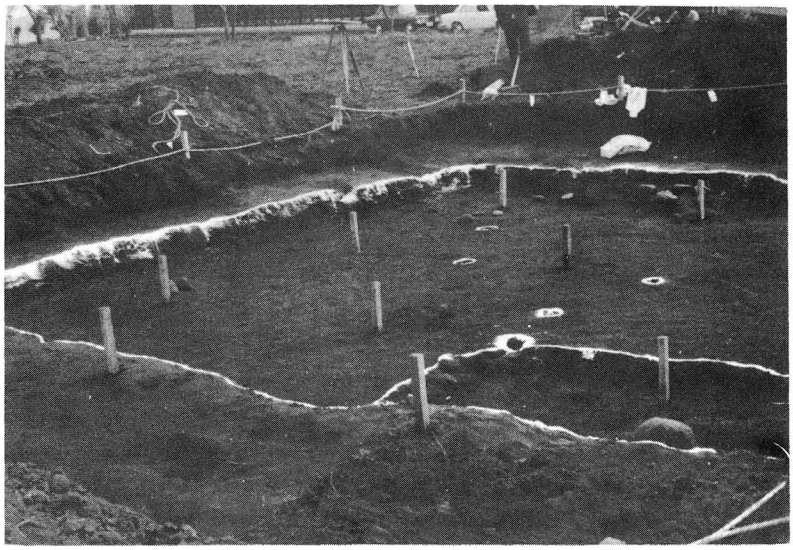


写真17　貯蔵庫（西より見る）

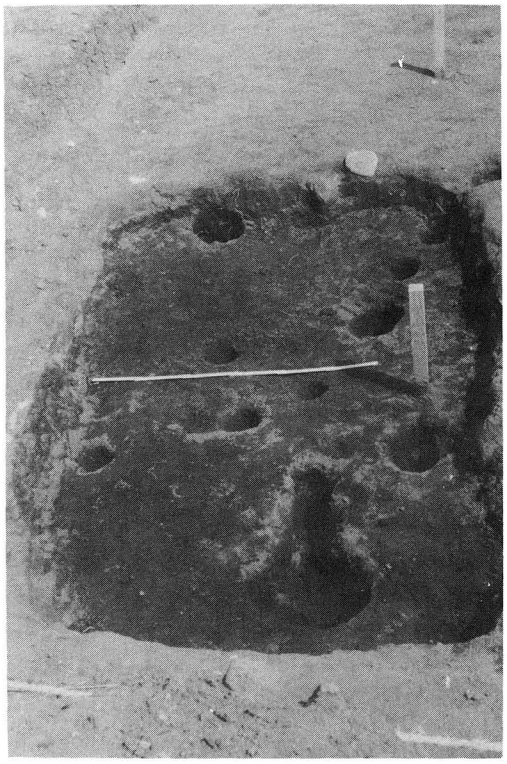


写真18　竈　　跡

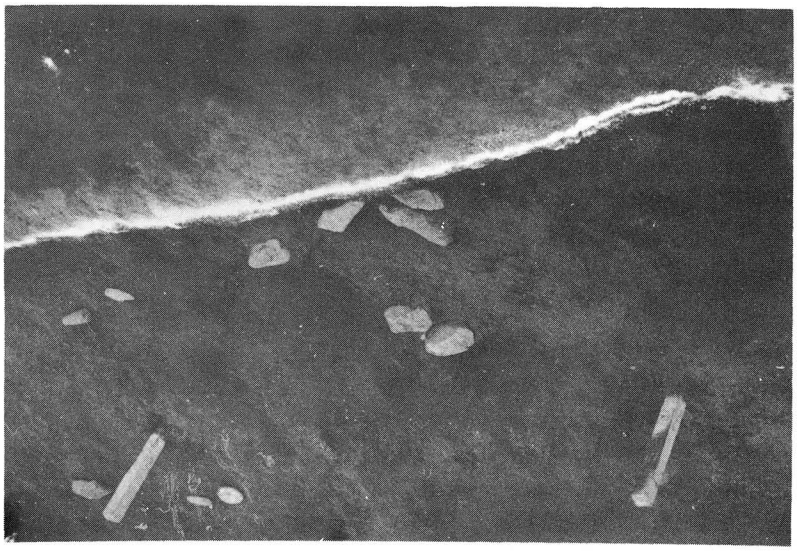


写真19　同　　上

写真20　石庖丁

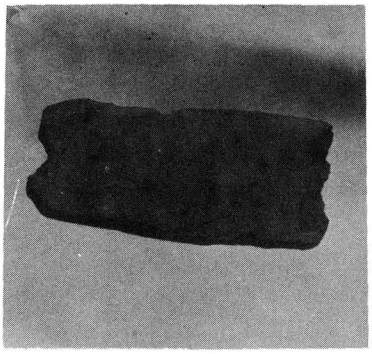


写真21　磨石斧と打石斧

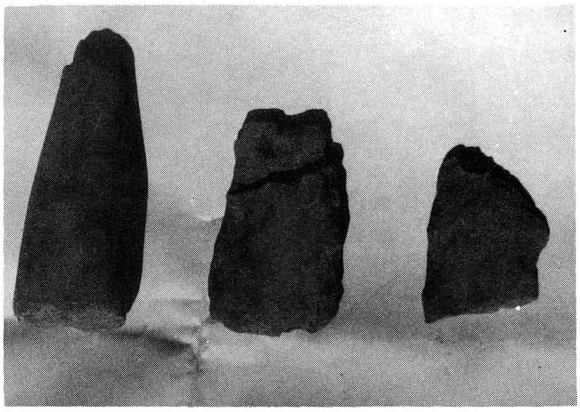


写真22　刷石（下段）と丸石（上段）

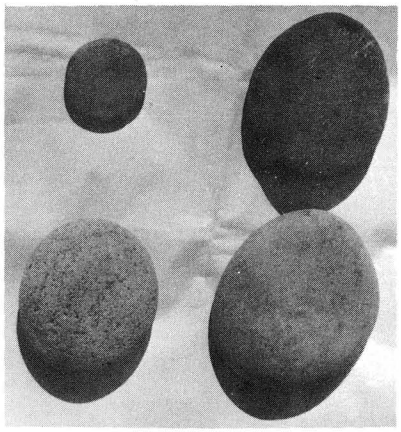


写真23　石鑿（左）砥石（中）叩石（右）

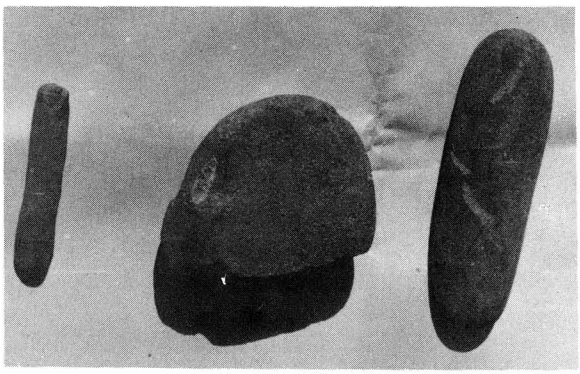


写真24　石　　錘

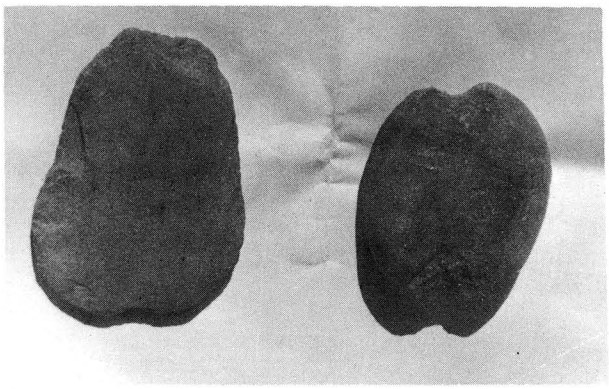


写真25　深鉢形土器

写真26　同上（中央のもの）

写真27　坩形土器

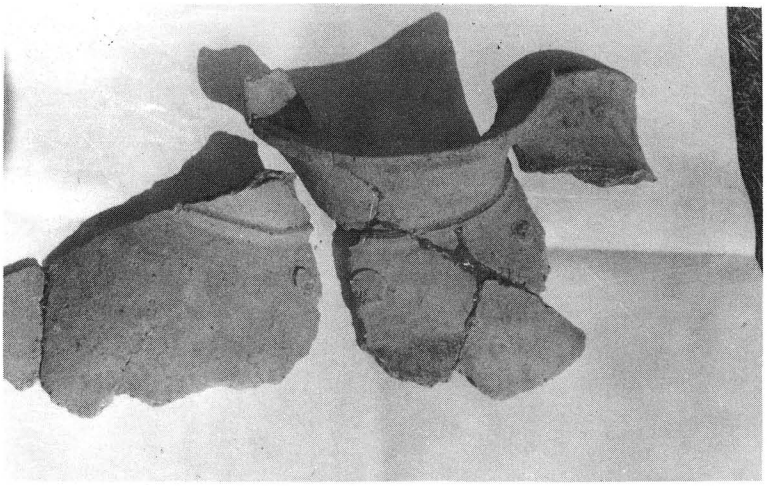


写真28　底　　部

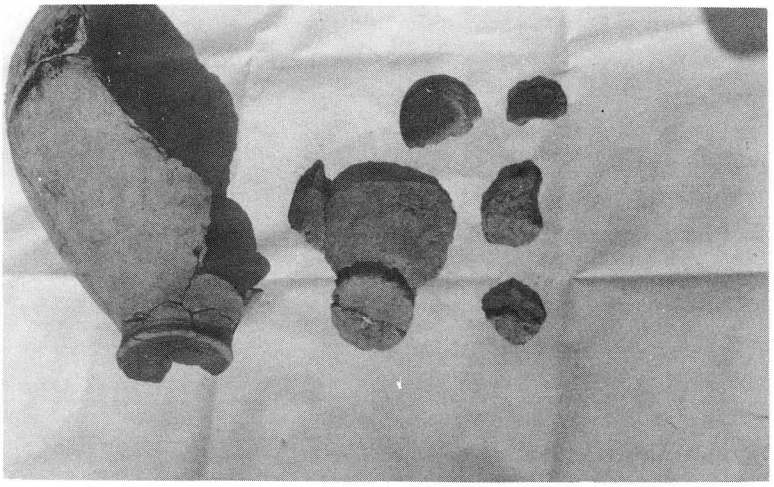
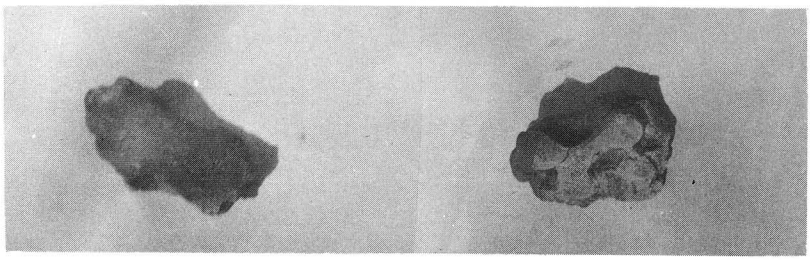


写真29　不明土器（左表・右裏）



四、宮崎市下北方町地下式古墳調査報告

宮崎市下北方町地下式古墳調査報告

石川　恒太郎

一、所在と発見の動機

宮崎市下北方町字塚原は平和台の南麓の台地で地名のごとく古墳群のあるところである。現在下北方古墳として前方後円墳五基と円墳七基が県指定となつており、地下式古墳もかなり前に一基発見された記録がある(1)またこの台地は弥生期の広い包含層をなしているが、最近宮崎市のベッド・タウンとして住宅の建設が進められている。昭和四十四年十一月下旬に同所の会社員平尾政治氏方で建築用の資材を運搬していたダンプカーが、古墳の天井部を破壊して落ち込み発見されたもので、平尾氏宅の西方には竹木の茂つている円墳があるが、地下式古墳はこの円墳（写真1）と同氏宅の間の、古墳に接近したところにあり写真2は天井が破壊された穴を示す。

古墳発見の際は各地に出張中であつたので同年十二月二十五、六の両日発掘調査を行なつたが、この調査は筆者のほかに県社会教育課加藤成夫主事、同阿部邦慶主事、宮崎市小田文化財係長、同市野間重孝、南九州短大安楽勉の諸氏でこれを行ない、宮崎市立大宮中学校の文化財愛護少年団の男女生徒二十三名が参加協力した。

二、発掘の結果

この古墳は第1図に見られるごとく、竪穴と羨道を東に、玄室を西にして、ほぼ東西に方位して営まれており、その中軸線は東西より約二〇度南に傾いていた。竪穴と羨道は、時間と降雨の関係で、一部を掘つただけであつたが、玄室は長さ約三、五〇メートル、巾は奥壁で一、八〇メートル、羨道の接点で一、七〇メートルで、天井は剝落が甚だしかつたが、切妻造りの家形であつたことが知られた。それは玄室の横断図で知られるように、床面から約七〇センチ上の南北の側壁に屋根との接点が見られ、天井の高さは床面から一、四〇メートルぐらいあつたものと思われる。ここの地層は、地表下五〇センチ内外に黒色の表土があり、それが漸次に褐色を帯びてきて下方の褐色粘土質土層につながり、途中にローム層の嵌入はない。それで竪穴の形などを確かめるのに困難したが、玄室や羨道は下層の粘土質土層に設けられ、天井の頂上は表土下約一メートルの所にあつた。従つて玄室の床面は地表下二、四〇メートルの所にあるわけで、玄室内の調査には梯子を用いねばならなかつたし、玄室内に積つていた土を排除するのにはバケツを綱でつり降してこれを引きあげるという作業が必要であつたが、大宮中学校の文化財愛護少年団の活躍で完全に作業がなされた。

床面には第1図平面図に見られるごとく、中央のやや南寄りに、南北の壁に平行して四角、半円、三角形などの自然石が並べられ、この石のある所は粘土があつて、床面より一〇センチ内外高くなつていた。そしてその石のある南北の両側の、玄室の中央より西側に南、北の壁に平行して直刀二振が枘を西に、鋒を東にして相対して置かれ、西壁に接して鉄鏃多数があつた。また南側の刀の東方に一〇センチ離れて鏃頭一個があり、北側の刀の鋒に近い南側に臼玉数個が見いだされた。また鏃頭のあつた附近からはガラス製の小玉数個が発見された。さらに玄室のほぼ中央の東方羨道の接点から約五〇センチ入つたところにガラス製の勾玉の破片と、その南方二〇センチを距てて鉄鏃一本があつた。

羨道は玄室の東に連なり、巾約一メートル、長さ約八五センチ、高さ一メートルが遺存していたが、頂上はアーチ形で、高さ一、二〇センチぐらいあつたものと思われる。底部は玄室よりやや高く、竪穴よりの入口は粘土で塞がれていた。そして羨道の床面には埴器および須恵器が多く見いだされた。また鉄器破片一個（刀子）があつた。

竪穴は充分調査できなかつたが羨道の東に接続し、南北の巾一、四〇メートル、東西の長さ約八〇センチで比較的小さく、表土に近いところからおびただしい数の埴器破片が出たが、多くは高杯の破片で、この脚部だけが九個以上あつた。

三、遺　物

この古墳の主体である人骨はすでに消滅してしまつていたが、副葬品の服飾品として玉類、武器として直刀、刀子、鉄鏃、農工具として鍬頭、鉇、その他の鉄製品、および土器があつた。以下それらの遺物について詳記しよう。

1 玉類（写真5）

玉類は勾玉破片二個、臼玉七個、小玉一〇個であつた。勾玉はガラス製の紺色であるが、孔の部分から微塵に割れたらしく、頭部の破片二個が見いだされただけであつた。何分にも底部に粘土があるので、土を篩にかけることができなかつたので他の破片は土に混じてみのがされたものと思われる。このように割れたのは、天井の剝落によるものと考えられる。臼玉七個は濃紺色で、これもガラス製である。多少の大小はあるが、だいたい径〇、八センチ、高さ〇、四～〇、五センチぐらいである。小玉はみな緑色で、やはりガラス製である。一〇個のうち一個は、自宅で鍬の土を刷毛で払い落した際、土の中から見いだした。径〇、二センチぐらいの小さいものである。

2 刀、二振（写真6）

二振のうち北側にあつたものは、完形を有し、総長九七センチ、うち柄の長さ一五センチ、茎巾三、二センチ、茎厚さ〇、八センチで、茎には目釘穴一つが見えており、柄に糸が巻かれていた跡を残している。身の長さ八二センチ、身巾四センチ、棟巾一～〇、八センチである。南側にあつた一振は総長九四センチ、柄の長さ一七、五センチ、茎巾二、五センチ、茎の厚さは不明であるが柄には木質を残し、全体に糸巻きがしてあつたことを示している。身の長さ七六、五センチ、身巾三センチ、棟巾は一～〇、八センチで、身にも鞘の木質が少し遺存している。

3. 刀子破片

小さい破片である。

4. 鉄鏃　一〇本

一〇本のうち一本は平根で鋒形を呈し、逆刺を有している。（写真7の中央）これは勾玉の近くにあつたものである。他の九本は尖根式の鋒形で、やはり逆刺を有する。（写真7）多くは西壁に接してあつた。

5. 鍬頭　一個（写真8）

これはU字形の鍬で、長さ一五センチ、刃渡一五、五センチ、柄部の左右両端の距離は一三、五センチである。この半円形にくり込まれている部分に柄をつける木質部（凸字形）をさしこむわけで、従つて柄部は内側がV字形になつている。この内側の開いている部分の開きは一、五センチである。

6. 鉇　一本（写真7の下段横向き）

鉇（やりがんな）は現長一〇センチで、穂先は小さく、長さ一、五センチ、巾〇、七センチである。

7. 馬具破片（写真7の右下）

長さ六センチ内外の鉄製品で、一部であるためはつきりしないが馬具の一部と思われる。

8. 土器

土器には埴器と須恵器があり、羨道部つまり古墳内にあつたものと、竪穴の上部すなわち古墳外にあつたものを区分すれば、古墳内にあつたものは須恵器と埴器で、古墳外にあつたものは埴器のみであつた。

a 須恵器（写真9）

須恵器はみな羨道内にあつたもので、完全形の蓋杯一個と他は破片であつたがこれを復原すれば蓋杯一個と、盌（まり）一個となるようである。その復原図は第2図の左側に示す通りである。この第2図の左側上段のものはほとんど完全形（口唇の一部欠）で口径

一二、四センチ、口唇径一〇、五センチで、高さ五センチ、口唇部の高さ一、七センチで摘みはない。中央のものは大部分の破片を接着して復原形をえがいた蓋坏である。口径一二、四センチ、口唇径一一センチ、全体の高さ五センチと思われる。口唇の高さ二センチで、唇部が外に開いているのが特徴で、上段のものの口唇が内に傾いているのと反対である。また口縁が外に出ているのもこのためである。下段のものは盌で、これは後世の椀（わん）に当る土器であるが、口径一一センチ、高さ五センチで、口縁が二重になつて先端が外に反つており、腹部に突起があつて蓋坏に似ている。

b 埴器

埴器のうち古墳内にあつたものは写真10にあるもので、みな破片であるが、これを復原すると高坏二個と坏一個となるようである。坏は余りに小さく、全形を描くことは困難であるが、高坏二個を復原した形は第2図右側に示したものがそれである。高坏は大小二個で小さい方は口径一七センチ、坏部の高さ六、二センチ、口縁部は外側に開いている。これは大きい方も同じで、口径二五センチ、坏部の高さ九センチで、これも口縁部が外側に開いている。脚部の長さはわからないが、脚は円筒形で、中央に孔が貫通している。底部は第2図の下段に示したごとく、これは大形のものの底と思われるが、底径一三、五センチ、高さ二、七センチで、これも外側に開いている。

古墳外の竪穴上部にあつた埴器の破片は極めて多く、数百片に及んでいるが、その破片は高坏と坏の破片のようで、写真11に見るごとく、高坏が圧倒的に多く、少なくとも九個以上である。小さい破片は写真12に見る通りである。こちらの高坏は写真で見るように、坏部は口縁部が円く内側に曲つているものが多い。この点が古墳内のものと異なるだけで、脚部は円筒形であり、底部も外側に開いてほぼ同形である。坏形の土器は口縁が内側に曲つている。

ここの埴器の高坏で注目すべきものは、その製法で、多数の高坏の破片を見るに、ここの高坏は坏部と脚部とが別々に作られており、坏部のつけ根には、はめ込み式の臍がはつきり残つている。さらに坏部も口縁部と底部とに分けて作られていて、口縁部と底部との接合部分は稚をなしている。これは第2図にみる通りである。この手法は、埴器のもつとも古いものと言われている東京都北多摩郡狛江町和泉出土の土器を標式とするいわゆる和泉式土器の手法と同じである(2)。しかもここのものは、口縁部と底部とを接合させるために、口縁部と底部の接着面に雄型と雌型を造つて、これをかみ合わせて接着面を丈夫にする工夫が施こされている。拓影1はその接着面を示したのである。これは当時の工人たちの土器製作の一面を知り得る興味ある資料である。

四、古墳の特徴と年代

この古墳は、地下式古墳であるから古墳時代の後期のものであるが、形式は玄室が竪穴と羨道の方向の延長方向に長く、そして玄室は長さ、三、五〇メートル、巾一、八〇メートル、高さ約一、四〇メートルで相当に大きく、かつ玄室は切妻造りの家形をなしており、地下式古墳としては古い形式である。遺物も須恵器を有し、鉄属も尖り根が多く、後期古墳の特徴を示しているが、須恵器も蓋坏は口唇部が高く、盌は古い形を示し、須恵器としては古式のものであることが知られる。埴器は前に見たごとく、高坏は坏部の構造が和泉式と同じであり、坏も鬼高式と同式である。このように見てくると、古墳の構造と同様に遺物もまた後期でも古い時代を示すようである。

さらに考ゆべきは、古墳内には二個の蓋坏と盌と三個の須恵器があつたが、外部の竪穴上には、あれほど多くの埴器があつたのに、須恵器が一個もなかつたのは何故であろうかということである。思うに、当時須恵器は舶来または新しい製法による焼物で珍重されたであろうから、これに食物を盛つて死者に供し、古墳外の竪穴上では祭祀を行なつたので、そのような珍奇なものは用いなかつたのではなかろうか。もしそうであれば、須恵器が珍らしかつた時代で、この古墳の時代とも見合うように思うのである。何れにしても、この古墳の形式と遺物から見て、古墳の年代は古墳時代後期でも古く、

だいたい六世紀の前半ごろのものと見てよいのではないかと思う。

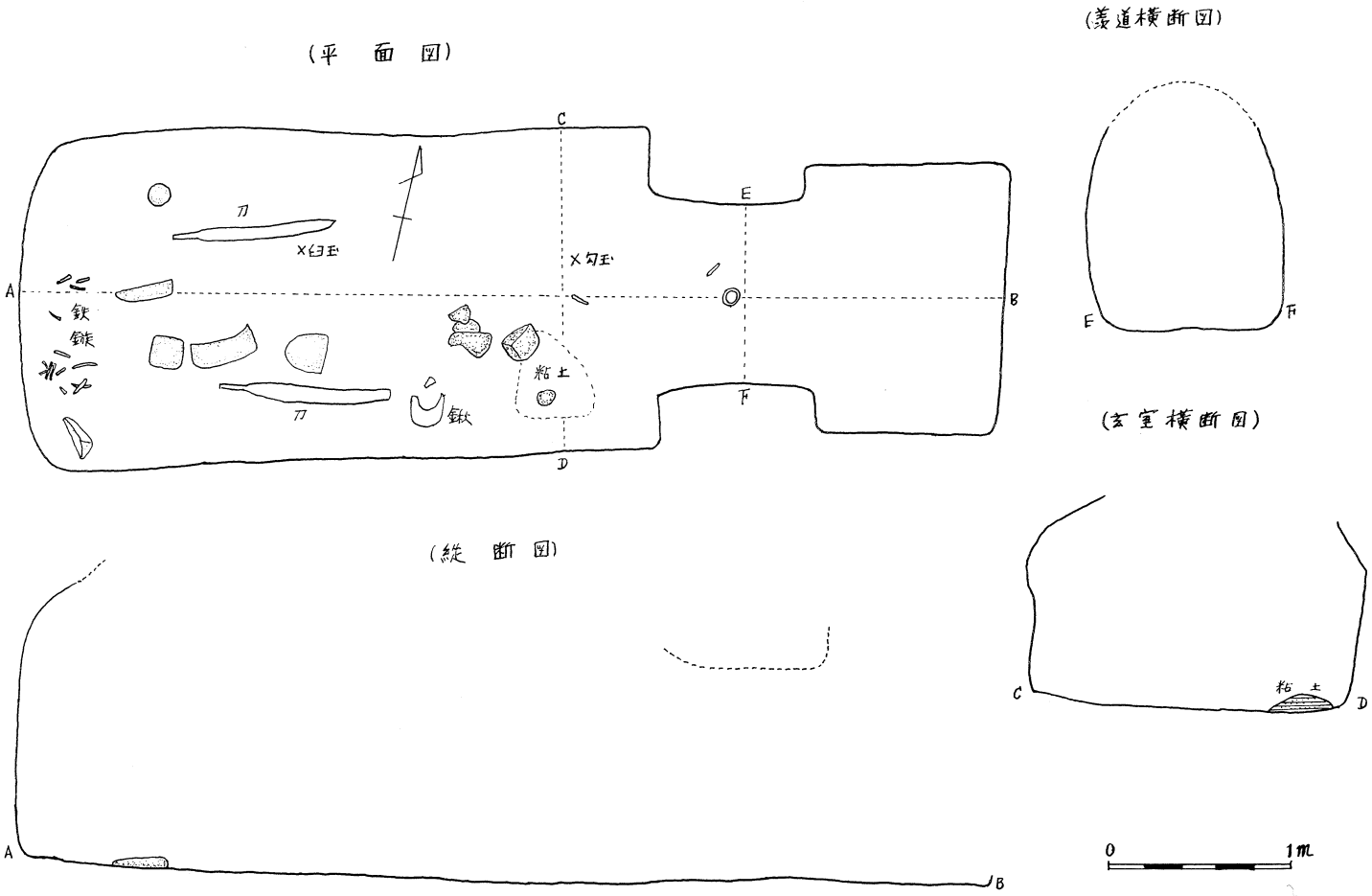
なお玄室や羨道に土器を副葬することは多いが、竪穴に土器を入れている例は極めて稀であるのに、ここでは竪穴の、しかも地表に近いところから夥だしい埴器が見出だされことは異例といつて良い。さらにこの地下式古墳と、西方の円墳との関係も重要であつて、円墳を実測してみなければ判らないが、一見した所では、この円墳は東側が多少削られたような形になつているので、これが原形に復原されると、或いは地下式古墳は円墳の下になるのではなかろうかと思う。もしそうなると両古墳の先後の問題が起るのである。

以上に見てきたごとく、この古墳は宮崎市で発見された地下式古墳として初めて学術調査を行なつて確認されたものであるとともに、前に述べたごとく、極めて特色ある古墳であり、この古墳の発見によつて、この地区にはなお多数の地下式古墳の存在が確認されたなど、幾多の学術上の収穫を残した貴重な遺跡である。

註① 昭和十八年宮崎県発行「六野原古墳調査報告書」

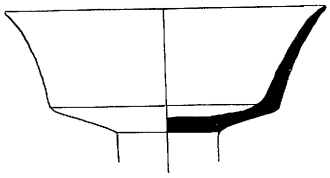
② 杉原荘介、中山淳子両氏「土師器」（河出書房「日本考古学講座」5古墳時代、二〇八頁参照）」

第1図　宮崎市下北方町地下式古墳実測図

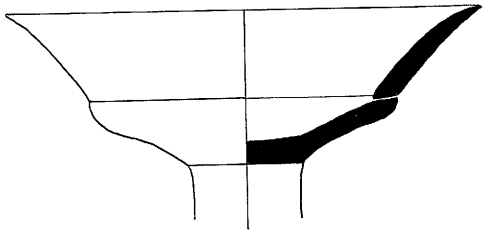


第2図　土器実測図(1)

埴器　高坏



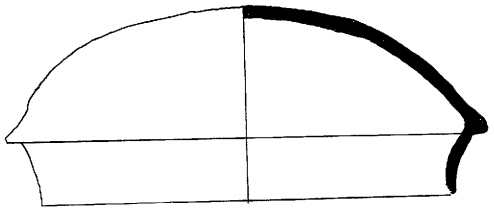
同　　上



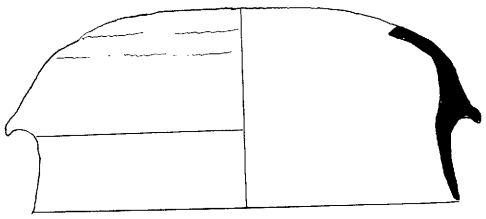
同　脚底

第２図　土器実測図(2)

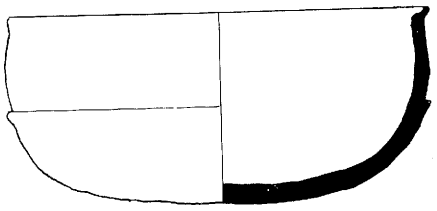
須恵器蓋坏



同　上



同　盌



拓影1　土師器高坏部上下の接着面

(1)(2)は雄型、(3)は雌型

(1)

(2)

(3)

(4)

写真1　西側の円墳

写真2　天井の破壊口

写真3　玄室内の状況

写真4　同　　上

写真5　玉　　類

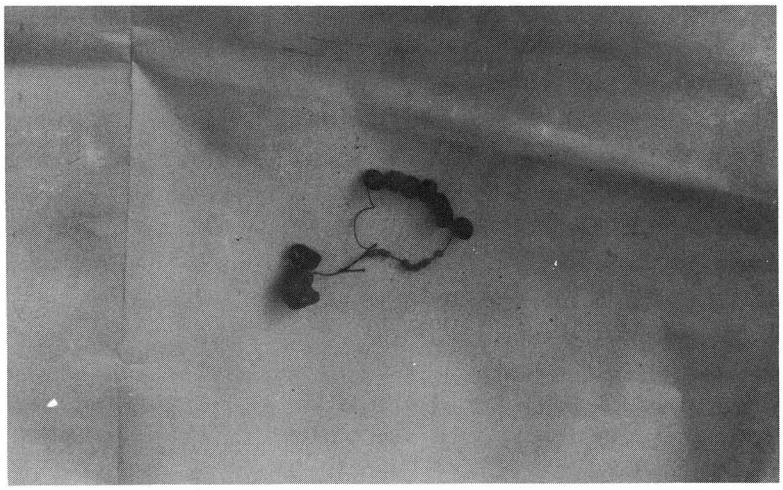


写真6　刀　2　口

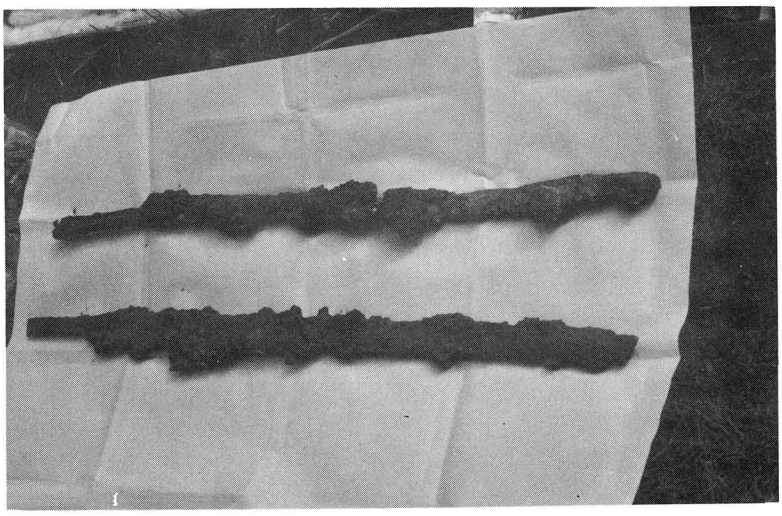


写真7　鉄鏃ほか

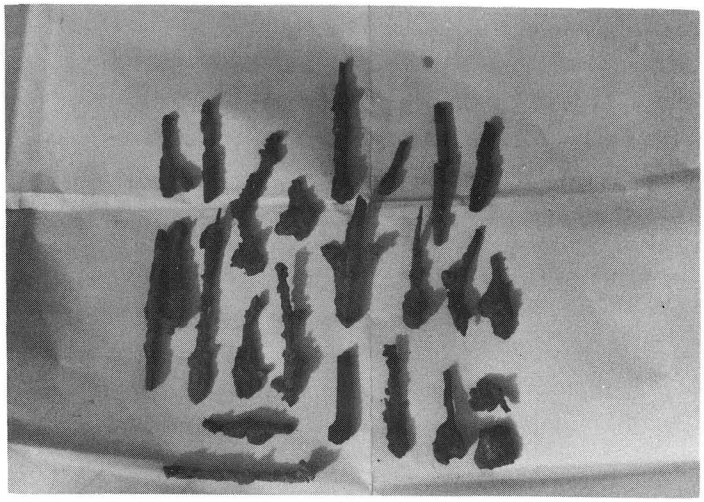


写真8　　鍬

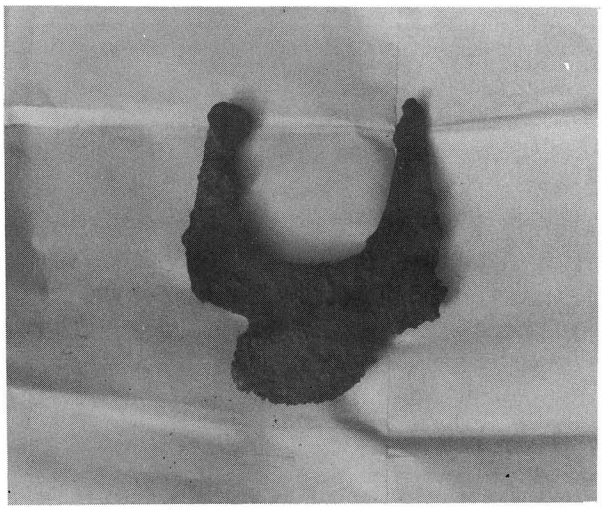


写真９　羨道内にあった須恵器

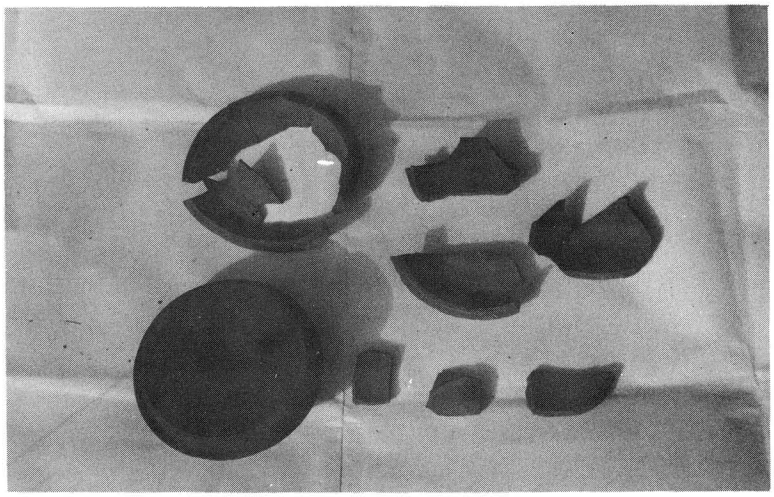


写真10　羨道内にあった埴器

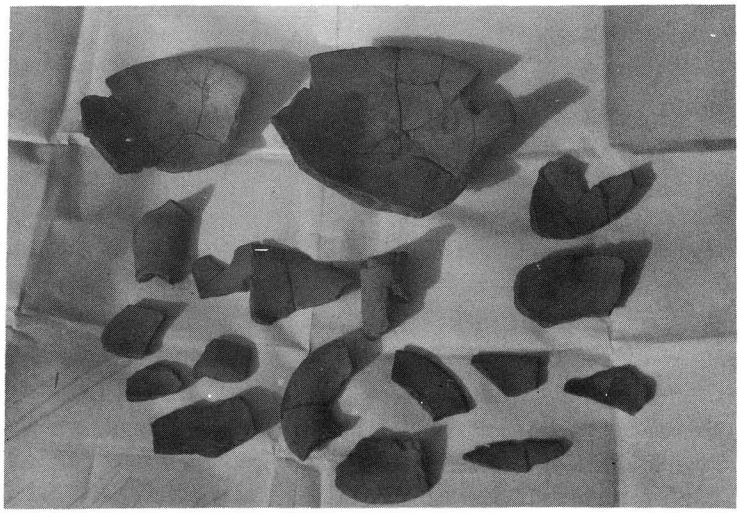


写真11　堅穴にあった埴高坏

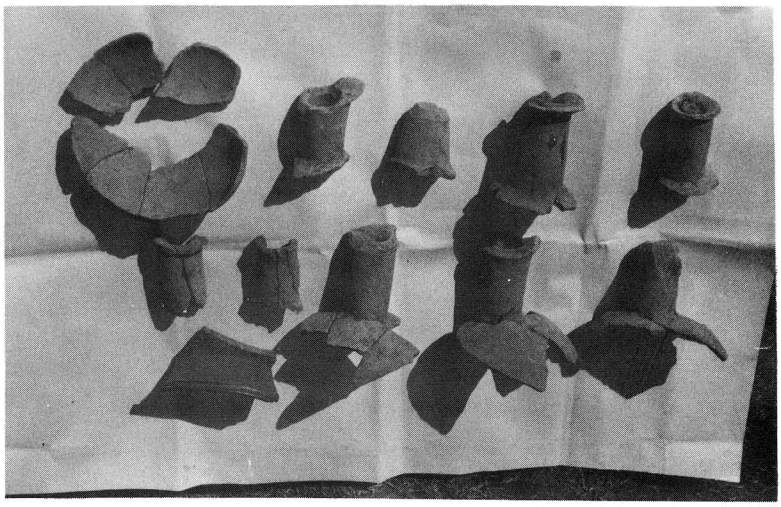


写真12　堅穴にあった埴器破片

五、西臼杵郡高千穂町横穴古墳調査報告

西臼杵郡高千穂町横穴古墳調査報告

石川恒太郎

一、発見の動機

昭和四十五年二月十六日高千穂町教育委員会の要請によつて同町に出張同町大字岩戸字桑水流の横穴と同町大字田原字今狩の横穴古墳を見た。

大字岩戸字桑水流の横穴は、すでに古くから発見されているものであるが、その上に道路が通ずることになつたので見てもらいたいということで、同町教委の後藤主事の案内で県教委の加藤主事と共に現地を訪ねてみた。写真1はその現況である。

これは道路ができても、これを壊さないように考慮して工事を行うということであつたから、まず壊れることはあるまいと思われるので写真をとるだけで帰つた。

大字田原字今狩のものは、道路を造るために基盤整備工事を行ううち昭和四五年二月一四日に発見されたものである。われわれは、川内の石棺の調査を終つたので、帰るために町教委に挨拶に行つたところが、この横穴の発見が報ぜられたので再び田原に向つて調査した。しかし写真2で見られるごとく、横穴はかなり低いところにあり、且つ水道管が破裂したとかで、底部には水がたまつており、遺物はすでに掘り出して近くの家に保存されていた。しかも火山灰地帯であるため、水の排出が困難であつたので調査は不可能であつた。

二、出土の遺物

この横穴のある土地は同町大字田原今狩都とらの氏の所有であるが遺物も同家に保管されていた。われわれは町史編纂委員の西川功氏の案内で調査したものであるが、遺物は刀一振、刀子一振、鉄鏃八本であつた。（写真3）

1　刀　一振

直刀で柄部の柄頭を欠損しているが、現長六七センチ、うち柄長八、七センチで、柄は巾一、七センチ、厚さ〇、七センチである。身巾は中央で二、五センチ、棟巾は〇、八センチである。

2　刀子　一振

極めて小さく、また折れている。

3　鉄鏃　八本

平根が一本、尖り根が七本で、平根は三角形で、長さ一七センチ、尖り根はほとんど刀形のものである。

三、時代と保存

これらの横穴古墳は、みなこの地方の特徴で、火山灰層に掘り込まれている。この横穴はまだ充分調査されていないが、その出土品から見ても明らかなように、鉄鏃の尖り根が圧倒的に多く、平根式は一本に過ぎないことは、短甲の発達を見た古墳時代後期のものであることを物語つている。従つてこれらの横穴は古墳時代後期（今から一、四〇〇年ぐらい前）のものと考えられる。

今狩の横穴は、その位置から考えてこれを保存することは極めて困難であり、保存すれば、道路の破壊、その他の災害を生ずる虞れがある。従つてこれは埋めて残す以外に方法はないのである。

写真 1

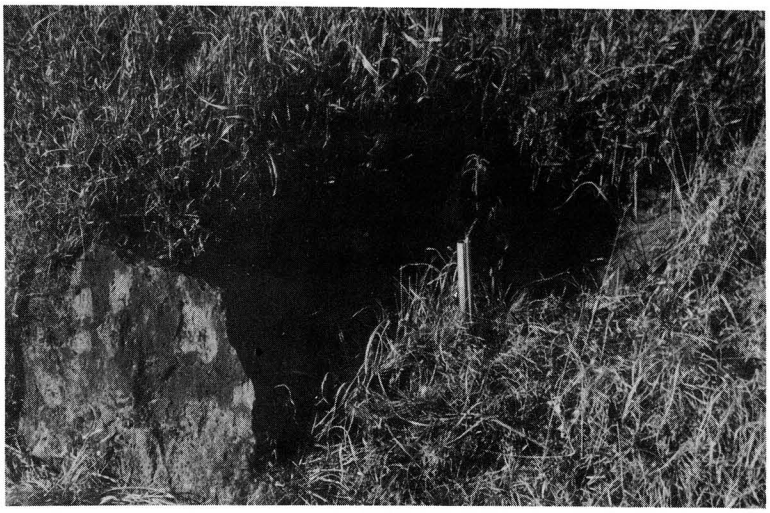
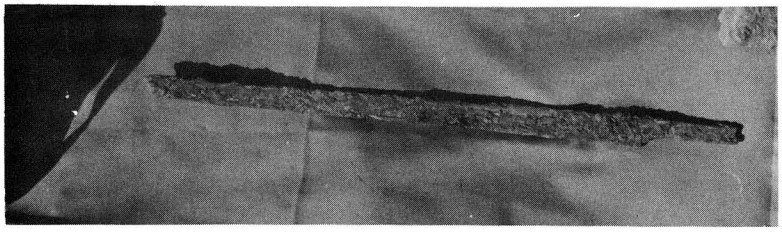
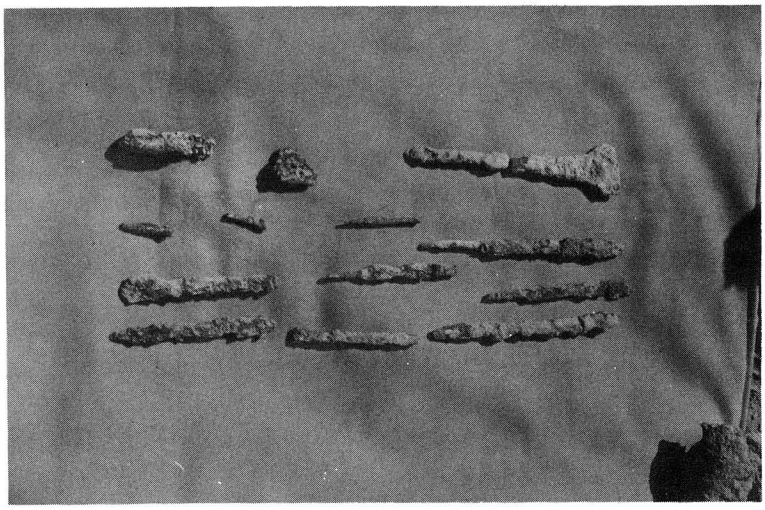


写真 2

写真 3





六、西臼杵郡高千穂町奥鶴の箱式石棺調査報告

西臼杵郡高千穂町奥鶴の箱式石棺調査報告

石川恒太郎

一、発見の動機

西臼杵郡高千穂町大字川内字奥鶴の小字丸山と呼ぶところは、熊本県境に近いところで、標高八四五メートルの山から南に降つている細長い尾で、その標高六〇〇メートルに達している。そしてこの細長い山の尾に箱式石棺が群在しているのである。筆者は嘗て昭和一七、八年ごろ、同地の故橋本惣一氏の案内でここに来たことがあり、この尾の西側に旧道が開かれたとき、箱式石棺の側壁らしい石が牛車に当つて掘り出されていたのを見たことがある。

昭和二六年にこの尾の上方に簡易水道の調圧槽が設置されたとき一基の石棺が掘り出されその中から短剣一振が発見され、この遺物は町教育委員会に保存されている。

しかるに昭和四五年になつて土地の人が、ここに農道を新設したところが、箱式石棺五基および横穴二基が発見されたので、町教委より県教育庁社会教育課に調査を依頼してきた。それで同課の加藤主事とともに二月一六日現地を調査したが、第1図は現場の附近実測図である。簡易水道調圧槽の下の1号とあるのが短剣を出した石棺で、写真1がこれである。2号、3号、4号、5号、6号とある五基が農道開さくの際破壊された石棺で、写真2は6号を示す。7号は写真3に見るごとく、嘗て筆者が見た石棺9の側壁であつてほとんど当時のままに残つていた。それでこれは一七日発掘調査を行なつた。8号と9号は横穴古墳らしく、8号は破壊されており、9号は天井部に穴があき玄室が見えているが、硝子などの捨場となつており（写真4）、小さい杉が造林してあるためか、地主が発掘を許さないということであつた。10号は7号の西に旧道を距ててあるが、余程以前に破壊されたらしく巨大な石があり、傍らに榊の巨木が立つている。（写真5）

二、発掘の結果

二月一七日7号の石棺を発掘調査したが高千穂町教委の後藤主事および高千穂高校教諭沢武人氏らが参加された。

発掘の結果箱式石棺一基を発見した。ここの石棺は千枚岩または泥灰岩などを利用した切石を組み合わせて箱形の石棺を造つているもので、簡易水道の調圧構下にあつたものは千枚岩であつたが、7号のは泥灰岩の板状に割れる石で造られていた。第2図に見られるごとく、石棺はほぼ東西に方位していたが、詳しく言えば東西より約20度北に傾いていた。石棺の側壁は北と南の長い西側壁が二枚の石を立て並べて造り、東の側壁は一枚の石を立て、南の側壁の石は前から下にずり落ちていた。

われわれは上部から表土を除いて行つたが、地表から約五〇センチのところで石棺の側壁の上部が表われた。写真6はそれを示す。さらに棺内の土を除くと、棺底には約四センチ内外の厚さに粘土が敷かれ、蓋石が一枚落ちこんでいた。写真7はその状況を示す。さらに棺底の粘土を除くと、その下に底石が敷かれていた。第二図平面図と写真8とはその状況を示す。そしてその間に僅少な遺物を発見した。

石棺の規模は比較的大きく、西側は側壁がはずれているが、東西の長さ約二メートル（内側の長さ約一メートル八〇センチ）南北の巾は約八〇センチ（内径約六五センチ）で、第2図の横断図に見るごとく、棺は上部が内側に傾いている。また棺底は東より西側にやや傾斜している。これは第2図縦断図に見られる通りである。棺の深さは七〇センチ内外で、棺側の頂上は、地表から五〇センチ内外であるが、石の厚さは一〇センチ内外で、元来は蓋石が下に四枚、上に継目に三枚あつたであろうと思われるから、棺の頂上は現在の地表から三〇センチ内外下のところにあつたものと思われる。そして第1図によつて知られるごとく、棺と棺との距離が近く、6号と

7号とは、僅かに三メートル離れているだけで、7号と10号もまたその程度であるから、これらの石棺には盛り土（封土）はなかつたものと見ることが妥当であろう。

三、遺　物

遺物は極めて貧弱で、写真9に見られるごとく、埴器破片二点と小刀子一振および鉄器破片一個に過ぎなかつた。

1　埴器破片　二点

これは埴器の坏（小形）の破片のようである。

2　小刀子　一振

柄頭部を欠損しており、現長八センチ、身巾二センチの小形のものである。

3　鉄器破片一個

これは極めて小さい破片で、鉈の柄部破片に鉄鏃の破片らしいものが誘着しているものである。

以上のように、棺内の遺物が少ないことは棺の蓋が失われていることや、埴器破片などが棺内で散乱していたことと併せ考えて、すでに早く盗掘され、これらの遺物は盗掘者が見落した品と考えられる。

（附）　上部石棺より出た短剣　一振

これは上方の簡易水道調圧槽を造つたとき発見された石棺内にあつたもので、柄頭部を欠いているが、現長二五センチ、身巾二、五センチで、先端より一六センチのところで身が折れているが接合される。このように小さい鉄劍であるが、その鐔口と鞘口に、美事な鹿角製の装飾が施こされている。鞘飾りは長径七、七センチ、短径三、五センチ内外の長楕円形で、約六分を遺存し、巾二、五センチ写真10および実測図に見られるごとく、この上下〇、五センチと〇、七センチを除いた中央一、三センチ内外の文様帯に半肉彫の直弧文が刻まれている。このような鹿角製刀装具は、今日まで東諸県郡国富町の六野原の地下式古墳や同町本庄、同町大坪などの地下式古墳、および都城市大字川東牧ノ原の地下式古墳などから、鹿角製柄頭、同鐔飾、同鞘飾などが発見されたが、今回は鐔飾と鞘飾が施こされているものが出たので、これらが、どのように用いられたかを知る上で、貴重な資料を提供するものである。その意味においてこの遺物は特筆に値するのである。

四、年代および今後の保存

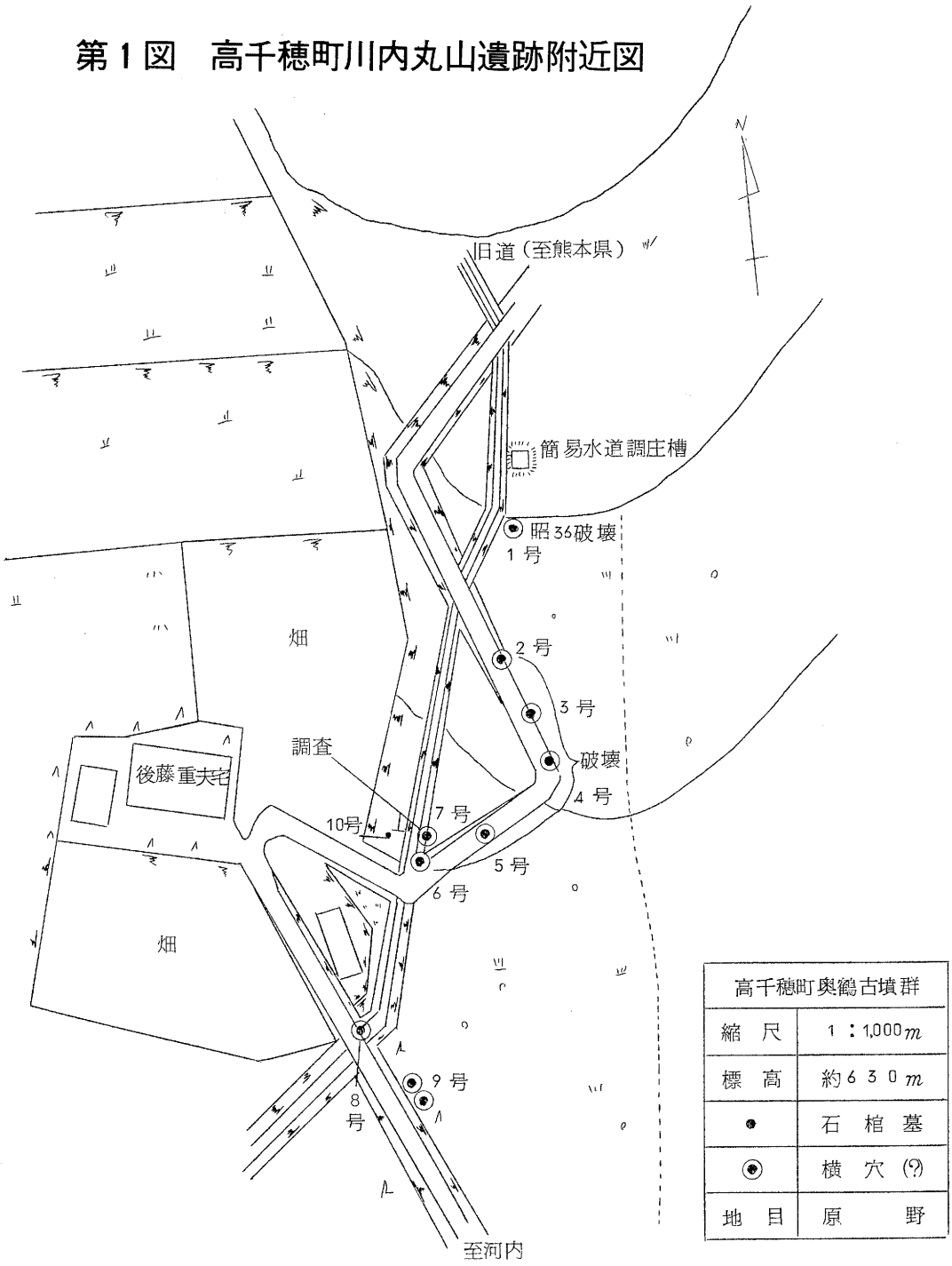
以上に記したごとく、ここには箱式石棺が群在するわけで、箱式石棺群と呼ぶことが適当である。だいたいこのような箱式石棺は、群在するという特質があるが、宮崎県におけるその分布は、延岡市の南浦、東海、岡富、恒富から、五ケ瀬川ぞいに東臼杵郡北方村からこの高千穂町川内字奥鶴に及び、南は門川町から耳川ぞいに諸塚村松ノ平、その南岸西郷村尾佐渡にあり、また県南串間市の市木地方の海岸ぞいの山に分布している。

これは千枚岩の自然石を用いるものから切石を用いるものまで、種々の種類があるが、形式的に見れば、千枚岩の自然石を用いて箱形を造り、箱形は棺側の長い方の側石が長く棺身より前後に突出していて、前後に小さい室ができており、かつ、棺底の底石のないものが古いようである。このような箱式石棺は弥生時代から古墳時代を通じて行われたものであつて、その石棺の時代を決定するには、その出土品によつて判断しなければならない。そうすると、この石棺からの出土品は埴器があつたから弥生時代のものではないことは明らかである。しかし埴器があつて、須恵器はなかつたし、その他の出土品も新らしいものはないので、だいたい古墳時代中期（今から千五百年ぐらい前）のものと見るべきであろう。

今後の保存については、7号石棺は蓋石をして西側からのぞき見ら

れるように学生、生徒の見学に資するとともに将来に保存することとした。その他のものについては、この土地の人々は、これら古墳の主を非常に尊敬しているので故意に破壊することはあるまいと思われるが、できるだけ早く県指定にしておく必要があると思う。

第1図　高千穂町川内丸山遺跡附近図



第2図　高千穂町奥鶴第7号箱式石棺実測図

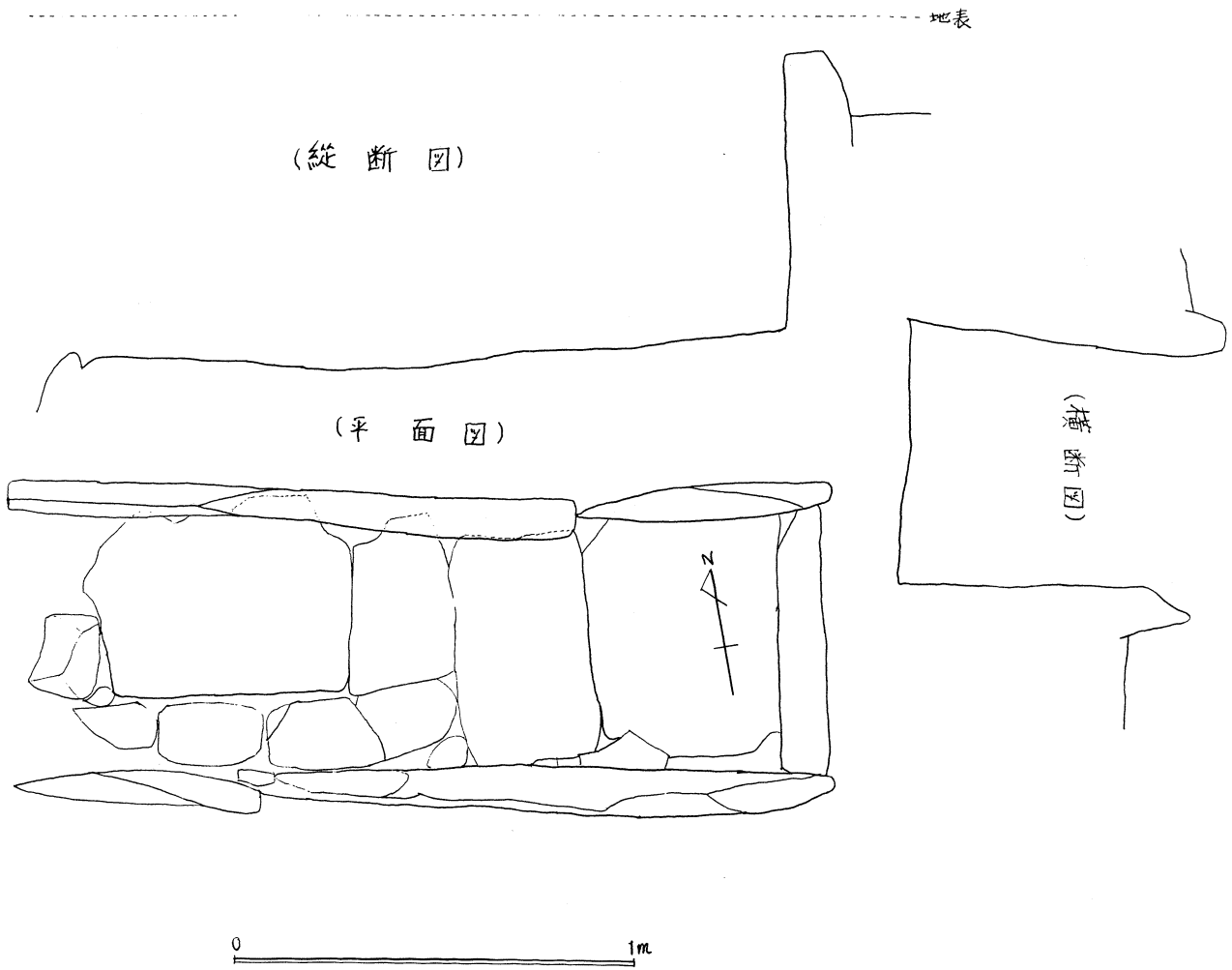


写真 1

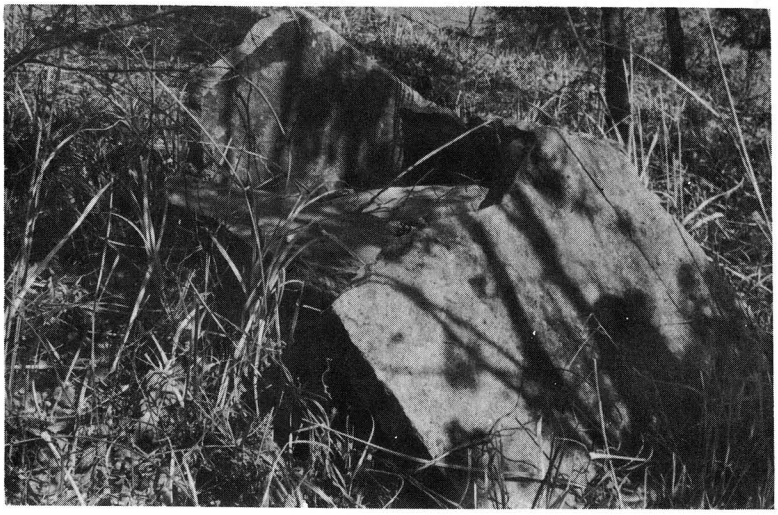


写真 2

写真 3

写真 4

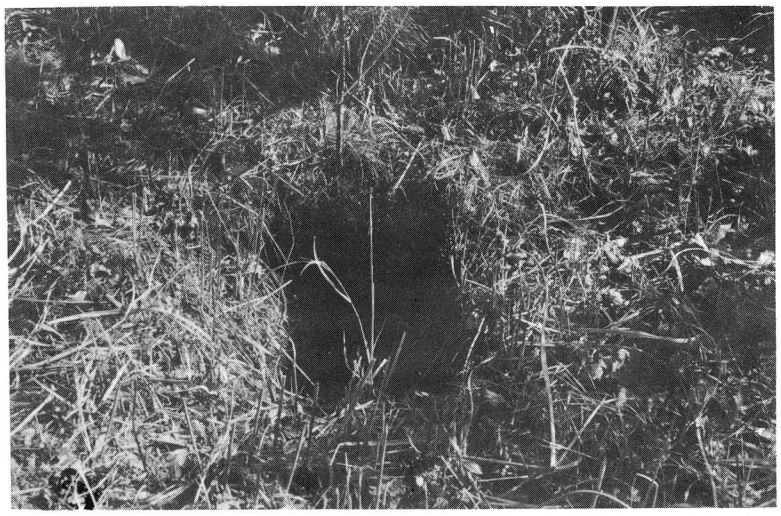


写真 5

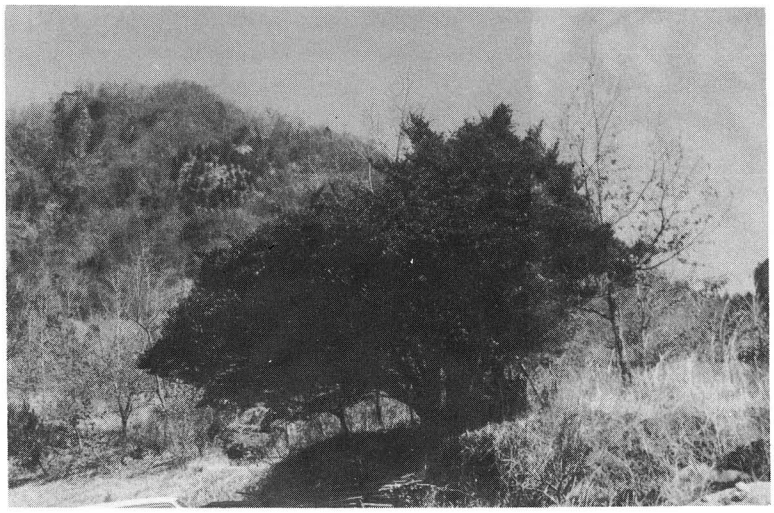


写真 6

写真 7

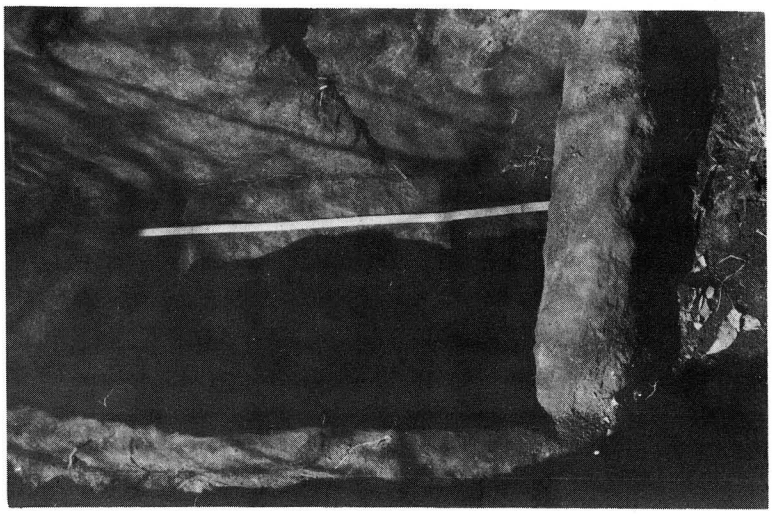


写真 8

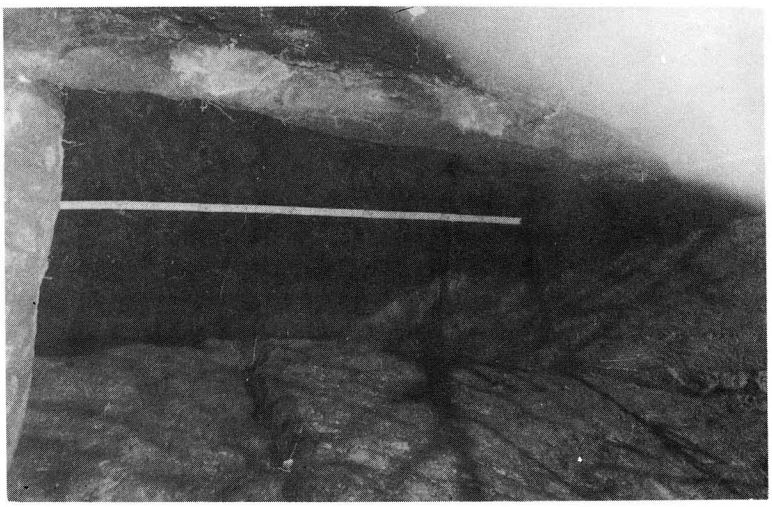


写真 9

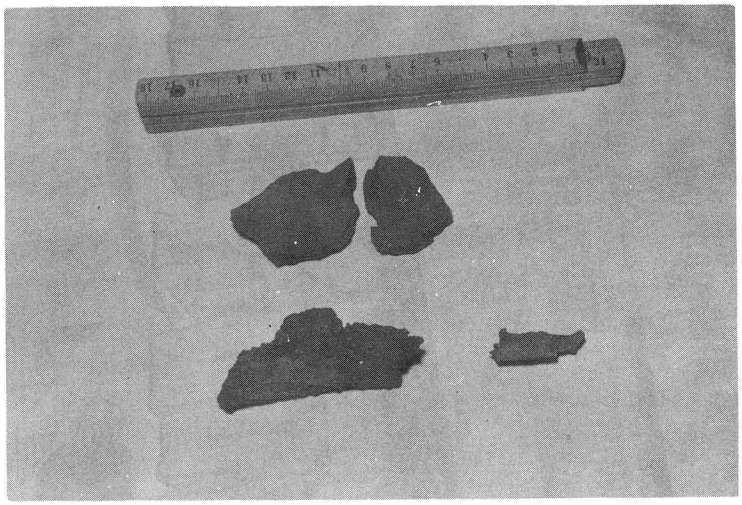
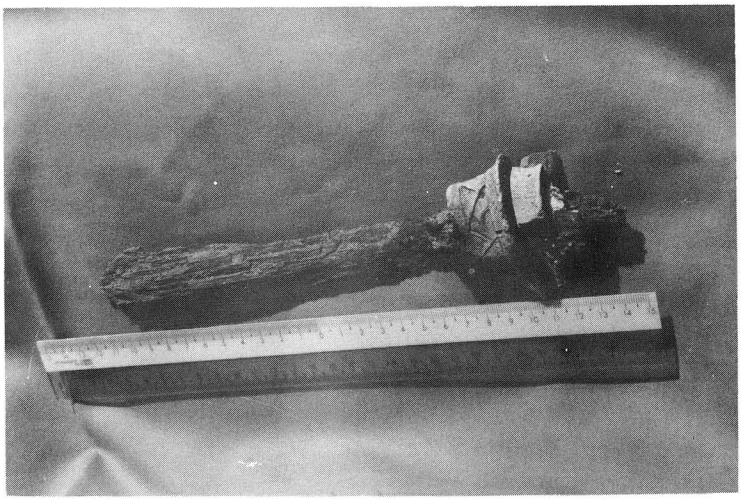


写真10



七、延岡市友内山箱式石棺調査報告

延岡市友内山箱式石棺調査報告

石川恒太郎

一、所在と現状

延岡市無鹿町の友内山は北川が延岡港に注ぐところの南岸にあり、北川とこれより岐れて寺島の西岸を流るる支流とに挾まれた丘地で、標高四〇メートル、東方が南北二つに分れた石鏃形の丘である。

この丘上に五基の円墳があり、県指定であつたが、宅地開発のため他の四基は破壊され、さきに日高正晴氏らが調査されたものの残りで、この古墳は南側の丘の東端に位置していた。丘頂が隆然として高く円墳状を呈し、頂上やや北寄りに「三島さん」と里人に呼ばれる祠がまつられていた。大山祇命をまつるものに三島神社というものが多いからそれであろう。

平部嶠南編著の「日向地誌」（粟野名村の部）に、

「鞆内陵

本村ノ東北隅北川ノ南涯鞆内邱ノ西畔ニアリ其地隆起シテ円ナリ、今ヲ距ル六十余年文政ノ初メ土人其顛ヲ墾シテ石槨及ヒ短刀ヲ得タリト云フ、此ヨリ二十間許東ニ離レ又隆然トシ円ナル処一ケ所アリ古陵ニ疑ハシト雖モ今徴トスル所ナシ」

とあるが、この古墳は後者の「古陵ニ疑ハシ」とあるものに当るものようである。

この古墳は一基残されていたが、民家がすぐ下に接しているため、このまま存置しておけば、土砂の崩壊によつて災害の生ずる虞れがあるというので、地元より指定を解除して調査の上、記録保存の後開発させて欲しいという要望があり、県教委で検討した結果、記録保存を行うこととなつたものである。それは昭和四十五年九月七日県社会教育課の寺原俊文係長、加藤成夫主事とともに現地に出張し、延岡市教委社会教育課の甲斐常美主事および同課職員等の参加を得て、同日と翌八日の二日間にわたり発掘調査を行なつた。

二、調査の結果

九月七日は部落の人夫数名を雇い、市社会教育課職員の参加のもとに、丘頂に東西に亘つて幅二メートル、長さ五メートルのトレンチを設けて、その表土を除いたが、ほぼ中央より東方はすでに地山であつた。それで「三島さん」には触れないことにし、そのすぐ近くまで北方にトレンチを約一メートル拡張したところが、「三島さん」の附近に千枚岩の破片などが多く埋つていることを認めた。それでこれを追うて発掘した結果、ついに箱式石棺の側石と思われる千枚岩が二枚南北の方向に立つているのを掘り出して、この日の作業を終つた。（写真1）

翌八日はまた前日と同じ人数で、昨日掘り出した箱式石棺の他の側石を探したが、東側の北端に小さい石があつただけで側石も蓋石もなく、この古墳はすでに早く破壊されたものであることが知られた。それでこの古墳で残されていた構造は次の通りであつた。（第一図参照）

石棺はほとんど正しく南北の方向（一〇度東に傾く）に向い。西側の側石は大きい千枚岩二枚より成つている。北方の一石は長さ七四センチ、厚さ一五センチ、幅五〇センチで、これに続く南方の石は長さ一二五センチ、厚さ一〇センチ内外、幅五〇センチであつた。従つて棺の長さは全長二〇〇センチ内外となる。東側の石は北端に一石を残すのみで他は失われているが、この石は西側の北方の石の北端より二〇センチを距てて平行に長さ二九センチ、厚さ六センチ内外である。石棺としては棺の幅二〇センチでは余りに狭ますぎるが、恐らく南方が広くなつていたものと思われる。

西側の側石は高さ（石の幅）五〇センチであるが、少し切り過ぎたようで、もとは四〇センチであつたと思われる。そして側石の頂上は現在の地表下六八センチのところにあり、甚だ深い。南北の側石もないが、南端に小さいが長さ二〇センチ、頂点の高さ九センチ

の三角形の石があつた。

なお西側の両石の西方は硬い山の磐であるから、そちらに側石があるはずはなかつた。またこの側石の棺内にあたる東側には、東側の石の上方にある「三島さん」に小積まれているような千枚岩や川石などがたくさん落ち込んでおり、石に混つて須恵器の破片多数と弥生式土器の破片二個、銅片二個、寛永通宝一枚が見いだされた。（写真2）

三、遺跡の年代

以上の通りで、この遺跡が千枚岩を立て並べていることは、ここの丘状の諸遺跡と同じで、明らかに箱式石棺の一部であるが、東側と南北の側石および蓋が取り去られていることから見て、すでに早く破壊されたものであることが知られる。前に掲げた「日向地誌」に、文政の初めに土地の人が、西方の古墳を掘つて短刀を得たとあることから考えて、その際この古墳も掘つたのではなかろうか、寛永通宝があつたことは、この考えを支える。寛永通宝は明治時代まで通用したから、或いはその後発掘して何かの事故があり、三島さんとしてまつつたのかも知れない。

しかしその以前に掘られていることは須恵器の破片が多く埋もつていることで明らかである。この須恵器は採集したものが、小さい破片一四片で、蓋坏二個、坏一個か二個分と思われる。また一緒に見いだされた銅片二個は薄い同じ銅片の折れで、一部に模様があるが何かわからない。ただその模様は鋳造されたものではなく、叩き出されたものと思われる。

ここで注目されるのは、千枚岩の割れや川原石などが棺の上まで積まれていたように埋つていたことで、表面にまつられている三島さんの石小積は昔棺上に積まれていた石の残りとも見られるのである。この丘上では前に日高正晴氏が発掘された積石塚（ケイルン）があつたことから見て、この古墳もその一種と見てよいのではないかと思うのである。

この見方を採れば、小さい破片ながら弥生式土器の破片二片が棺底附近から見いだされたことを重視せねばならないし、須恵や銅の破片は平安時代ごろに、ここの石を利用して経塚が設けられたものと考えねばならない。このように河岸に突出した丘上に経塚が営まれた例は、すぐ近くの同市三須丘上の円墳にその実例があつた。

若しまた、これら須恵器の破片を、この古墳の副葬品と考えれば、古墳後期の箱式石棺で、銅片や石積は後世古墳の石棺を壊して経塚を作つたものと考えねばならない。

このように破壊されているものは、何れとも定め難いが、これが箱式石棺の一部であることは明らかであるから、右に述べた二つのうちの一つであろう。

第１図　延岡市友内山箱式石棺実測図

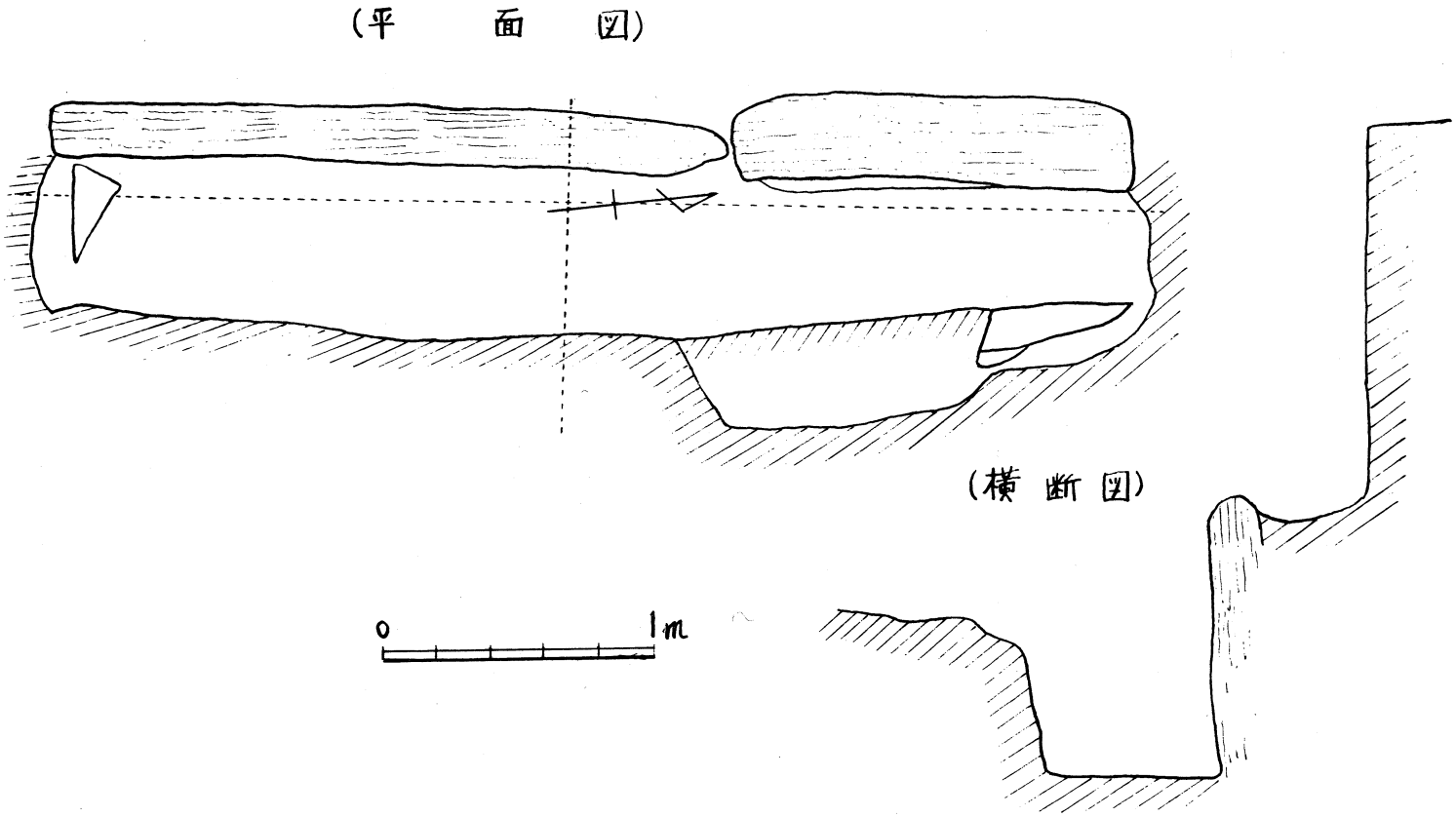


写真１　友内山の石棺の側石

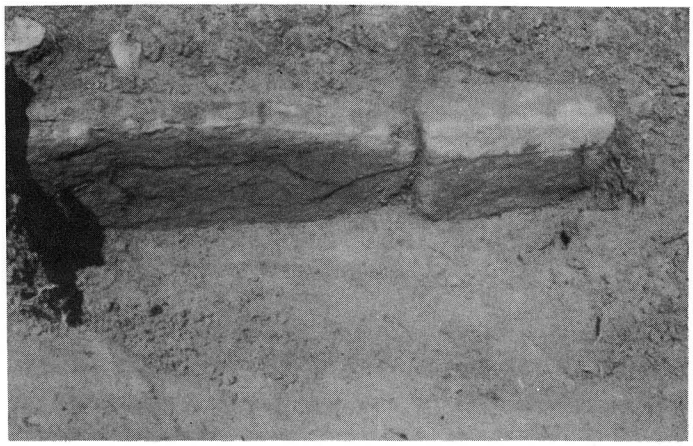
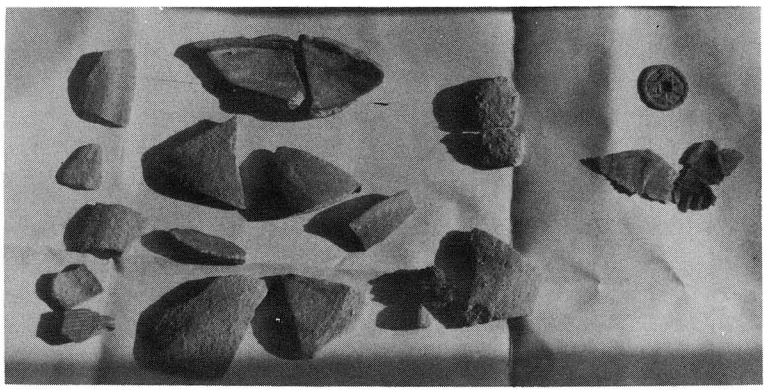


写真２　寛永通宝（右上）銅片（右下）
弥生式土器片と須恵器破片



八、高崎町横尾地下式古墳調査報告

高崎町大字縄瀬字横尾地下式古墳調査報告

石川　恒太郎

一、発見の動機

北諸県郡高崎町大字縄瀬字横尾の森重美則氏所有の畑の土地を地均らし工事中ブルトーザーの陥没により、地下式古墳三基が発見されたという報告に接し、昭和四十五年九月二十六日、県教育庁社会教育課加藤成夫主事とともに同町に出張、現場に到つた。

現場は縄瀬小学校の南方の丘地で、ここはこの丘から東方に向つて降つている丘地のほぼ頂上部に当るが、この附近一帯に地下式古墳が多く、嘗て小学校の校庭その他から数基の古墳が発見されたといわれている。現地に玄室が破壊されて穴のあいていたものは三基であつたが、外に竪穴の見えている所二、三ケ所あつたけれども、ブルトーザーに押されて忽ち破壊されてしまつた。それで急ぎこの三基を調査することとし、同町教委の黒木社会教育課長の参加を得、町内の青年を人夫として九月二十六日と翌二十七日に緊急調査を行なつた。

二、調査の結果

まず北側のものから第一号、第二号、第三号と仮称することとした。この地方の地層は黒色の表土が厚さ四〇センチから所によつては六〇センチぐらい入つており、その下に厚さ一〇センチ内外のローム層があり、その下に厚い赤ボラの層がある。そして古墳はこのボラ層に設けられている。

第一号墳はもつとも北の道路に近い所にあり、玄室を西南に羨道を東北にして作られていた。その形は第一図に見るごとく、羨道の片側に玄室を設けていた。平面形はP字形をなし、玄室はほぼ東南より西方に方位し、長さ一七八センチ、幅約一二〇センチで、天井は破壊されていたが、だいたい一〇〇センチぐらいであつたと思われる。玄室の床面には何らの遺構もなく、ほぼ中央に頭を東南にし足を西北に伸ばした二体分の人骨があつた。（写真1参照）

羨道は玄室の接点で幅八〇センチ、高さ九七センチで長さは八〇センチ内外で、大きい軽石で閉塞されていた。竪穴は調査することができなかつた。玄室の床面は地表から一八〇センチの深さにあつた。

人骨は二体分で、頭蓋骨はかなり遺存していたが、大腿骨、脛骨以外は形を想像する程度に過ぎなかつた。頭蓋骨は東西に並んでいたが、奥の方のものは女性で、人口に近いほうは男性であつた。その他副葬品はなにもなかつた。

第二号墳は第一号の南方三メートル内外のところにあつた。これは羨道部の天井が破壊され、玄室に人骨のあるのが見える状況になつていた。これは第2図に見るごとく、玄室を北に、羨道と竪穴を南にして設けられ、その平面形は鍵を思わせる形で、これも羨道の一方側に玄室が張り出していた。

玄室は東西に長く、長方形を呈し、長さ一七五センチ、幅中央で一一三センチで、天井は多少の剝落はあつたが、ほとんど残存し、高さは一三〇センチで半円形をなしていた。（写真2参照）玄室の床面は地表より一八〇センチ深く入つていたと思われる。もつとも地表面はすでにブルトーザーで削られていたが、附近の地表と比べてみて大体右のように思われた。

玄室の床面には何らの施設もなく、人骨一体が、頭を東にし、足を西にして葬られていたが、頭蓋骨も壊れ遺骨は僅かであつたけれども頭蓋骨には朱が塗られていて、洗骨の風習を示している。また副葬品は何もなかつた。（写真3参照）

羨道は玄室の東壁が南方に伸びてできており、はなはだ長く、長さ一三八センチ。幅五五センチ、高さ八〇センチで、天井は平らで

ある。しかも閉塞石はなく、竪穴の土が羨道内に流れ込んでいた。

竪穴はその南にあつて幅は、羨道の東壁から東に四〇センチ、同西壁の西に二五センチ拡がつているから、竪穴の幅は一二五センチで奥行は七〇センチであることが計られた。

第三号墳は第二号墳の南方二メートル内外のところにあり、玄室を西南に、羨道を東北にして作られており、この古墳も羨道の北西方の一方にのみ玄室が作られている。その平面形は第3図に見るごとく、鳥に似た形をしている。

玄室は長さ一八四センチ、幅中央で一〇〇センチ天井は壊れているが、余り高くなく、八〇センチぐらいと思われる。床面には何らの施設もなく、人骨一体がほぼ中央に頭を東南に、足を西北にして葬られていた。（写真5）

人骨は頭蓋骨をはじめ、脊椎骨、大腿骨、脛骨などは比較的よく残つていたが、他はほとんどなかつた。また頭蓋骨には朱が塗つてあり洗骨の風習を示していた。（写真6）

また副葬品として剣が一振、頭蓋骨の東北方に約三〇センチを距てて人骨に平行して鋌を東南の壁に向けて置かれていた。

この剣は総長三一、五センチ、身長一六、五センチ、身巾中央で二、七センチで柄部が良く遺存しており、柄の遺存八、五センチ、他は木質の一部が残つているもので、柄には木質がよく残り、幅三、五センチ、厚さ一、七センチ、木質の上を紐で巻いているのがよくわかる。珍らしい剣である。しかも柄部がこのように木質を残しているのに鞘がないのは、初めから抜身で副葬されたことが知られる。（写真7参照）

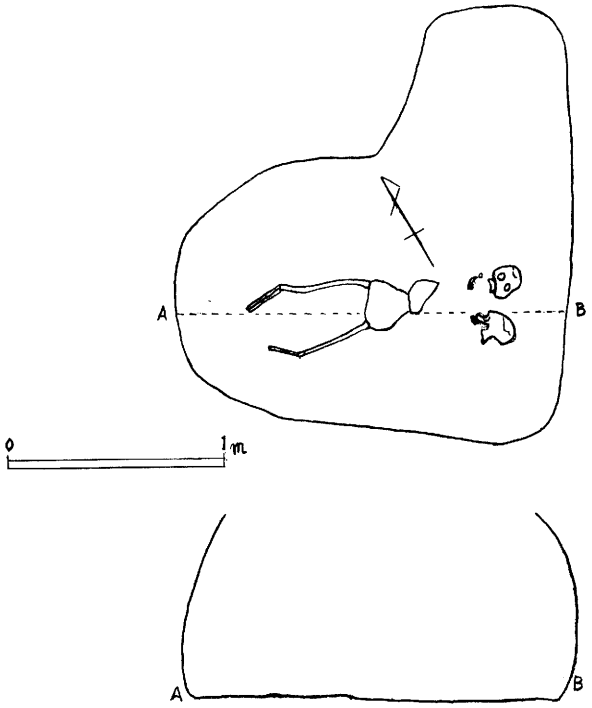
羨道は長さ四〇センチ、幅四七センチで、中央が狭く、玄室の入口と、竪穴との接点は五五センチであるから中央部は崩れ込んでいるのかも知れない。羨道の高さは七七センチである。そして羨道は大きい軽石数個をもつて羨門を塞いでいた。

竪穴はそれに続く東北にあり、（写真4参照）これも羨道の東南のみに拡がり、西南の長さ一二〇センチ、西北の壁の長さ六二センチ、東北から東南の壁は嘴状に伸びて半円状を描いている。高さは古代の地表に及んでいたわけであるが、その高さは羨道の天井の高さであつた。

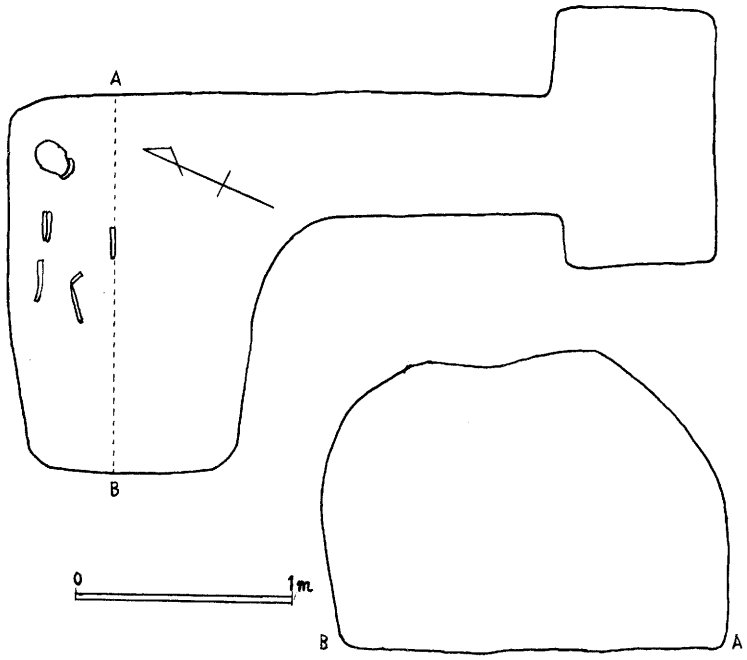
三、遺跡と年代

ここの古墳は右に記した通りであるが、その形が甚だしく流れていること、地表から比較的浅くて堀り易いボラ層に古墳を設けていること、遺物が少ないこと、これらの事情からこの古墳は、地下式でも最も新らしいもので、古墳時代後期（約千三百年ぐらい前）のものと思われる。

第１図　高崎町横尾地下式第１号墳



第２図　高崎町横尾地下式第２号墳



第３図　高崎町横尾地下式第３号墳

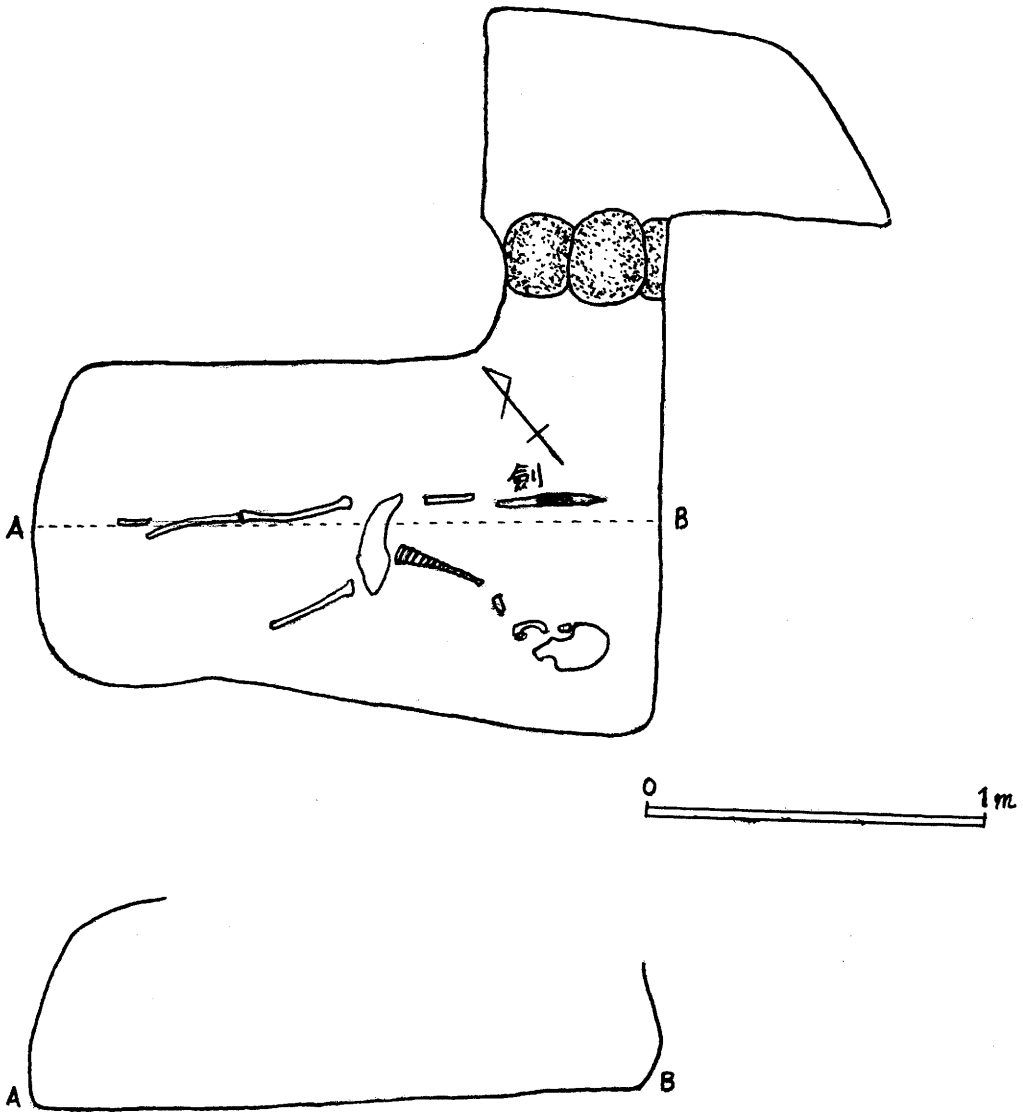


写真1
第1号墳玄室
の人骨

写真2
第2号墳の玄室

写真3
第2号墳の人骨

写真4　第３号墳の竪穴

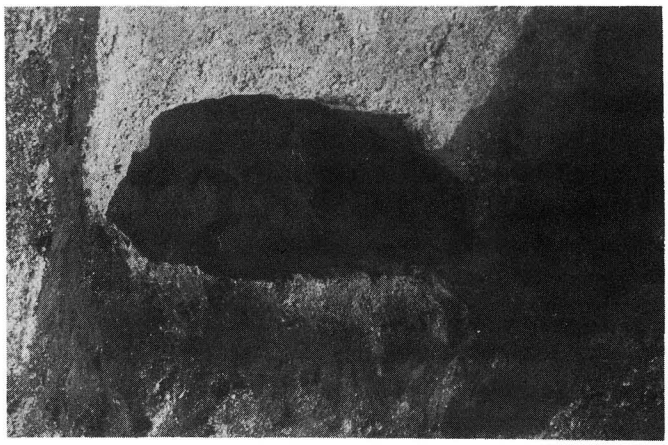
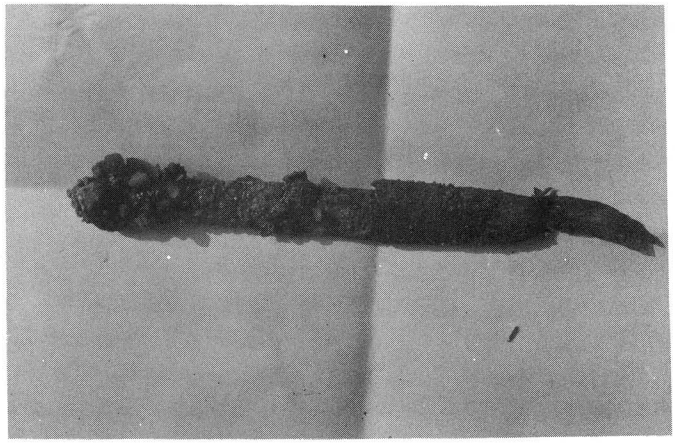


写真5　第３号墳の玄室と人骨

写真6　第３号墳の頭蓋骨

写真7　第３号墳にあった剣



九、串間市徳山地下式古墳調査報告

串間市徳山の地下式古墳調査報告

石川　恒太郎

一、発見の動機

串間市大字大平字徳山は、串間市上町の東北方約二、五キロメートルのところで、ここの国道二二〇号線と国鉄日南線に挾まれた台地に土取場がある。この土取場は国道二二〇号線の西側であるが、今までにも約八基の地下式古墳が発見されたということである。

しかるに最近また土取中に三基の古墳が発見されたというので、昭和四十五年十月七日県教育庁社会教育課の加藤主事と現地に出張した。

三基のうち最も南にあつた一基は、ほとんど破壊されて、その跡をとどむるだけであつたが、北から第一号、第二号、第三号墳と呼ぶこととした。これら三基の位置は第1図に示す通りである。（写真1は第一号と二号）

第一号墳は竪穴が破壊され、羨道も玄室も壊れ写真2に見る通りであつたが、測り得た限りでは、竪穴の底は長さ一、七五センチ、巾一メートル、高さ一、三五メートル羨道は入口の巾一、五五メートル、高さ五〇センチ、羨道の長さ（奥行）は二〇センチ、玄室の巾（奥行）は五〇センチ、長さは現存一、九五メートルであるが、天井は平たく、高さ四四センチであつた。この古墳には人骨一体と剣一振があつたが、すでに発掘されて人骨は同市の文化財審議委員簑方政夫氏方の墓地に埋め、剣は同氏が保管していた。この市にはこれらの遺物を保管するに適当な場所がないということであつた。

剣は写真3に見られるもので、比較的身巾が広い。総長二七、五センチ、身の長さ二一、二センチ、茎の長さ六、三センチ、身巾は中央で四、四センチ、関巾四、八センチ、茎は梯形をなし、関のところの巾三、五センチ、中央で二、二センチ、末端で一、七センチ、厚さは〇、三五である。

第二号墳は写真1の左方に板の立ててあるものがこれで、これも破壊されており、羨道は長さ（奥行）一四センチ、高さ四九センチ、玄室は長さ一、九〇メートル、巾（奥行）五五センチ、高さ約四六センチで、天井は平たい。玄室はほぼ南北に長く設けられており、その中央に人骨一体が南に頭蓋骨を置いて南北に伸展葬されていたが、人骨は漸く形を止むるだけで、副葬品もなかつた。竪穴は底部を測れば長さ一、一三メートル、巾二、一〇メートルで、地表からの深さ一、八五メートルであつた。

この日は雨天であつたので発掘はしなかつたが、この台地にはなお多くの古墳が存在するものと思われるので、このまま破壊されるに委せるわけには行かないということから、台地にある処女墳を発掘して記録保存を行うことが適当であるということになり、同年十一月十二日から三日間同市に出張して発掘調査を行なつた。

二、発掘調査

発掘調査には同市の文化財審議委員の森駿、簑方政夫その他の人々が参加されたが、この台地は国道面からの高さ二メートル余で、表面は平らでもと畑であつたらしいが、今は荒地で薄が生い茂つていた。写真4はその薄を刈り取つた状況である。われわれはこの台地上に国道にほぼ平行して南北に巾一メートル、長さ一〇メートルのトレンチを掘つた。ここの地層は北より南に傾いており表面の黒土層の下にローム層があり、その下に褐色の粘土質土層があるが、竪穴を探すためにトレンチの表土を除いてローム層を出した。ローム層の深さは北で五〇センチ、南では一メートルであつたが、その最も深い南端において竪穴の一部を見いだした。それでこの第一トレンチを西と南に延長する第二、第三のトレンチを設けて遂に竪穴の位置を確定した。第2図はその状況を示す。写真5は掘り出された竪穴の位置である。ついで竪穴内に埋まつている表土を排除して竪穴の全貌を出すと、その西壁に羨道と玄室が見られたが、この日

はそれで終つた。

翌日は小雨が降つたが大したことはなく、神酒を捧げ一同古墳の霊に黙禱した後発掘を進めて古墳の全貌を出し、これを第四号墳と命名した。写真6と第三図がこれを示す。

三、古墳の形状

この地下式古墳は第三図の平面図で知られるごとく、竪穴を東南に、羨道と玄室を西北にして造られていた。竪穴は東北より西南に長い長方形で、上部が底面より広い逆梯形をなしていた。上部は長さ二、五五メートル、巾一、三〇メートルの隅丸長方形で底面は長さ一、八二メートル、巾七五センチ内外の隅丸長方形で、その底面は地表下一、三五メートルのところにあつた。

羨道は竪穴の西北側の壁に開口していたが、西南部は竪穴の底部から北東三五センチのところ、北東部は竪穴の底部から二〇センチのところに開口しており、その巾（入口の長さ）は一、二二メートル、長さ（奥行）は一八センチ内外である。高さは五〇センチで、入口附近に塊状の粘土が多くあつたが、これをもつて羨門を塞いでいたとなすには不充分なように思われた。

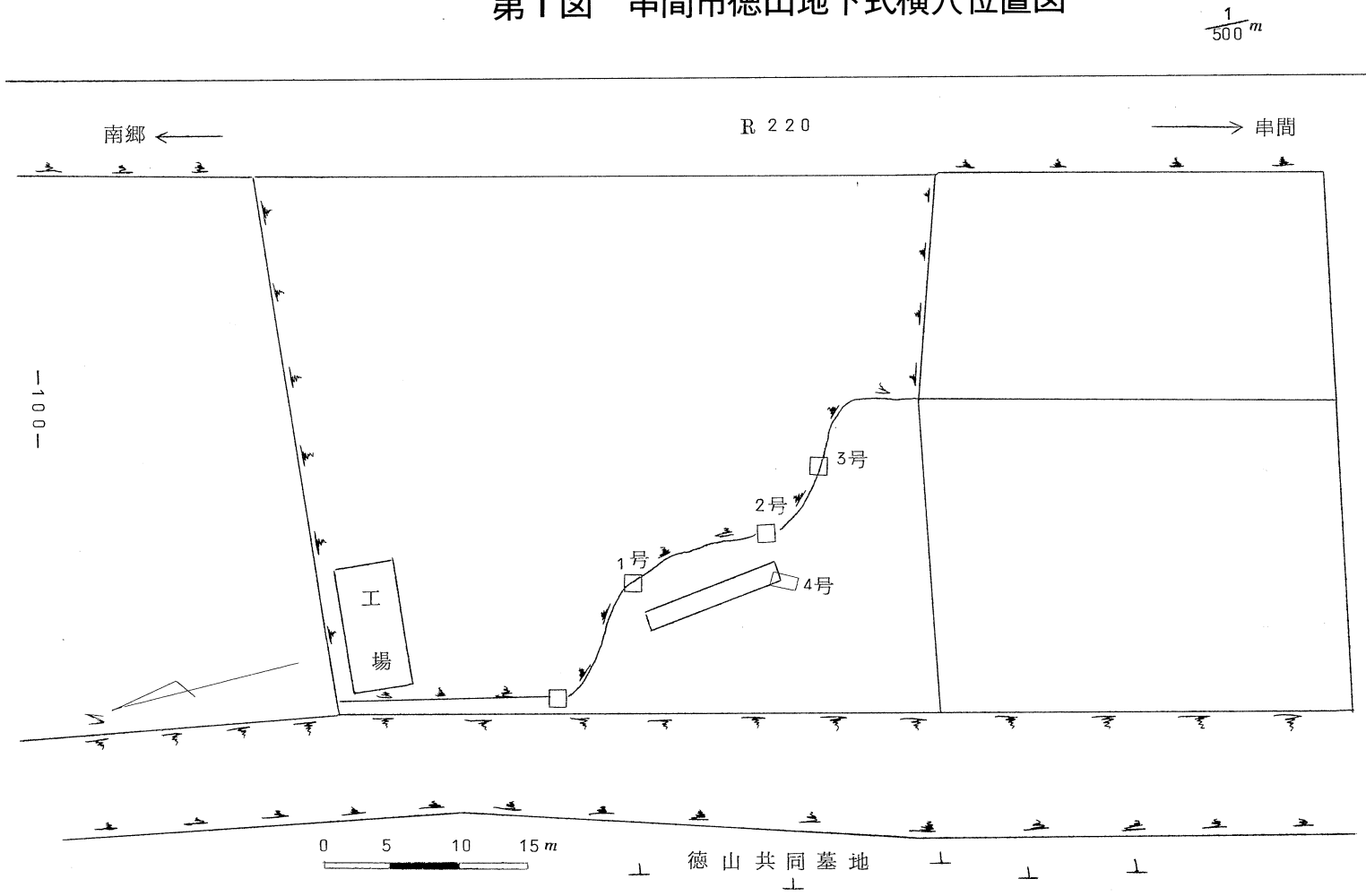
玄室はその奥（西北）にあり竪穴と平行に西南から北東に長い楕円状で、長さ一、九四メートル、巾（奥行）中央で六八センチ、天井は平らで第三図の横断面に見られるごとく、玄室の天井は羨道の入口から斜めに降つて奥壁は円くなり、横断図はゴム長靴のような形を呈する。床面には何らの施設もなく、人骨はすでに消滅しておつたが、玄室の北東部北寄りに頭蓋骨が形だけを残していた。それでこの玄室には頭を北にして一体が葬られていたことが知られた。副葬品は頭蓋骨から約三〇センチ離れた東南の玄室の入口に鉄鏃が一本、刃を北東に向けてあつただけであつた。（写真7）

鉄鏃は長さ一〇、五センチの剣先形の平根式で最広部の巾四センチである。（写真8参照）

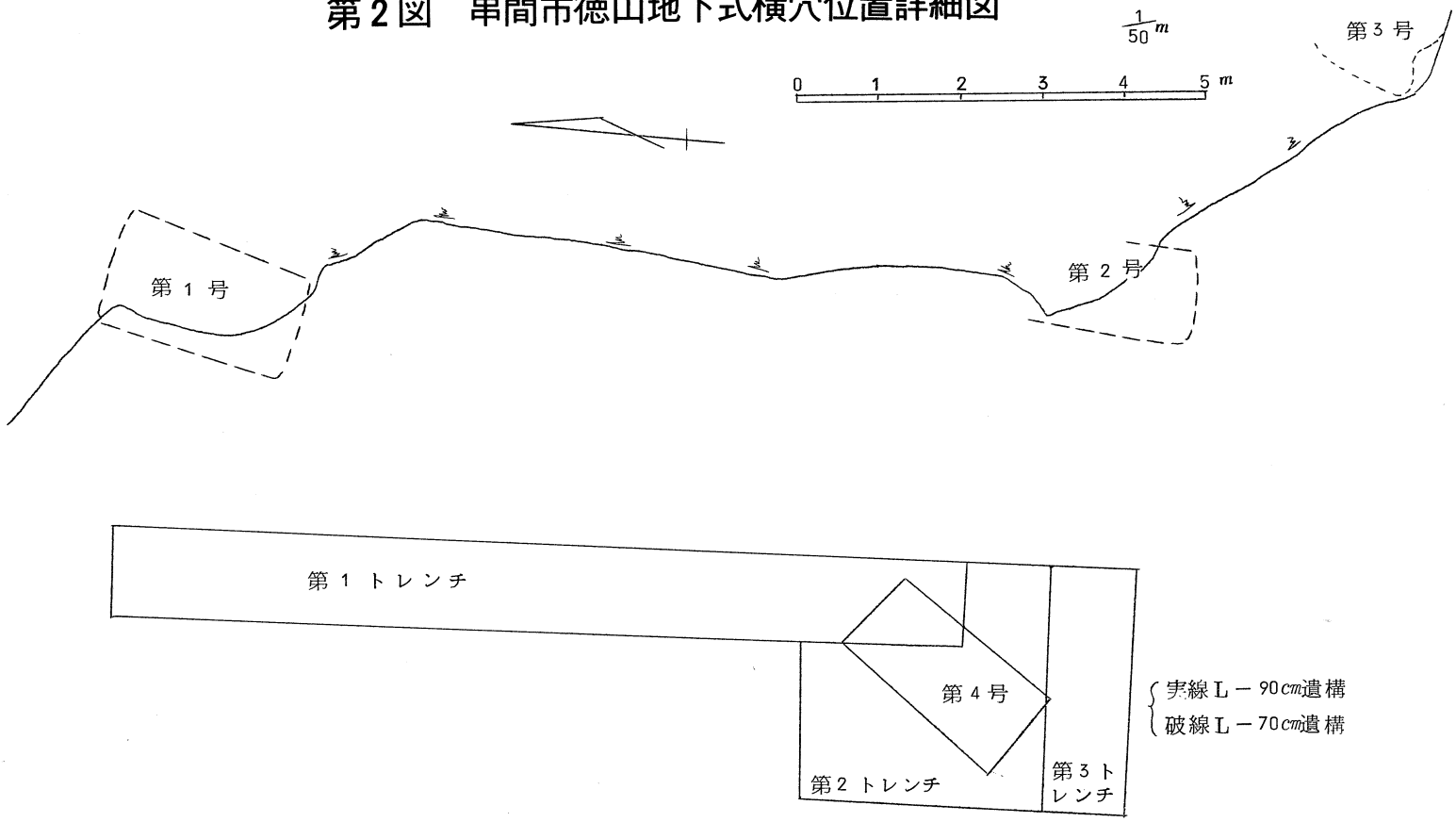
四、古墳の特徴と年代

ここに見られた四基の古墳のうち、第三号は不明であるが、第一号、二号、四号を通じて見られる特徴は、県下各地の地下式古墳に見られない特異なもので、第一には竪穴が大きい割に玄室が小さい。また羨道は入口が広く奥行が短かい。このような形式は他地方に見られぬもので、ここの特徴ということができる。しかしこのように、羨道が奥行が短かく、申し訳ばかりに付いていることは、やがて羨道が消滅しようとしている退化形式と見るべきで、このことは副葬品の貧弱なことからも推測される。従つてこの古墳の年代は古墳時代の後期、今から千三百年ぐらい前のものと考えられる。

第1図　串間市徳山地下式横穴位置図



第2図　串間市徳山地下式横穴位置詳細図



第３図　串間市徳山地下式第４号墳実測図

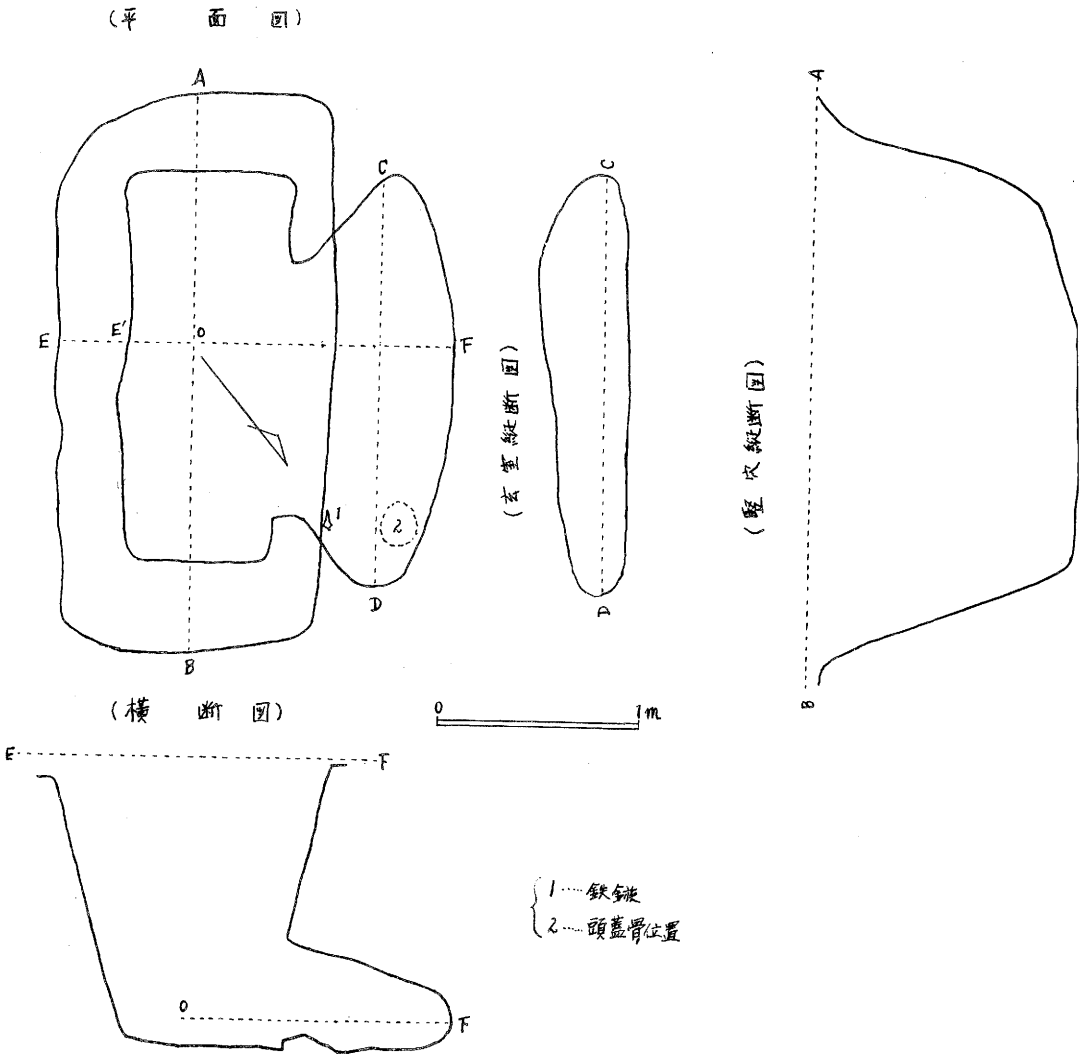
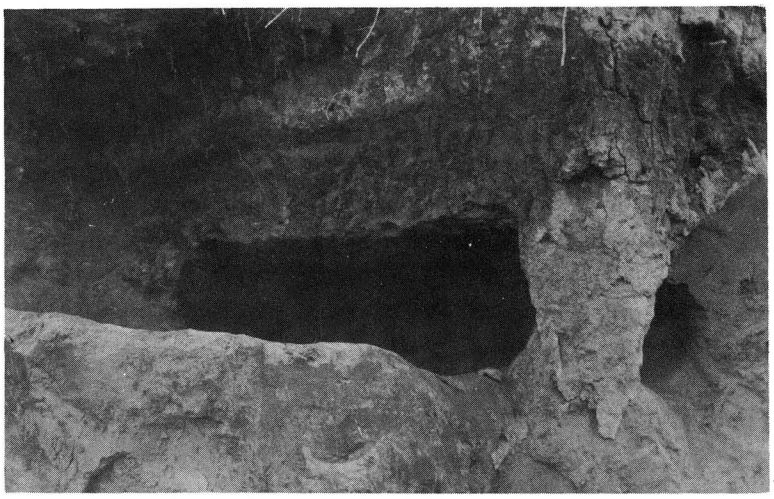


写真１
土取場
第１号墳（右）
と第２号墳（左）

写真２
第１号墳の現況



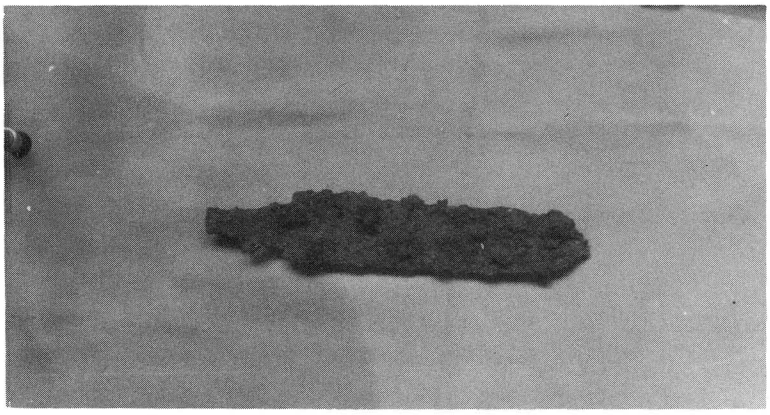


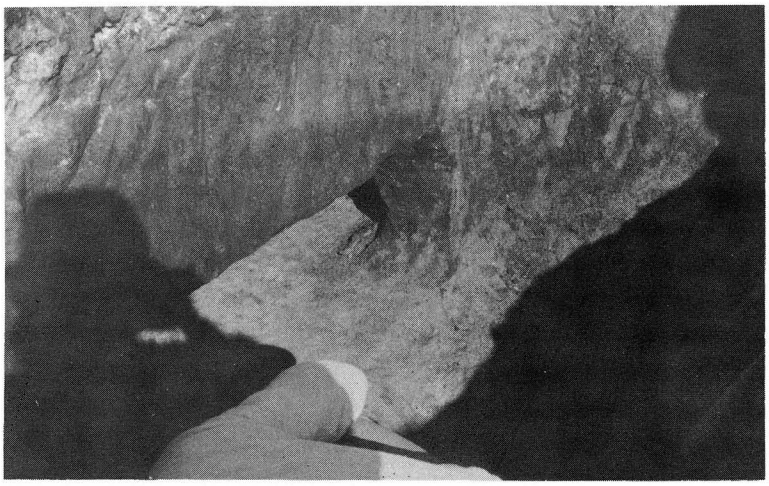
写真３
第１号墳出土剣

写真4　台地上の状況

写真5　竪穴を掘り出した状況

写真6
竪穴と玄室

写真7
玄室に鉄鏃
のある状態



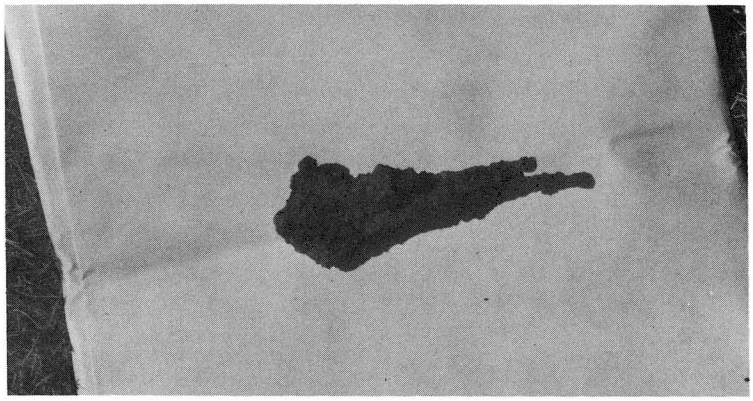


写真8　鉄　　鏃

一〇、高千穂町田原字染野平横穴古墳調査報告

高千穂町田原字染野平横穴古墳調査報告

石川　恒太郎

一、発見の動機

西旧杵郡高千穂町大字田原字染野平（そめのひら）で部落共用の用水溝（幅約一メートル、深約六〇センチ）を開さく中、昭和四十五年十二月七日偶然横穴古墳の蓋石に掘り当てたので、同部落では直ちに工事を中止して町教育委員会に届けた。町教委では直ちに県教育庁に連絡してきたので、同九日同町に出張したが、同町に入る国道二一八号線の道路工事による交通規制のためバスが延着したため午後二時過ぎに町教委に到着した。

同町教委の職員の案内で現場を見たが、現地は字梶原から染野に到る道路の中間で、この附近は丘を削つて道路を拡張しているが、道路の曲り角の丘を切り取つて広いカーブのできているすぐ下であつた。この広いカーブを造つた際横穴が一基壊されたということであつた。現場は用水溝が丁度横穴のところまで造られ、そこで工事は中止され、傍らに古墳の羨道の口を塞いでいた蓋石が置いてあつた。蓋石は一枚の凝灰岩で、四角形に近く、長さ七〇センチ、幅六五センチ、厚さ一三センチであつた。このままでは保存できないので、調査して記録保存をなすこととし、道具もないので明日調査することとして引揚げた。

高千穂町の大字田原には横穴古墳が多く、字南平に一一基、字井貫迫に六基、字染野平に五基、字南大平に一基、字上西平に三基、計二六基が県の指定となつている。このうち南平の一一基と井貫迫の六基および上西平の三基は、明治四十二年に出版された中村徳五郎氏著「日本開闢史」に出ているもので、井貫迫の六基は明治十六年、上西平の三基は萬延元年に掘り出されたものと書いてある。それで染野平の五基と南大平の一基がその後見いだされたものと思われる。このうち染野平の五基は、四基が畑地にあり一基が原野となつているが、原野の一基は地番が一、九一七ノ一とあつて今回発見されたものと同番地であるばかりでなく、今回発見のものも原野にある関係から、これは指定古墳ではないかとも疑がわれたが、今回のものは蓋をしたまま発見されたことと、このすぐ上の同番地にあつた横穴が一基カーブを広くした際に壊されたというから、指定古墳は壊されたものであつたことが知られた。

二、発掘の結果

翌十日町教委の臼井、黒木両氏の協力を得て発掘調査を行なつたが、この古墳は東から西に向つて傾斜している丘地に営まれているので、羨道を西に、玄室を東にして造られている。そして羨道と玄室との中軸線は東西の方向より二三度北に傾いている。

羨道は比較的小さく、幅五〇センチ、長さ（奥行）南側三五センチ、北側四〇センチ、高さは約七〇センチで天井は平らである。玄室は入口が広く、奥壁は入口より南側において二五センチ、北側において四〇センチ短かいから合せて六五センチ狭いわけである。そして実測図に見られるごとく、ほぼ隅丸の方形をなしている。羨道は玄室西壁の南隅から五六センチ、同北隅から一メートルのところに開口している。だから西壁の中央よりかなり南に片寄つている。玄室の西壁は、羨道の南側は五センチ東に傾いて長さ五七センチ、同北側は三〇センチ東に傾いて長さ九五センチで、羨道を含めての長さは合計二、〇二メートルであるが、奥（東）壁は長さ一、三五メートルである。玄室の長さ（奥行）は二メートルで、大観すれば玄室は不正梯形をなしている。南北の両壁は、床面から五〇センチぐらいまでは、やや直立的で、それから上が角度をもつている（横断図参照）天井は多少剝落しているが、中央やや前寄りの四〇センチの間が最も高く、床面の上九八センチ内外あり、前方は次第に降つて羨道の天井につながり、後方は漸次降つて奥に達する。そして奥壁は甚だ低い。（縦断図参照）この形は、崩れてはいるが、もと

屋根形、それも寄棟造りの屋根形が崩れたものであることが推察されるのである。

この横穴は、この地方に多い火山灰の凝固した岩磐を掘つて造つているのであるが、玄室の床面には岩磐の上に黄色の粘土を三センチ内外張つていたほか、屍床その他何らの施設もなく、また遺骨も副葬品も何もなかつた。

蓋石は前に書いたごとく、すでに取りはずして傍らに置いてあつたが、羨道入口に残つていた石の跡から見て、この石の頂上は地表下八センチのところにあつたものである。これで羨道の口を塞けば、実測図の平面図と縦断図のようになる。

三、特徴と年代

高千穂町内には多数の横穴古墳があるが、ほとんどみな玄室を数室に区分したり、玄室の床面に蒲鉾形の枕状突起を設けたり、あるいは玄室の床面に屍床を掘りくぼめたりしているもので、この点が高千穂附近の横穴古墳の特徴であり、この形式は県内では他にその例を見ないが、熊本県にはこれがあり、従つてこれは肥後に繋がる文化と見られるのである。

田原の横穴についても、前掲の中村徳五郎氏の「日本開闢史」によれば、井貫迫のものは、

「此の六個並に大小の別なく、墳口（羨道）高さ二尺、幅二尺五寸、其の奥行一尺、墳室（玄室）の高さ三尺五寸、奥行七尺、幅九尺五寸にして、内部の構造は皆三田井附近のものと同一なり云々」

とある。内部の構造が三田井附近のものと同一というのは、前に記したような特徴をもつているという意味である。南平の十一個については、

「其の大なるものは室内（玄室）高さ三尺、奥行九尺、幅亦た之に同じ、此の内或は壁側に柵を設くるものがあり、而して特に此の十一個は、他の古墳に比すれば、其の墳口（羨道）頗る大にして、墳口の前面上部には穹状のひさしありて、地盤よりの高さ六尺に及び、室内の天井高くして凡そ七尺に達す、又た特殊の構造とすべし、云々」

と書いている。さらに上西平の三個については、

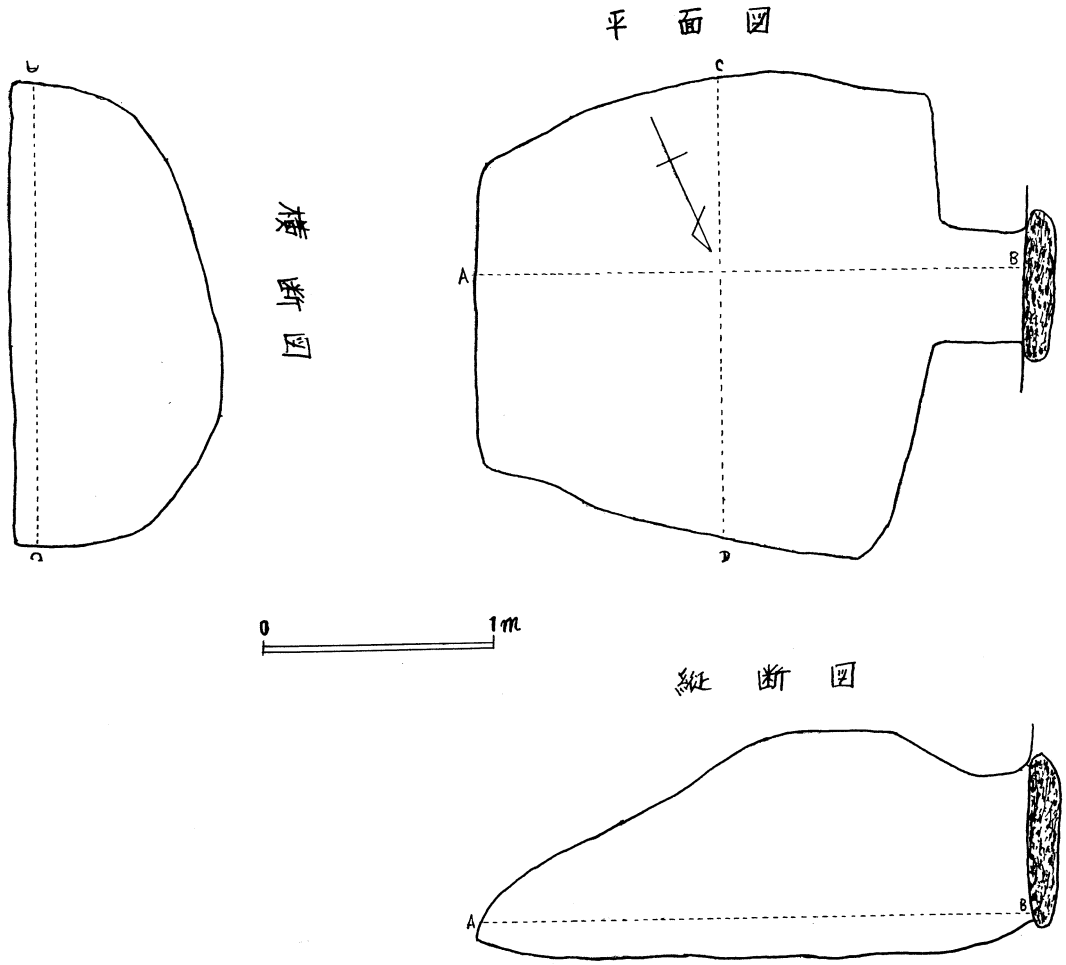
「其の内部の構造又た稍変形にして、其の一は墳口高さ二尺、幅一尺、墳室の高さ三尺五寸、奥行六尺にして、其の幅頗る異状を呈し、室内に於ては八尺を有するも、次第に室奥に向いて狭く遂に七尺となる。其の中央の堺堤及び窪状床の如きは別に異る所なし。他の一は室内高さ四尺、奥行七尺、幅九尺にして、次第に室奥に向いて狭きこと前者に異ならず、殊に中央部の窪状床は著しく深し（中略）予は更に室内を検して小刀一口（長さ四寸五分、幅四分）鉄鏃五個、鉄製宝珠飾二個及び多数の鎧小礼を得たり、此の小礼は其の質の銅鉄を弁じ難しと雖も、鍍するに黄金を似てし、各其の幅七分、長さ五寸二分、皆鋲跟を存す。」

とある。このように最後の上西平の二基はその形が今回発掘のものとよく似ている。だがそれにも拘わらず、玄室の床面に「堺堤」や「窪状床」を設けている。

このように見てくると、今回発見のものはその玄室の床面に「堺堤」（幾体もの屍体を置くための間仕切）や「窪状床」（窪み屍床）を造つていないことで、高千穂地方に多い一般的な横穴と異なり、日向の他の地方に多い横穴と同一であることが知られる。それで今回の発見で、数は少いにしても、高千穂には、間仕切りや窪屍床を有する肥後系の横穴のほかに、一般的な日向系の横穴もあることが知られたのである。しかもそれは形が崩れてはいたが、なお寄棟形の玄室の名残りをとどめていることは注目しなければならない事実である。そういう意味においてこの古墳は学問上重要なものということができる。

次にこの古墳の年代については、横穴古墳全体がそうであるように、古墳時代後期のもので、今から千三百年ぐらい前のものであることが知られる。

高千穂町大字田原字染野平横穴古墳実測図



一一、高崎町縄瀬小学校々庭の地下式古墳調査報告

高崎町縄瀬小学校校庭の地下式古墳調査報告

石川　恒太郎

一、発見の動機

北諸県郡高崎町立縄瀬小学校は先年地下式古墳五基が発見された字共和の東に続く一段低い台地上にあり、嘗て同小学校の校舎を新築したとき数基の地下式古墳が発見されたと伝えられているが、その後も校庭から地下式古墳が一基発見され、当時県立博物館学芸員であつた栗原文蔵氏が調査した。今回発見されたのは、やはり校庭で、運動場に砂利を入れるためトラックが通行中天井部が破壊されて穴ができて発見されたものである。発見されたのは六月二日で、三日町教育委員会よりの報告があり、天候の関係で七日県教育庁社会教育課の加藤主事と現場に出張、同町教委の黒木昭三主事の協力で調査した。今回発見の古墳は同校の新築体育館の東南隅から東々南一七、五メートルの地点で、さきに栗原氏が調査した古墳の北方約三〇メートルであつた。

二、調査の結果

古墳は玄室の天井部が破壊されていたが、竪穴と羨道を西に、玄室を東にして営まれている小形のもので、玄室はほぼ楕円形に近く正確に南北に方位し、長さ一、七〇メートル幅は南側が広くほぼ六五センチ、北側は狭く四五センチ内外であつた。高さ五五センチぐらいで、やはり南側が高く、北方が低かつたが、中央部は天井が剝落していた。このように南が広く、また高く造られていたのは、南に頭を農いて葬られていたためであろう。

玄室はボラ層に掘られており、床面は平らであるが、何らの施設もなく、地表からの深さは一、四〇メートルであつた。床面には人骨一体が頭を南に、足を北にして伸展葬されていたが、玄室が小さいので、玄室に一杯となつていた。頭蓋骨は天井の剝落で下顎骨以外はほとんど壊れ、上腕骨や橈骨、尺骨などは僅かに痕跡を残すのみで、大腿骨と脛骨は残つていたが、その他はほとんど痕跡を止めるのみであつた。

副葬品は何もなく、羨道に近い人骨の西側に埴器の小さい破片があつたが、これは竪穴の上方にあつたものが落ち込んだものらしく竪穴部の黒土の中から同じ破片が数片見いだされた。

羨道は玄室の西壁のほぼ中央に開口していたが、竪穴部とともに破壊されていてその形状を知ることができなかつたが、実測図に見るごとく、玄室への接点は幅約六〇センチであつた。

三、古墳の特徴と年代

この古墳の年代は、比較的浅いボラ層に掘られていること、小形であること、副葬品がないことなどから見て、古墳築造の意欲がすでに減退していることが見られるし、形式的にも地下式古墳の最も後期のもので、奈良期直前ごろのものと思われる。ただ竪穴の位置にあつた埴器の破片は注目すべきもので、坩形の土器ではなかろうかと思われる。恐らくお祭りをした際のものであろう。これは宮崎市下北方町の例と同様であると思われる。

次ぎに古墳と遺物の処理であるが、遺跡は運動場のまん中であるから危険なので直ちに埋め戻し、土の足りない分は同校で埋めるとのことであつた。また人骨は町の遺骨収蔵庫に収めることとした。

高崎町炭床出土の縄文土器について

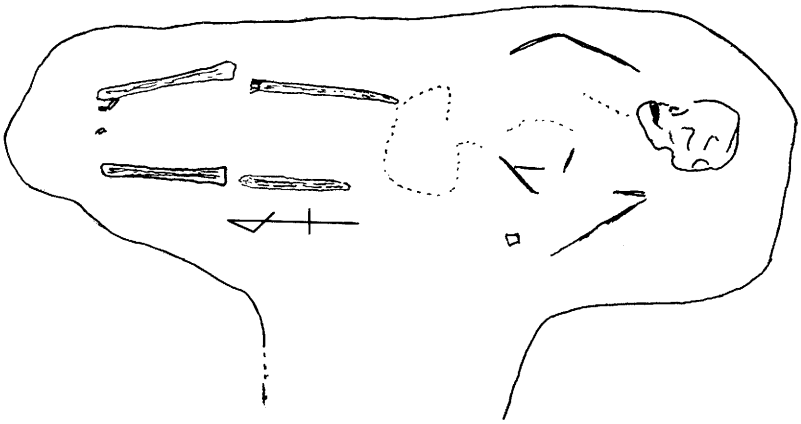
高崎町炭床出土の縄文土器について

昭和四十六年六月七日北諸県郡高崎町の縄瀬小学校々庭で発見された地下式古墳の調査に行った際、同町教育委員会に立寄ったところが、同町教委の黒木昭三主事が同町大字江平字炭床で発掘された土器を示された。底部約半分と胴部三分の一ぐらいの破片であるが、器の表面には全面穀粒形の押型文が施こされ、口縁を欠いているが、口縁の一部と見られる破片には、口唇部の内側にやはり一列の押型文が見える。鉢形の土器で、胴部は底に対して約一二〇度の角度で拡がっており、ほぼそのままで口縁となるようである。底は平底で直径約八センチ、高さも八センチ位であるから復原形は図の如く一九センチぐらいになるものと思われる。胴部の厚さ一センチで、胎土には金雲母を含んでいる。器の割りに分厚でしかも粗笨である。黒木主事の語るところによれば、黒土層の下の硬い褐色の層に入っていたということである。

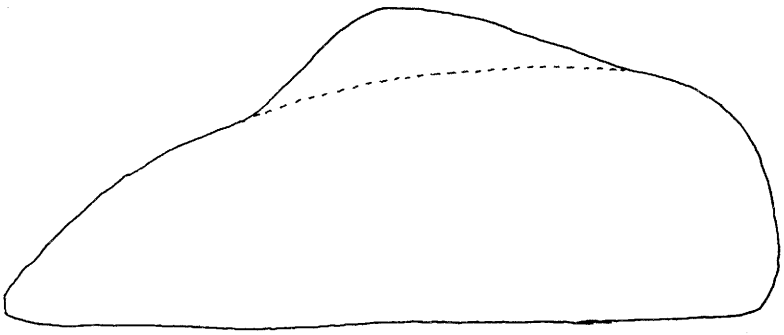
われわれは今年の一月に九州縦貫自動車道路に関する遺跡調査の際、炭床の近くで押型文土器の破片が出ているのを見たが、ここにその正体を発見した思いがした。これは疑いなく押型文土器で、縄文時代早期に編年さるべきものである。幸いに器形も全体を知り得る程度に残っているので極めて重要なものである。そこでここに録存して置くこととする。

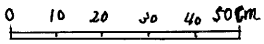
高崎町縄瀬小学校校庭の地下式古墳実測図

（平　面　図）

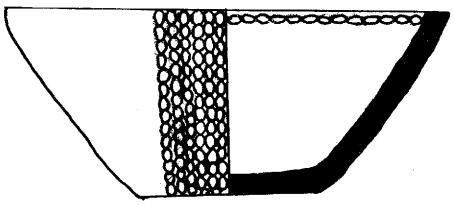


（縦　断　図）





高崎町炭床出土縄文土器復原図



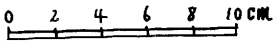


写真 1　縄瀬小学校々庭（古墳は矢印の所）

写真 2　同上栗原氏調査位置（矢印）と
右方台地は字共和

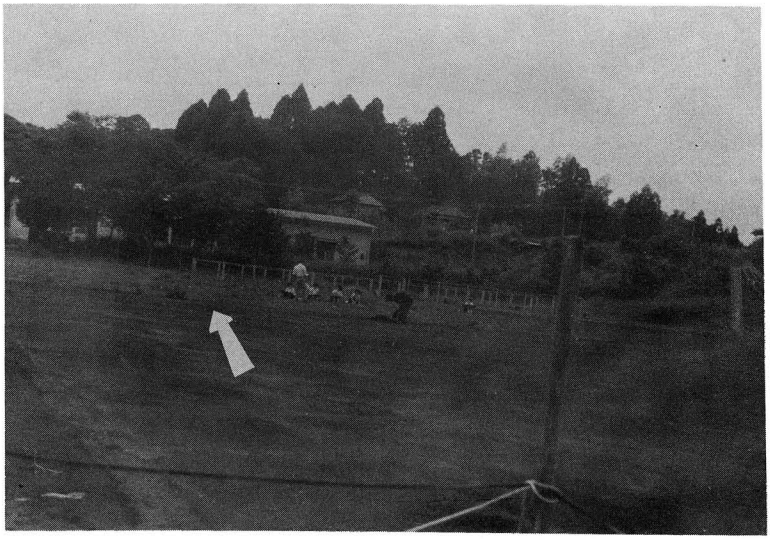
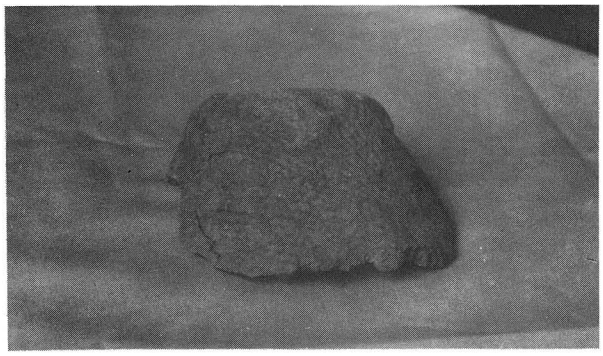


写真３　開口した地下式古墳

写真４　玄室内の人骨

写真５　高崎町炭床出土縄文土器



一二、えびの市島之内の地下式古墳調査報告

えびの市島の内の地下式古墳調査報告

石川恒太郎

一、古墳の所在と発見の動機

えびの市大字島之内字平松の台地は吉都線鉄道加久藤駅と京町駅の中間で水田中に南から北に突出しており、中央を送電線が南北に走つている。この台地の地中には地下式古墳が多く、昭和十年にこの送電用鉄塔が建てられた際、一基が発見され当時県博物館主事だつた故瀬之口伝九郎氏が調査されたものをはじめこの台地上に地下式古墳十二基が県の指定となつている。ほかに円墳も一基あり、最近にも昭和四十一年には県立博物館学芸員栗原文蔵氏が調査し、同四十三年にはえびの地震のため二基の天井が落ちて発見され、これは筆者らが調査した。従つてこの台地にはなお多くの地下式古墳があることは地元の人はよく知つているはずと思われる。

しかるにこの台地の地下には相当厚い礫層があるので、地方の砂利業者がこれを狙い、土地の所有者から砂利を買い取つているが、ここの地下式古墳は砂利層に羨道や玄室を設けて営まれているので忽ち破壊されるのである。今回も七、八基が発見されたらしいが、初めはそれが古墳であることを知らず、人骨が出るに及んで漸く古墳と悟り、市教委に届け出たのであつた。市教委の連絡により四十六年九月三日県教育庁社会教育課の加藤主事と現場に行つて見たが、一基は道路傍らの砂利取場に玄室の壁が壊され（写真7）て、玄室内に人骨一体分が見えており、一基はその西方にブルトーザーが落ち込んで天井の一部を壊され、玄室に数人分の人骨がバラバラになつて見えていた。

二、調査の結果

この台地の従来の発見古墳数が明瞭でないので、取り敢えず東側のものを昭和四十六年第一号地下式古墳、西側のものを同第二号地下式古墳と仮称することにして調査結果を記す。

A 第一号墳

この地下式古墳は、第一図に見られるごとく、竪穴を南に玄室を北にして営まれていたが、その中軸線は南北の方向より約一〇度西に傾いていた。初め玄室の西側に穴があいたらしいが、東側から砂利を取つているので、ブルトーザーの震動で玄室上の土が大きく東西二ケ所に亀裂を生じて、今にも落ちようとする状態であつた。

この地方の地層は厚さ五〇センチ内外の黒色の表土の下に厚さ四〇センチ内外の赤褐色のローム層があり、その下に黄褐色の粘土層が四〇センチ内外入つており、その下は二メートル内外の砂礫層であるが、地下式古墳は砂礫層に羨道と玄室をつくり、玄室の天井を粘土層において営まれている。従つてブルトーザーの震動によつて羨道や玄室の四壁は崩れて正しい形を損じているが、天井部はよく残つて原形を示していた。竪穴は地面から垂直に穿たれていて、上端すなはち地上に接するところで直径五〇センチの円形で、下方に降るに従つて広がり、底部ではほぼ一、一〇メートルの円形となり、南端から約一メートルのところで羨道に接し、地表からの深さは一、五五メートルであつた。そして竪穴は埋められて居らず、頂上は一枚の石で塞かれていた。羨道はその北に接して開口し、羨門には何らの閉塞設備もなく幅約九〇センチ、高さ八五センチ、長さ西側で五〇センチ、東側で約三〇センチであつた。

玄室は隅丸の長方形で東西に長く、南が長く北が短かい梯形をなし、北壁の長さ約一、五〇メートル、南壁の長さは約一、八五メートル、東壁の長さ約一、二〇メートル、西壁の長さは約一メートル

で、羨道は南壁のほぼ中央に開いている。天井は切妻造りの屋根形をなし棟は北壁の南方八五センチのところを東西に走つており、棟の高さは床面から約一メートルで、それを頂点として屋根は北側と南側に降り、北側は床面から高さ六五センチで北壁に接し、南側は棟から三〇センチの南方で南壁に接し、その高さは約八五センチであつた。それでこの古墳は切妻造りの屋根の部分に横から羨道がついているわけで、いわゆる平入りの形である。床面には何らの施設もなく、人骨一体が中央に頭を東に足を西にして葬られていたが、頭蓋骨その他の骨はなく、寛骨、恥骨、大腿骨と他に若干の骨片があるだけであつた。（写真2参照）

第二号墳

第二号墳は第一号墳の西方約六メートルのところにあり、この古墳も竪穴を南に玄室を北に向けてほぼ南北に方位して造られていたが、古墳の中軸線は南北の方向より二五度東に傾いていた。第二図に見ゆるごとく、形は第一号とほぼ同じであつた。竪穴は地上より垂直に穿たれ、地上に開く上端で直径約五〇センチの円形をなし、降るに従つて広がり、底部は長径約九〇センチ、短径約六〇センチの楕円形をなし、深さは地上から一、六六メートル、竪穴は中空で上端を厚さ四センチ内外の薄く平たい石で塞いでいたらしく、蓋石二枚があつたが、恐らくブルトーザーで割られたものであろう。羨道はその北に開口していたが、やはり羨門には何らの施設もなかつた。羨道は幅約五〇センチ、高さ約九〇センチ、長さ西側で六〇センチ、東側で約五〇センチで西側が長い。

玄室は東西に長い隅丸長方形であるが、南東の壁が広くなつているのは、この部分にブルトーザーが落込んだので壊れたのであろう。それで東西の長さ一、九五メートル、南北の幅約一、三〇メートルの隅丸長方形であつたものと思われる。それにしても羨道は中央よりかなり西寄りにあつたものと思われる。天井はやはり切妻造りの屋根形で、棟は玄室のほぼ中央を東西に渡し、高さは床面から一、三〇メートルであつた。だからこの古墳も切妻造りの平入り形である。床面は平たく、敷石などはなかつたが、ブルトーザーが落ち込んだため骨片が全体に散乱し東北部のところに半ば完全な頭蓋骨一個と半分に割れた頭蓋骨数個が重なつており（写真3参照）、その南側に大小の骨片が混乱している中に頭蓋骨の西方に朱を塗つた下顎骨があり、その西方に寛骨と大腿骨が一個あり、その南に接して貝釧をはめた橈骨と尺骨が二個あつた。その南には上腕骨らしい骨片があり、その南には下顎骨が歯を上にしてあつた。西側には北壁に近く大腿骨がありその南に膝蓋骨らしい骨片があり、その南にも大腿骨らしい骨片があり、その南方これと併行して大腿骨、脛骨らしい骨片があつた。その南の西南隅にはへの字形に曲がつた刀身と、その西方壁に接して鉄鏃数本が重なつていた。（写真4参照）また刀の東には三角形に骨片があり、その南に刀の柄部が折れて飛んでいた。このように雑然たる状態で、何体分の人骨が葬られていたかは明らかでなかつたが、東方に頭蓋骨が多く、西方に大腿骨などが多いことから見て、この古墳にも頭を東に足を西にして数体の人骨が伸展葬されていたことが知られるのである。本墳の遺物は次の通りであつた。

一、人骨　数体

頭蓋骨のうち比較的よく残つていたのは東北隅にあつたもので、鼻骨から上が残つており長さ一八センチ、幅一五センチで全面に朱が塗られて洗骨されており女性の骨と思われた。割れた頭蓋骨にも朱を塗つたものがあり、ほぼ中央にあつた下顎骨にも朱が塗られていた。この下顎骨は男性のものと思われたが、要するに男女二人の壮年者の骨が洗骨されており、他に一人あるいは二人の朱の塗つてない頭蓋骨があるわけで、少なくとも三人、多ければ四人分の人骨があつたと思われる。

二、副葬品

イ、刀　一振（写真5）

ほぼ中央からへの字形に曲つており鋒と柄頭部を欠損している。ブルトーザーが落ち込んだとき刀身は曲がり、両端はふつ飛んだの

であろう。現長五九、五センチ、身の長さ四六、五センチで身は鐔元が狭く幅二、三センチ、先端の折れている所で幅三センチである。棟幅は〇、六センチある。鐔元に鞘の木質を残している。柄は長さ一三センチ、茎幅二、五センチ、厚さ〇、六センチで木質がついている。

ロ、鉄鏃　八本（写真6）

鉄鏃は総計八本で、うち四本は平根式であり、四本は尖根式である。平根式のうち三本は剣先形で一本は柳葉形である。

平根剣先形の一は全長一四、七センチ、最広部の幅三、四センチで矢柄が着いている。

同形の二は全長一五、五センチ、最広部の幅四センチ、矢柄はついていない。

同形の三は全長一五センチ、最広部の幅三センチ、矢柄が着いている。

柳葉形は全長一三、五センチ、身幅二、五センチ、矢柄はない。柳葉形としては大きく珍らしいものである。

尖根式のうち三本は柳葉に似た形で、一本は刀形である。

柳葉類似の一、全長一三センチ、身幅一、五センチ、矢柄がついている。

同形の二、全長一四センチ、身幅同、矢柄附着

同形の三、全長二〇、五センチ、身幅同、長い矢柄がついている。

刀形のものは身の大部分を欠損しているが全長一三センチ、但し接合しない。身幅一、五センチ、棟幅〇、五センチである。

ハ、貝釧　破片（写真5の下）

橈骨と尺骨にはまつたものが並んで二組あつたが、壊れていて何個分かわからないが、大きさは四個分にあたる。イモガイを輪切りにしたものである。

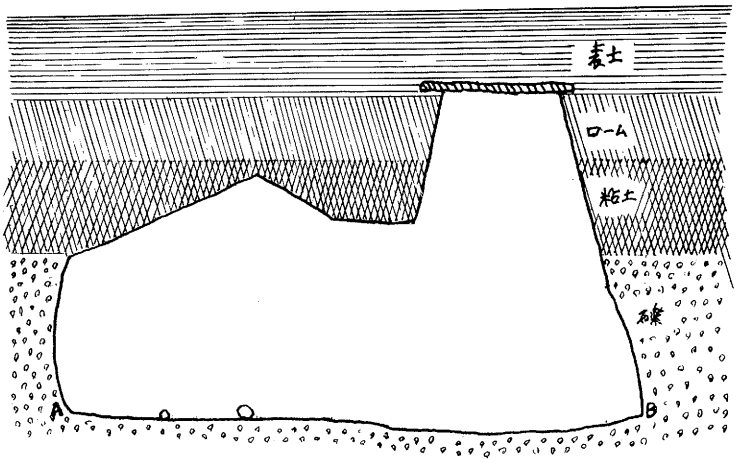
三、古墳の特徴と年代

この古墳の地下式古墳としての特徴は、竪穴が円形であることと、竪穴を埋めずに穴の入口に蓋石を有すること、および玄室が切妻造りの屋根形で、羨道から平入りになつていることであるが、竪穴が空洞で蓋石を有するものは県内ではえびの市に多く見られる。入口を底より小さくしているのは蓋をするのに便利なためである。円形の竪穴はえびの市から鹿児島県に多い。切妻造りの天井にしても四注造（寄棟式）にしても妻入り形のものが古く、平入り形のものは新らしい。円形竪穴も後期のものである。従つてこの古墳は地下式でも時代の降るもので千三百年ぐらい前（奈良朝直前）のものと見るべきであろうと思う。

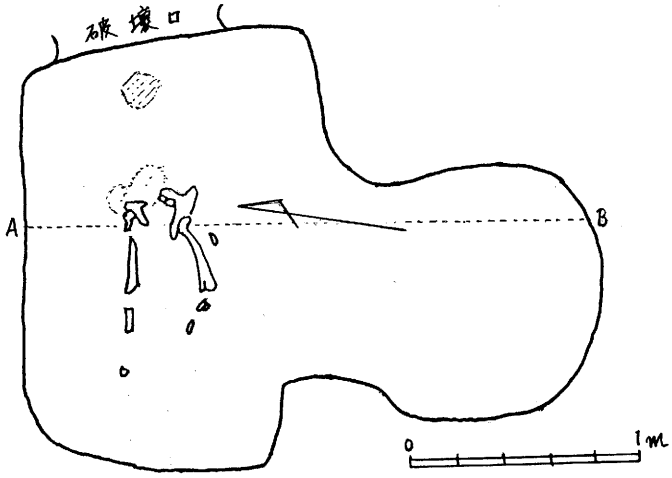
なおこの地方の地下式古墳は殆んどみな地表下の砂礫層に設けられているので、台地の砕礫層の砂利採取を制限しなければ、この地方の地下式古墳は全滅するものと思われる。

第１図　えびの市平松昭和46年第１号地下式古墳実測図

（縦　断　図）

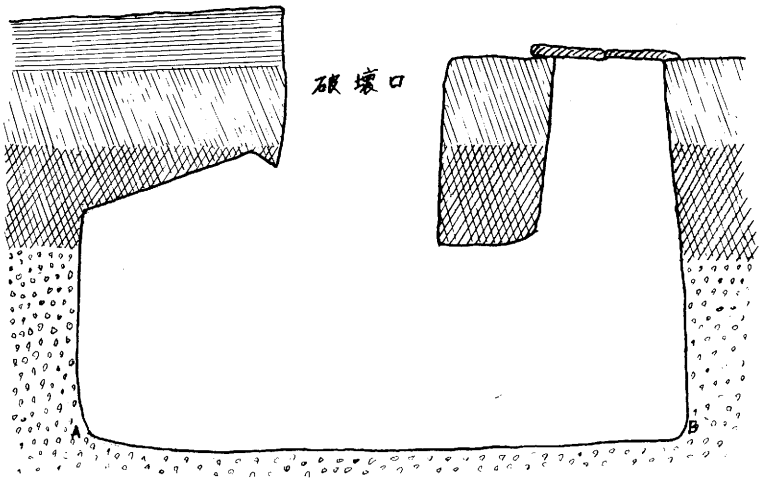


（平　面　図）



第２図　同第２号地下式古墳実測図

（縦　断　図）



（平　面　図）

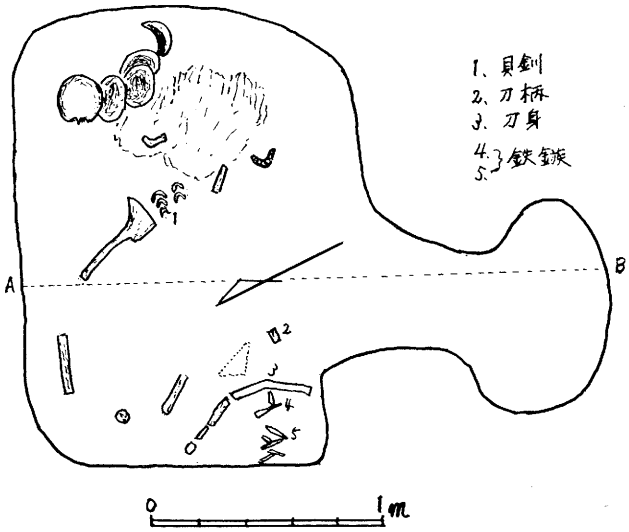


写真1　第1号墳の外観

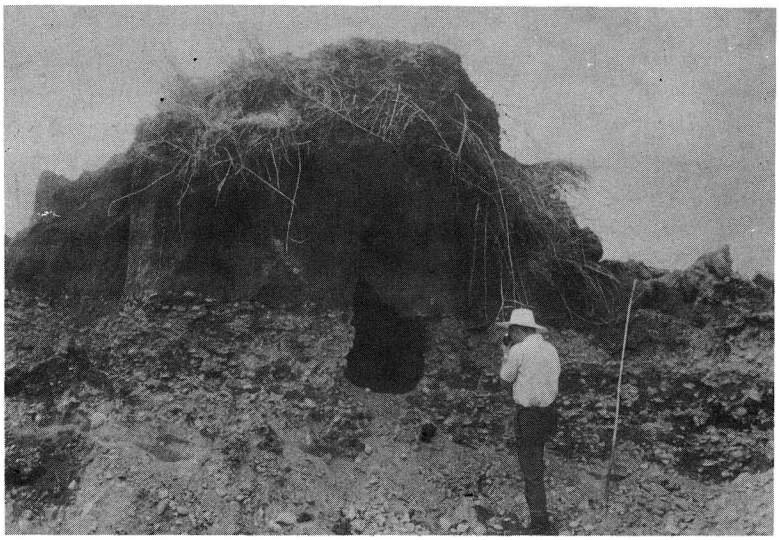


写真2　第1号墳の玄室

写真３　第２号墳の玄室に人骨のある状態

写真４　同上刀と鉄鏃のある状態

写真5　刀と貝釧

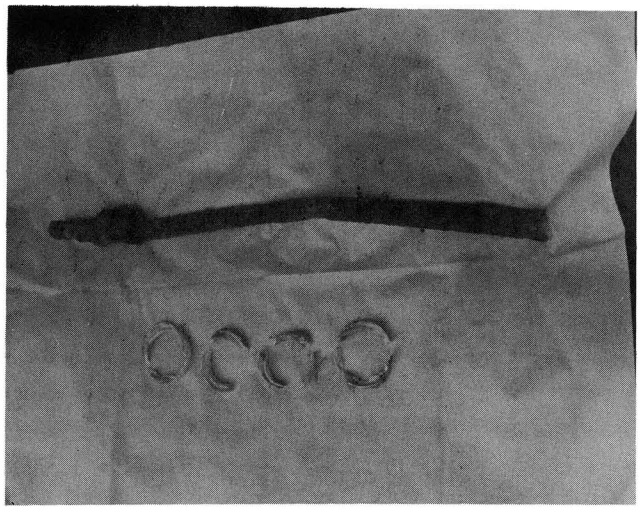
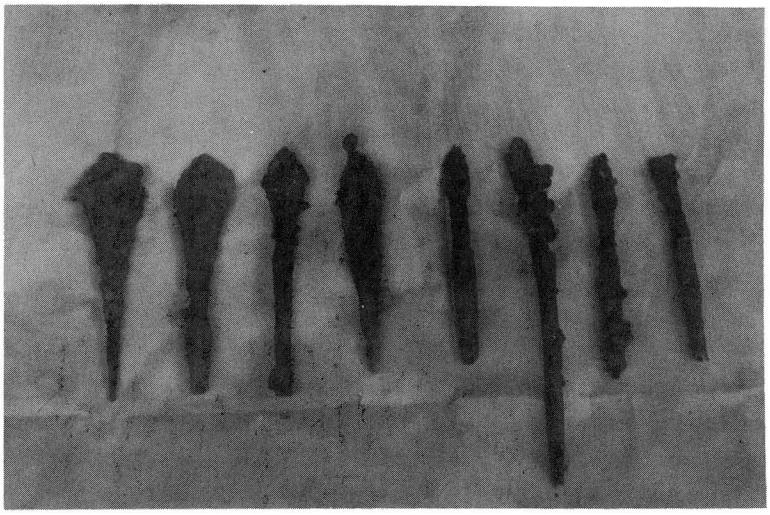


写真6　鉄　鏃



一三、延岡市大貫遺跡調査報告

延岡市大貫遺跡調査報告書

石川　恒太郎

一、発見の動機

延岡市大貫町は五ケ瀬川と大瀬川に挾まれた丘地で、この丘地の南側に縄文前期の貝塚があり、また丘地上には多くの国指定古墳がある。それでこの丘地は極めて古い時代から人類の生活の場となり、縄文時代以来の住居の跡があるものと思われるが、最近この西部の西階の開発に伴ない、この丘地にも開発の手が伸ばされるに致つた。その結果この丘地を開いて住宅団地を造成中に近くの市立西階中学校の生徒がほぼ完全な弥生後期の坩形土器を発掘した。それでここにはその時代の住居址があるのではなかろうかということになり、市教委の連絡により県教育庁社会教育課の寺原文化財係長が現場を見て有望と認め、土器発見場所附近の開発を中止させて発掘調査を行うこととした。

二、発掘の経過

昭和四十六年一〇月三〇日寺原係長と延岡市に出張したが、この日は午前中降雨であつたので市教委にもたらされていた発掘土器を見て現地を視察し、発掘の準備をした。翌三一日現場に行つたが、ここは竹藪で前に杉の造林がしてあつたらしく直径一〇センチ内外の杉の株が一定の間隔をおいて並んでいた。従つて発掘は竹の根と杉の株を取除かねばならなかつたが、前に土器が発見されたところの南方に巾二メートル、長さ一〇メートルのトレンチを南北の方向に設定し、これを二メートル刻みに北からABCDEの五区とした。そして表土を除くとC区の中央附近にローム層が見いだされた。しかしロームはその南方にはなかつた。それでトレンチを南方に長さ四メートル延長し、これをEGの二区とした。するとG区にかなり厚めのローム層が出た。

翌一一月一日は、G区のロームを中心にしてローム層の切れ目を追跡するため、トレンチを東に向かつて巾二メートル、長さ南から一二メートル拡長し、さらにFGの二区を東に一メートルだけ拡張した。その結果ここのローム層が掘り取られている範囲を明らかにしようと思つたが、ロームの層は極めて薄い上に、この地のすぐ下に住む歌人の柳田国夫氏からこの土地はすでに一時開墾されたことがあるということを聞いた。道理で自然層が乱れていたのである。しかしロームの自然層が竪穴住居を掘り込んだために切り取られている範囲は南はG区、北はC区であり、東は拡張区、西は最初のトレンチ内であることが明らかとなつた。それでローム層の切れ目を追うた結果第一図に示すような長さ七、二〇メートル巾約三メートルが確認された。

第四日目の一一月二日は前日確認した住居址の竪穴内にある土を除いて遺物を調べることとした。発掘途上に見だされた遺物は石器は刷石二個（何れも割れている）石匙一個（摘み部欠損）馬蹄状石一個で、土器は縄文土器破片数点と弥生式土器片数十点であつたが一度開墾されているだけに遺物が少ないことが知られる。縄文土器片は口縁に僅かな突帯を一線めぐらすだけの縄文晩期の破片で、数の少ない点から見ても、比較的上部にあつた点からみても他から混入したものであることが知られる。弥生式土器片はほとんど底部の真黒い土の中にあつたが、第一図に示したほぼ中央南寄りの所から高坏一個が発見された。従つてこれがこの住居に本来のものであつたと思われる。さらに底部には第一図に示したごとく、動いていないと思われる石が西南部と東部にあつたが、この石のある範囲すなはち第一図のCDの線以南がこの住居の本来の形で、北方西側に見られるはみ出しは杉の株による破壊であるが、北方は開墾に当つて壊されたものと思われる。そうするとこの竪穴住居址は南北の長さ約五メートル、東西の巾約三メートルとなり、その中心に高坏があつたことになる。ここに黒い土が多かつたことや弥生式土器の破片

が多かつたことから炉があつたのではないかと思われる。
床面はローム層から一六ー一八センチ低いが、ローム層は地表から五〇センチぐらい下にあるので、当時の地表から三〇ー四〇センチ低かつたものと思われる。

三、遺物

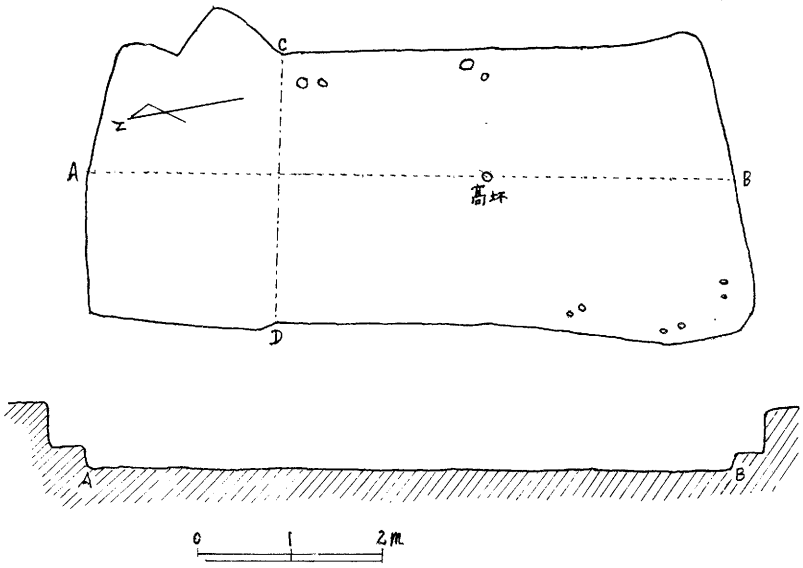
この遺跡の遺物のうち縄文土器片は写真2に示すごとく二個の坩の小片で他より混入したものと思われるので石器としては刷石二個、石匙一個、馬蹄状石一個で写真1に示す通りである。刷石は二個とも割れているが、一面が磨研されている。石匙も摘みがない。このように割れているのは開墾された時の名残りである。馬蹄状の石は上面と下面が水平で他は割り欠がれており、器台ではないかと考えられる。弥生式土器片も小さい破片であるが、かなり大きい土器の破片である。

高坏は七割ぐらいを復原されるもので写真3に見るごとく大体の形状が知られる。皿部は底部のみで口縁がないので明らかでないが現存の高さ一一センチで、脚部はほぼ復原することができる。脚部の高さは八、五センチで、底径は明らかでないが復原して九センチぐらいとなり、上径は四、五センチである。脚は中空で、中空の上部はアーチ形に皿部の底に入つている。脚は裾に大きく拡がるのではなく、やや円味をもつて下降し、少し拡がつているが脚底は外に拡がるのではなく、先端はやや内に曲つている。そして直径約一センチの円形の透しがあるが、これは内側から穿たれている。弥生期の高坏の脚に円形の透しがあるのは寧ろ普通であるが、脚が大きく裾広がりにならずして底端が内に曲つていることは余り例を見ないことで、或いは台付坩ではないかとも思うが皿部の残存があまりに少ないので一応高坏と見て置く。（第2図参照）

四、遺跡と年代

この遺跡は遺物の残存が極めて少なかつたが、同じ延岡市の貝ノ畑の竪穴住居址には極めて小形の坩がただ一個だつたから、それよりは多いわけである。この住居址からは柱穴の検出ができなかつたが、土地を開墾で攪乱されていたのと、土地の地層がローム層が薄い上にその下は黒い土で柱穴の検出は不可能であつた。遺跡の年代は高坏の脚部の形から見て弥生時代の後期と思われる。

第1図　延岡市大貫遺跡実測図



第2図　高　坏　復　原　図

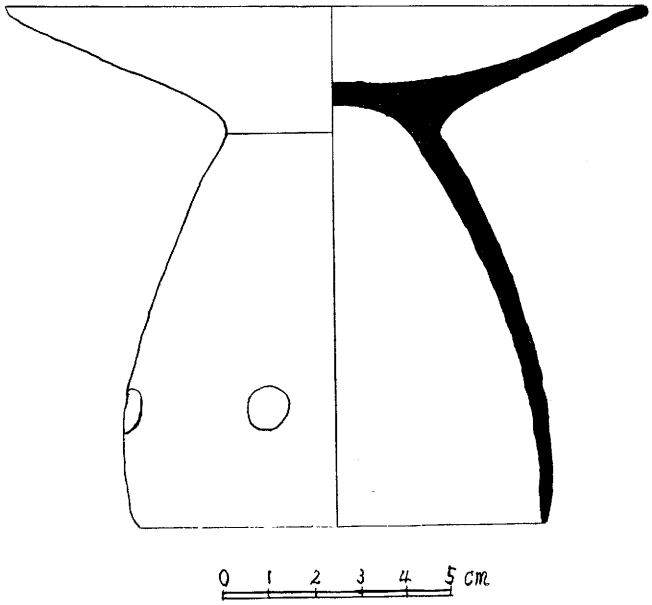


写真1　石　　器

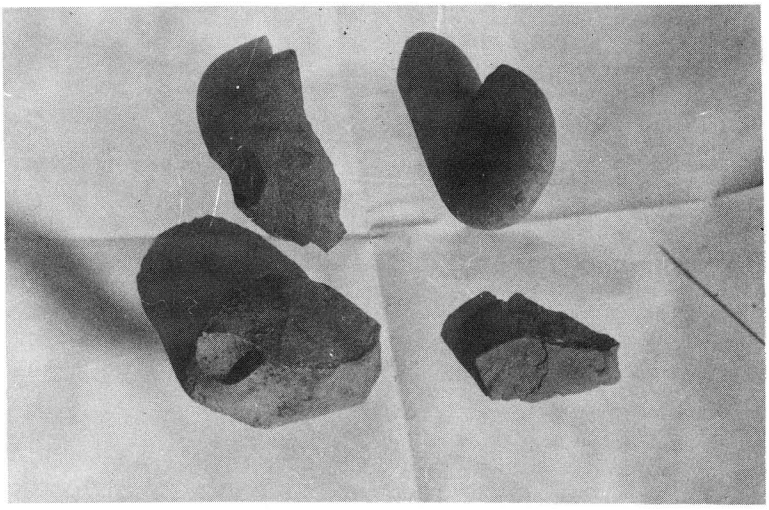


写真2　縄文土器片

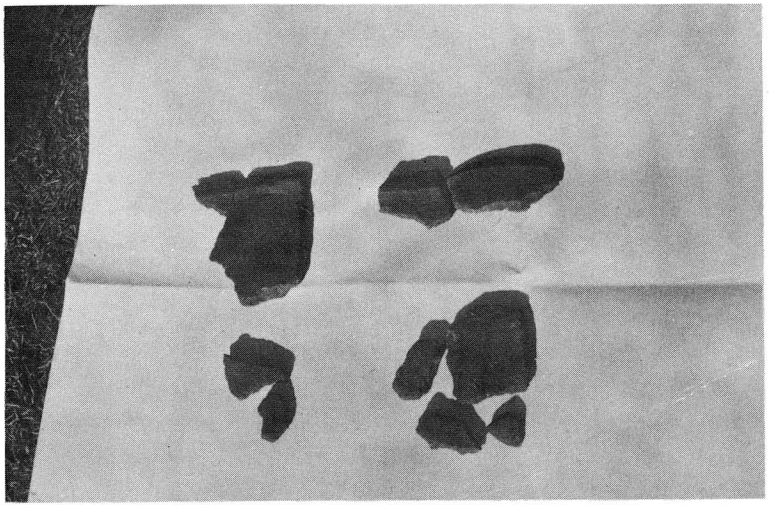


写真3　弥生式土器片

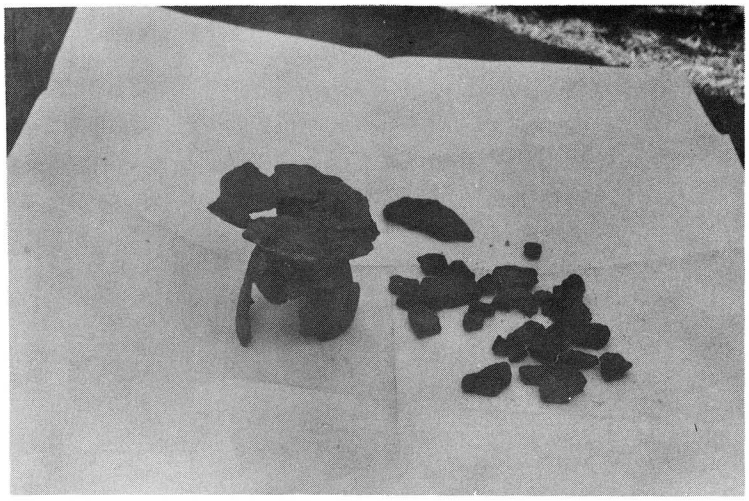


写真4　高 坏（一部復原）

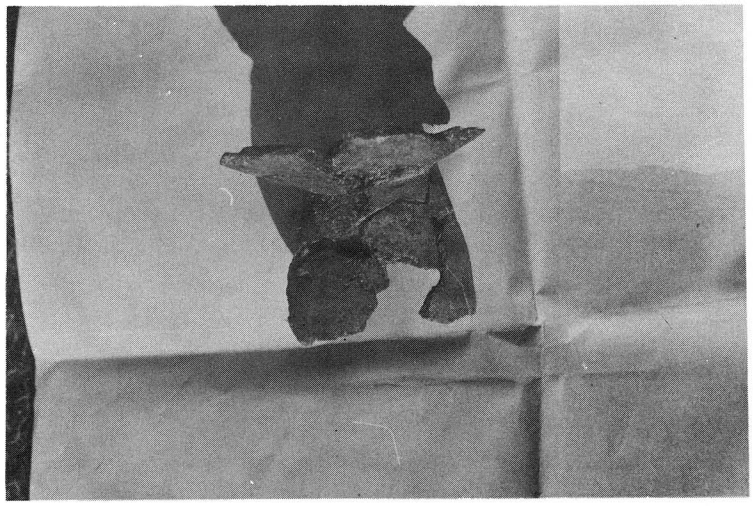
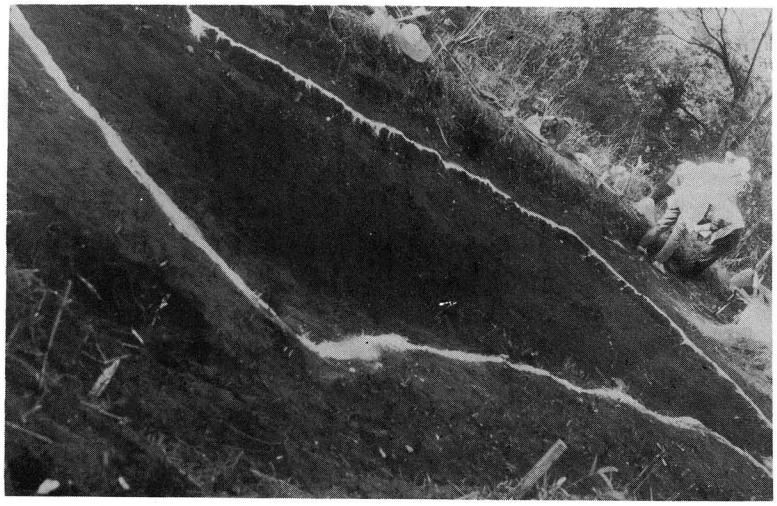


写真5　高坏のある状態

写真6　住居跡の全形



一四、日向市平岩小学校前の古墳調査報告

日向市平岩小学校前の古墳調査報告

石川　恒太郎

一、所在と調査の動機

この古墳は日向市平岩の市立平岩小学校の西側に校地に接して存在する円墳で、南側に校長住宅があり、その庭によつて古墳の南側がかなり削り取られていた。東は校庭に接しており、東側もまた校庭によつて削り取られていた。北と西は畑であるが、これまた畑によつて削り取られて方形に近い形となつていた。この円墳の南に接している校長住宅の南に古墳址があり、今は僅かに数メートルの堤防状の盛土を残しているのみであるが、前方後円墳として、この円墳とともに昭和十二年に県によつて指定されている。

しかるに同市では昭和四十六年度事業としてこの学校の西側に体育館を建設することとなり、この二基の古墳がその建設敷地に入ることとなつた。それで南方のものはこれを復原して残し、北方の円墳は指定を解除して欲しいと申請してきた。県教委では県文化財専門委員会に諮問してきたので同委員会では寺原文化財係長と私が現場を視察してその状況を委員会に報告した。そして委員会で検討した結果、己むを得ない事情にあるので一基の復原を条件として、この円墳は調査の上記録保存することとなつたが、古墳の頂上に三角点があつたので国土地理院によつてこれを移転するのを待つて同年十一月五日六日の両日これを発掘調査した。

二、発掘の経過

この古墳は西方の山地から日向灘に突出した台地上にあり、頂上の三角点は標高二二、六メートルと五万分の一の地形図に記されている。古墳は第1図に示すごとく、南は校長住宅、東は学校の花壇で高さ一、三〇メートル、広さは東西約三、五〇メートル、南北約二、二〇メートルで頂上のほぼ中央に一メートル四方、深さ六〇センチの三角点を掘つた穴があつた。

古墳が小さいので全体を表面から剝いでゆくこととしたが、古墳の全面に亘つて大小夥だしい石が積まれていて作業が困難であつたので、まず中央より西の半分の積石を除くこととした。これらの石は自然の浜石で下の海岸から運ばれたものと思われたが、その状況は写真1に示す通りであつた。そしてこの積石の中には多数の石器が混つており、写真2に示すごとく石錘、刷石、打製石斧、石槌（叩石）などが多かつた。この地方の台地には縄文、弥生期の遺跡があるので、畑を拓いた際に掘り出したものを投げ上げたのであろうが、しかし古墳上の石はその程度のものではなく、一人では抱え得ないような大きいものから小さいものまで夥だしい数で、葺石としてはあまりに石積みが厚いから意識的に積み上げたもので一種の積石塚と見るべきものである。積石の下には黒色の軟かい土が深く入つていた。

翌日はさらに古墳の東半の積石を除いたが積石は古墳の中央より南側に大きい石が多く並べられていたが、棺らしいものは何も発見されなかつた。しかし作業が終りに近づき、校長住宅と校庭に接する古墳の東南端に及んだとき、粘土らしいものがあるのでよく見ると正に粘土であつたが、そこから直刀が一振南北に方位して鋒を北に柄を南にして置かれているのがみつかつた。そこでさらに入念に掘ると、刀の中央から西方二〇センチ隔てて小さい刀子が一振、さらに刀子の南方に約三〇センチ隔てて鉾が袋穂の基底を北にして南北に置かれていた。この状況は写真3および第1図に示す通りである。鉾は袋柄の部分だけで穂先は欠損している。これは古墳が削り取られたとき欠損したものと思われる。

粘土は粘土槨であつて木棺の下と外側を粘土で蔽うていたものであるが、その北半が残つていたわけで、粘土槨はほぼ南北に方位し、残存の長さ約八〇センチ、巾約六〇センチ、槨底の高さは約六センチであつた。粘土槨は全体がないので確言することはできないが、

刀が柄を南に向けていることから見て屍体は頭を南に足を北に向けて葬られていたものと想察される。従つてこの古墳は棺を中心として考えれば相当に大きい円墳であつたわけで、今は四分の一にも足らない部分が残つているに過ぎなく、しかもその大部分が学校敷地と校長住宅によつて破壊されているという動かし難い事実を見ることは誠に遺憾である。

三、遺　物

A、刀　一振（写真4）

八片に折れているが接合して完全形となる総長五三、五センチ、柄の長さ一四センチ、茎巾一、七センチ、厚さ〇、四センチで目釘穴が柄端から一、三センチのところと四、五センチのところに二ケ所見え、四、五センチのところで折れている。身巾は三、三センチで棟巾は〇、六センチである。

B、鉾身　一本（写真4下右）

穂先を欠いでおり現存の長さ一五、五センチ、袋穂でその底部は切り込みとなつており両端の径三センチで穂の基部の折れ口の径は二×一、五センチの楕円形をなしている。袋状のものに入れてあつたらしく繊維の跡がついている。

C、刀子　一振（写真4下の左）

極めて小形で、かつ先端を欠損している。現長六センチ、柄の長さ三センチで木質が残つている。身巾は一、三センチ、棟巾〇、二センチである。

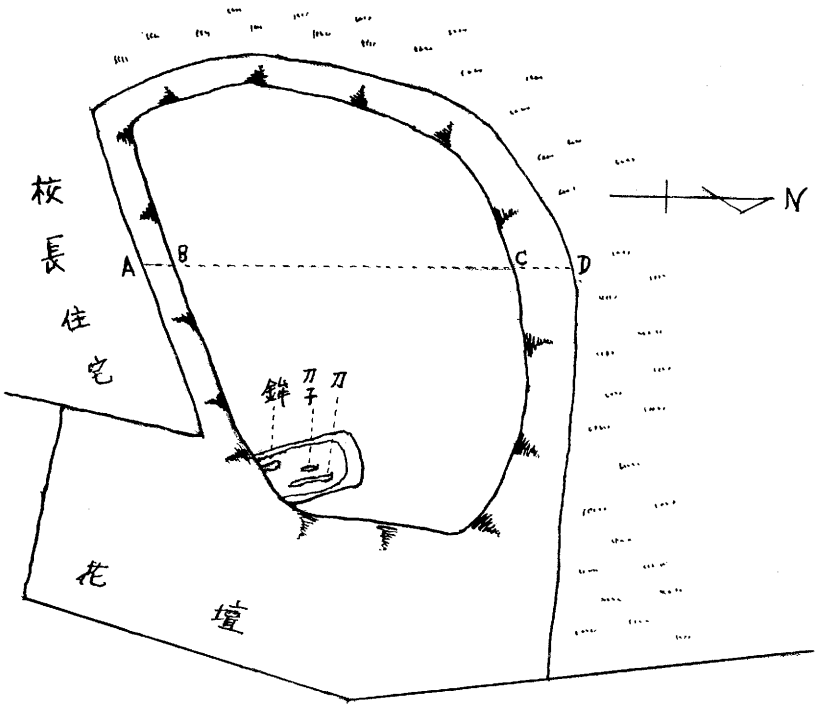
四、古墳の特徴と年代

この古墳は主体が粘土槨であり、その上に積石を施こした一種の積石塚である。積石塚は延岡市や都農町にあるが、延岡市をはじめ一般には千枚岩を用いた箱式石棺の上に石を積んだものが多い。しかるにこの古墳は粘土槨の上に石を積んでいるという珍らしい特徴をもつている。その後私は川南町の北原で同様の円墳が二基あることを確認したが、これは未調査のものであるから確言はできないが築造の方法は同じである。従つてわれわれは宮崎県に新らしい形式の古墳があることを認めることができたわけで、この古墳が学術上に占める価値は大きいものがある。

このようなこの古墳の特徴は、この古墳の年代の決定に重要な関係をもつものであるが積石塚は弥生期の墓制であるけれども、日本では古墳時代にも行われている。しかし積石塚が古い墓制であることや、粘土槨も古墳としては古い時代のものに多いことなどから見てこの円墳は古墳時代前期に属するものであると考えられる。

第１図　日向市平岩小学校前古墳実測図

（平　面　図）



（横　断　図）

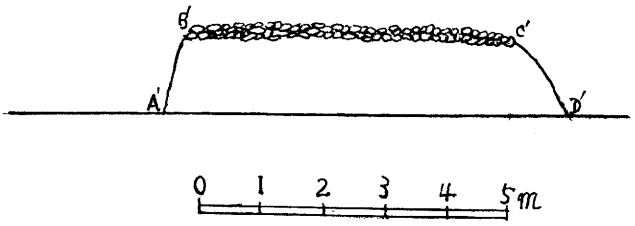


写真1　古墳上の積石

写真2　積石中の石器

写真３　刀、刀子、鉾のある状態

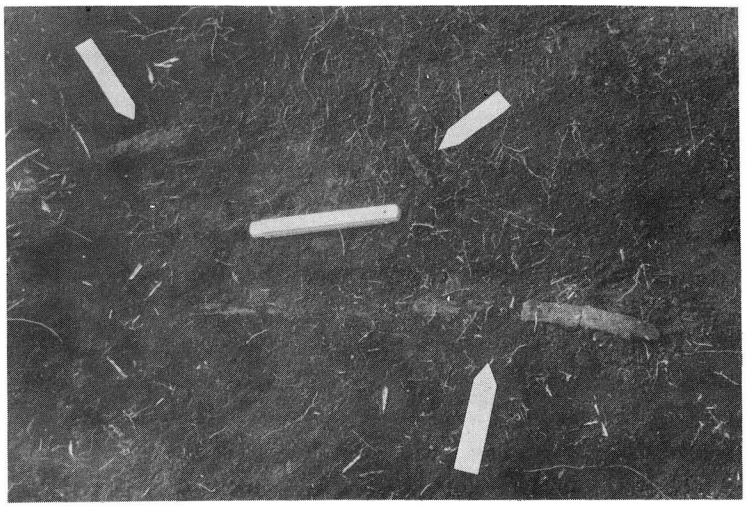
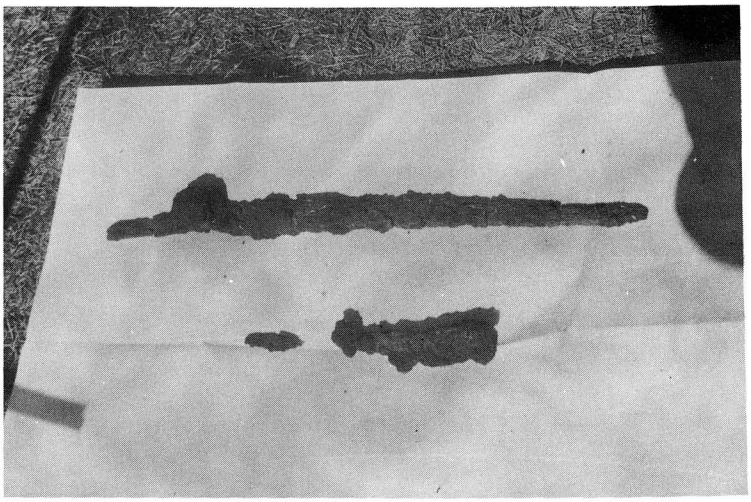



写真４　刀、刀子、鉾